第 II 部　2020-2021 年度における各研究室等の活動

０１　　言語学

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

⑵　大学院の専攻・コースとしての活動

2021 年度現在の教員数は、教授 2 名、准教授 1 名、専任講師 1 名、助教 1 名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室をはじめ、本学の情報理工学系研究科（音響音声学）および附属図書館アジア研究図書館（エジプト語）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近は 18 名前後である。大学院修士課程へは最近は 4 名前後で、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程へはそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。

⑶　学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979 年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学学術機関リポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本言語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会等の委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998 年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年 1 人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。近年は、東京大学総合文化研究科・言語情報科学専攻とも交流演習を実施している。

当研究室では、1998 年以来、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。その URL は次のとおり：http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp

⑷　国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、韓国、中国、ポーランド、トルコ、ロシアなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011 年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011 年 5 月 22 日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150 名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012 年に大学院生 1 名が 1 学期間香港中文大学に留学した。2013 年にも、夏期講座に大学院生 1 名が参加している。さらに、イギリス・カーディフ大学とも交流協定を締結し、2020 年度から提携している。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

西村　義樹（教授）	：認知言語学	2004 年 4 月～現在
小林　正人（教授）	：歴史言語学	2010 年 4 月～現在
長屋　尚典（准教授）	：言語類型論	2019 年 4 月～現在

(2) 講師の活動

梅谷　博之

在職期間　2016 年度～2020 年度

研究領域　モンゴル語

主要業績

（論文）Hiroyuki UMETANI、「Khalkha Mongolian」、『Tasaku Tsunoda (ed.) Mermaid construction: A compound-predicate construction with biclausal appearance, Berlin and Boston: De Gruyter Mouton』、387-417 頁、2020.8

（学会発表）国内、梅谷博之、「モンゴル語におけるクリティックに分類されうる諸要素の特徴」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　共同利用・共同研究課題 「「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)」2020 年度第 2 回研究会（通算第 4 回目）、2020.11.14

白井　聡子

在職期間　2021 年度～現在

研究領域　言語学、記述言語学、チベット＝ビルマ諸語、チァン諸語、ダパ語

主要業績

（著書）共編著、ENDO Mitsuaki, Makoto MINEGISHI, Satoko SHIRAI, Hiroyuki SUZUKI, and Keita kURABE (eds.)『Linguitic Atlas of Asia』、Hituzi Syobo、2021.9

共編著、SHIRAI Satoko and Mitsuaki ENDO、『Studies in Asian and African Geolinguistics II "Grammatical relations"』、Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies、2021.12

（論文）白井聡子、「ダパ語の名詞修飾表現と名詞句標識」、プラシャント・パルデシ、堀江薫（編）『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』、97-117 頁、2020.5

SHIRAI Satoko、「nDrapa」、TSUNODA Tasaku (ed.) 『Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance. Handbooks of Comparative Linguistics 6』、465–509、De Gruyter Mouton、2020.8

SHIRAI Satoko、「A geolinguistic study of directional prefixes in the Qiangic language area」、『Himalayan Linguistics』、19.1、365 - 392 頁、2020.8

白井聡子、「ダパ語における広義の証拠性について」、『言語の類型的特徴対照研究会論集』、3、93 - 110 頁、2021.3

SHIRAI Satoko、「Negative markers in Qiangic languages」、NAGANO Yasuhiko and IKEDA Takumi (eds.)『Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 4: Link Languages and Archetypes in Tibeto-Burman』、243-257 頁、2021.3

SUZUKI Hiroyuki, EBIHARA Shiho, IWASA Kazue, KURABE Keita, and SHIRAI Satoko、「Stop series in Tibeto-Burman」、『Suzuki, Hiroyuki and Mitsuaki Endo (eds.) Studies in Asian and African Geolinguistics I』、42-45 頁、2021.12

SHIRAI Satoko、「Negation in nDrapa: A morphosyntactic description」、HAYASHI Norihiko and IKEDA Takumi (eds.)『Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 5: Diversity of Negation』、167-181 頁、2022.2

SHIRAI Satoko and NAGANO Yasuhiko、「Functional developments of directional prefixes in nDrapa and rGyalrong」、ARAKAWA Shintaro and IKEDA Takumi (eds.) 『Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 3: Function of Directional Prefixes』、81-96 頁、2022.2

SHIRAI Satoko、「Connections of directional prefixes and verb stems in nDrapa」、ARAKAWA Shintaro and IKEDA Takumi (eds.) 『Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 3: Function of Directional Prefixes』、97-110 頁、2022.2

（解説）SUZUKI Hiroyuki, EBIHARA Shiho, IWASA Kazue, KURABE Keita, and SHIRAI Satoko、「Subgrouping of Tibeto-Burman」、『Studies in Asian and African Geolinguistics I』、11 頁、2021.12

（学会発表）国内、白井聡子、「ダパ語及び周辺言語におけるいわゆる「属格」について」、2020 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2021.3.20

国際、SHIRAI Satoko、「Theoretical Frameworks for Grammatical Relations in Asia and Africa」、The 2nd meeting of ILCAA Joint Research Project "Studies in Asian and African Geolinguistics"、ILCAA, TUFS (online)、2021.3.28

国際、SHIRAI Satoko, Shiho EBIHARA, Kazue IWASA, Keita KURABE, and Hiroyuki SUZUKI、「Grammatical Relations in Tibeto-Burman」、The 2nd meeting of ILCAA Joint Research Project "Studies in Asian and African Geolinguistics"、ILCAA, TUFS (online)、2021.3.28

国内、白井聡子、「ダパ語の「焦点」に現れる音調について」、言語類型対照研究会　第 15 回、2021.4.4

国際、SHIRAI Satoko、「Grammatical Relations in Asian and African Languages: Summary of the last meeting」、The 3rd meeting of ILCAA Joint Research Project "Studies in Asian and African Geolinguistics"、ILCAA, TUFS (online)、2021.9.5

国際、SHIRAI Satoko、「Egophoricity in nDrapa: Position and split」、Workshop "Evidentiality 2.0: Integrating egophoricity, focusing on equipollent contrasts, and re-examining visual evidentials"、University of Bern (via Zoom)、2021.9.6

国際、SHIRAI Satoko、「'GO' and 'COME' in nDrapa」、The Sixth Workshop on Sino-Tibetan Languages of Southwest China、Kobe City University of Foreign Studies (via Zoom)、2021.9.8

国内、白井聡子、「川西民族走廊諸語における類別詞」、日本地理言語学会第三回大会、2021.10.2

国内、白井聡子、「ダパ語における類別詞の定義と分類」、チベット＝ビルマ言語学研究会第 54 回会合、大阪大学オンライン、2021.12.18

国内、白井聡子、「ダパ語および他のチャン諸語における対を数える類別詞」、2021 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、京都大学文学研究科附属羽田記念館、2022.3.29

（啓蒙）白井聡子、「四川省の少数民族言語からアジアの「雨が降る」文へ」、『フィールドプラス』、26、10-11 頁、2021.7

白井聡子、「ダパ語の数詞類別詞: 地域的観点から」、UTokyo Linguistics Colloquium、東京大学 (online)、2021.9

SHIRAI Satoko、「The nDrapa language」、Nathan Hill (ed.)『Languages of China』、YouTube、2022.2

（会議主催（チェア他））国際、「Sixth Workshop on Sino-Tibetan Languages of Southwest China」、実行委員、Kobe City University of Foreign Studies (via Zoom)、2021.9.7～2021.9.11

（総説・総合報告）国内、白井聡子、「初級中国語教育における LMS の活用」、青山スタンダード教育機構 2020 年度 全体フォーラム、青山学院大学 via Webex Meetings、2021.1.23

白井聡子、「オンライン初級中国語教育における LMS 活用の報告と課題」、『青山スタンダード論集』、16、51-60 頁、2021.1

（他機関での講義等）非常勤講師、筑波大学、「基礎中国語 A (I) (II)」、2020.4～2022.3

特別講演、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科、「ダパ語の「焦点」表現について」、2021.2

特別講演、『フィールドプラス』カフェ、「四川の少数民族言語からアジアの「雨が降る」文へ」、2021.7

（学会）国内、日本地理言語学会、世話人（ウェブ担当）、2020.4～

国内、日本言語学会、大会運営委員会、2021.8～

(3) 助教の活動

石塚　政行

在職期間　2019 年度～

研究領域　バスク語

主要業績

（論文）Ishizuka, Masayuki、「Ludlings and glides in Basque」、『アジア・アフリカの言語と言語学』、2021

（学会発表）国内、氏家啓吾・石塚政行、「「X は Y が Z だ」の対照―日本語とバスク語の二重主語コピュラ文―」、Prosody & Grammar Festa 4、2020.2

国内、石塚政行「移動類型論における主動詞の概念：バスク語の動詞と行為副詞の観点から」日本言語学会第 162 回大会、2021.6

国内、石塚政行「バスク語の所有コピュラ文と二重主語文」日本エドワード・サピア協会第 36 回研究発表会、2021.10

（学会）国内、日本言語学会、一般会員、2019.4～

国内、日本エドワード・サピア協会、一般会員、2019.4～

(4) 外国人研究員・内地研究員

	2020 年度	2021 年度
内地研究員	0 名	0 名
外国人研究員	1 名	0 名
大学院人文社会系研究科研究員	3 名	2 名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「日本語歌謡曲における特殊モーラの自立性について」
「日本語のささやき発話における子音有声性の判別」
「主節が受動文の場合における、懸垂分詞構文の用例分析」
「日本語の可能/自発表現に見られる与格主語構文の分析」
「日本語の可能動詞文における際立ち表現」
「人以外を表す場合の形式名詞「やつ」の用法分析」
「An Empirical Phonetic Research on the Prenasalised Consonants of Sinhala（シンハラ語の前鼻音化子音に関する実験音声学的研究）」
「情報構造から意味へ：[NP Vpl 在 LocNP]構文と[LocNP Vpl 着 NP]構文の違いについて」
「日本語における「嘘」と「社交辞令」のカテゴリー関係の検証」
「英語前置詞 on の「不利益」用法について ―アメリカ英語における die on NP の多使用論的意味記述―」
「広島市方言における不可能構文 yoo=V-n」
「形容詞＋「すぎる」「そうだ」の間の「さ」の挿入可能性」
「愛媛県松山市方言における命令表現「オ+連用形」と終助詞の相互作用」
「Number marking in Sinhala: Grammatical coding asymmetry and frequency（シンハラ語における数標示の非対称性と頻度）」
「肥筑方言文末詞「タイ・バイ」の用法差の意味論的、語用論的分析」

2021 年度

「アイマラ語の移動動詞の方向接辞について」
「韓国の漫談と日本の漫才比較　M-1 グランプリとジャン・ソパルの作品を中心に」
「受益者が想定されにくい補助動詞テアゲルの用法分析」
「愛媛方言における禁止表現「未然形＋れん／られん」についての考察」
「在日パキスタン人中古車輸出業コミュニティにおける日本語/ウルドゥー語間のコードスイッチング研究」
「コミュニケーションの齟齬についての分析―メッセージと相互行為の視点から―」
「登山地図に見られる地名の言語地理学的分析」
「摩擦音とポケモンの「すばやさ」の関係についての音象徴的研究」
「N+N 複合語前部要素の形態論的諸相：ノルウェー語の複合語リンカーの分析を中心に」
「コーパスを用いた日本語左方転位構文の有題性の考察」
「歴史的現在の小説における効果」
「石川県金沢市方言における意志形を用いた命令表現」
「英語形容詞 unusual の意味について：なぜ it be [adj] that 構文で使用可能なのか」
「インターネットにおける自称詞「ワイ」の使い方の考察」
「take＋X コロケーションの日本語対訳に見る日英間のコロケーションの共通性」
「シンガポールと日本における人の呼び名の用法：社会言語学的アプローチ」
「坂口安吾の評論におけるスタイルシフト」
「太宰治作品における境界性パーソナリティ障害と使用語彙の関連について」
「存在テンプレート所有表現における人間関係をさす被所有名詞と「ある」の共起可能性」
「JPOP における歌詞のアクセントと、東京方言における発話アクセントの関係」
「山梨県甲府市方言における終助詞「さ」の機能について」
「日本語小説における 1900 年代前半と 2000 年代前半の文体の計量的比較」

「コーパスを用いたアイヌ語の他動詞・使役構文の考察」

特別演習 4 名

⑵　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

井坂理奈　「The Meaning and Usage of /pɔ./, a Burmese Sentence-final Particle（ビルマ語文末詞/pɔ./の意味と用法）」〈指導教員〉小林正人

浅野千咲　「The impersonal in the Welsh language（現代ウェールズ語の非人称）」〈指導教員〉小林正人

池辺早良　「Haruki Murakami and Dynamic Equivalence（村上春樹と動的等価性）」〈指導教員〉西村義樹

鎌田寧々　「石川県旧鳳至郡能都町方言のアクセント」〈指導教員〉小林正人

木下蒼一朗　「意図と慣習：発話形式の多声的性格」〈指導教員〉西村義樹

島田翔平　「「東京は神田の生まれ」型表現の意味論的特徴と使用実態」〈指導教員〉西村義樹

鈴木唯　「トルコ語の重複と疑似抱合」〈指導教員〉長屋尚典

松田俊介　「日本手話は世界をどう見るか―類像性・仮想変化・提喩―」〈指導教員〉西村義樹

楊佳銘　「中国語における二音節並列式複合構造の構成要素の順序について」〈指導教員〉西村義樹

2021 年度

喜多直人　「アイヌ語のアスペクト表現 VP kor an, VP wa an の意味記述」〈指導教員〉西村義樹

望月琢斗　「フィン諸語における系統関係の再検討―系統樹と波状図の立体的提示による記述の提案―」〈指導教員〉小林正人

大西貴也　「中世から近代のデンマーク語における定動詞・副詞の出現位置の調査および語順変化の要因について」〈指導教員〉小林正人

神田知哉　「日本語の非対立ヴォイスの意味論的考察―受身文を中心として―」〈指導教員〉西村義樹

島健太　「現代中国語の接語“们”の意味と機能」〈指導教員〉長屋尚典

谷川みずき　「Norwegian STÅ-COPULAR construction: A Construction Grammar analysis（ノルウェー語の STÅ コピュラ構文：構文文法による分析）」〈指導教員〉長屋尚典

MARTINEZ MANCIA Andres Enrique　「Wish Constructions:Their Semantics, Form and Connection to Other Categories（願望構文―その意味、形式、および他の意味範疇との関係―）」〈指導教員〉西村義樹

⑶　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）（乙）

なし

2021 年度

（甲）

野中大輔　「認知言語学の観点から見た英語の構文選択―捉え方の意味論と使用基盤モデルに基づく場所格交替の分析―」

〈主査〉西村義樹〈副査〉小林正人・長屋尚典・篠原俊吾・住吉誠

佐々木充文　「Configurationality in Ixquihuacan Nahuatl（ナワトル語イシュキワカン方言における階層構造性）」

〈主査〉小林正人〈副査〉西村義樹・長屋尚典・梅谷博之・内原洋人

鍛治広真　「エウェン語の接尾辞異形態交替規則と語幹の交替」

〈主査〉小林正人〈副査〉西村義樹・長屋尚典・梅谷博之・林徹

大山祐亮　「共通スラヴ語―印欧祖語からスラヴ語派に至るまでの音韻・形態法の通時的変化の研究―」

〈主査〉小林正人〈副査〉西村義樹・長屋尚典・白井聡子・荻原裕敏

（乙）

なし

０２　　考古学

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

東大考古学研究室では、伝統的に「東アジアのなかの日本」という視点を重視してきた。研究科内の北海文化研究常呂実習施設、あるいは学内の総合研究博物館、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、北アジア、西アジア等の考古学分野や年代測定学等の関連分野の教員と協力し、幅広く教育研究活動を展開している。

⑵　大学院の専攻・コースとしての活動

北海道における調査活動は 60 年以上に及ぶ。北海文化研究常呂実習施設と共同で、2009 年度より大島 2 遺跡の調査をおこなっている。

佐藤を代表として 2015 年度から 2018 年度まで、現生人類のアジア拡散南周りルートの研究（科学研究費基盤 B）を実施し、インドや東南アジア・台湾等での現地調査をおこなった。続けて 2019 年度から現生人類のアジア早期拡散に関する研究（科学研究費基盤 B）を開始し、東南アジア・南アジア等の現地調査を実施している。また 2018 年度から中央アジアにおける後期旧石器時代の成立過程に関する国際共同研究（国際共同研究加速基金、基盤研究 B［研究分担者］）を開始した。

設楽を代表として 2016 年度から前年度までの継承的な研究として東日本における食糧生産の開始と展開に対してレプリカ法を中心とする研究（科学研究費基盤研究 A）をスタートさせ、2018 年度まで実施した。また 2019 年度からは縄文時代の土製耳飾りから当時の社会にせまる研究（科学研究費基盤研究 C）を開始した。

福田を代表として日露国際学術交流を推進した。2018 年度から 2021 年度まで温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（科学研究費基盤研究 B）プロジェクトを実施し、2021 年度からは「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」（科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を開始した。ロシア国内ではサハリン国立大学およびハバロフスク地方郷土誌博物館、日本国内では稚内市教育委員会および北海文化研究常呂実習施設と連携し、日露両国における先史遺跡群の発掘調査を実施した。

根岸は 2021 年度から、学術変革領域研究（A）「土器を掘る：22 世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究」（2020～2024 年度）の研究分担者として、東日本における栽培植物出現の年代と文化変容の時期を解明する研究を開始した。縄文晩期から弥生時代への移行期における年代・生業・物質文化に関する共同研究を実施し、翌年度の日本考古学協会総会セッションへの準備作業を行った。

⑶　学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

『東京大学考古学研究室研究紀要』は、2020 年度は 34 号、2021 年度は 35 号と順調に刊行された。すべて下記の考古学研究室 HP 上にて公開している。

考古学研究室のホームページの URL は https://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/

⑷　国際交流の状況

考古学研究室とハバロフスク地方郷土誌博物館、バロフスク地方歴史文化遺産保護センター、サハリン国立大学考古学教育博物館と交わしている研究交流に関する覚書にもとづき、日露国際学術交流を進めた。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

佐藤宏之　旧石器考古学・民族考古学（2021 年度まで）
設楽博己　縄文・弥生時代考古学（2020 年度まで）
福田正宏　東北アジア考古学（現在に至る）
根岸洋　　縄文・弥生時代の考古学、民族考古学（現在に至る）

⑵　助教の活動

石川岳彦
　在職期間　　2016 年度～2020 年度
　研究領域　　東アジア考古学
金崎由布子
　在職期間　　2021 年度
　研究領域　　アンデス考古学

主要業績

（著書）共著、Depaz, D., Kanezaki, Y., Otani, H.、『Proyecto de investigación arqueológica: Vichaycoto, distrito de Pilcomarca, provincia de Huánuco, departamento de Huánuco. Informe final presentado al Ministerio de Cultura, Perú』、2020

（論文）Kanezaki, Y., Omori, T., and Tsurumi, E.,、「Emergence and Development of Pottery in the Andean Early Formative Period: New Insights from an Improved Wairajirca Pottery Chronology at the Jancao Site in the Huánuco Region, Peru」、『Latin American Antiquity』、32(2)、239-254 頁、2021

（予稿・会議録）国内会議、金崎由布子、「土器・ベイズ・時間性：紀元前二千年紀のワヌコ盆地の編年をめぐる一考察」、古代アメリカ学会第 13 回東日本研究懇談会、オンライン、2021.5.29

国内会議、金崎由布子、大谷博則、ダニーロ・デパス、「ワヌコ盆地におけるレクワイ文化初期の痕跡：ビチャイコト遺跡の調査成果から」、2022.12.4

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「縄文中期における甲信地方の土鈴の検討」

「縄文時代後期後葉～晩期の北海道の土偶について」

「博多湾周辺地域における高麗青磁の編年の再検討」

「武蔵国における古墳と古代寺院の位置関係についての考察」

「鉄器時代ズィンジルリ・ホユックにおける都市構造についての考察―城壁のプランとシタデルの位置関係を中心に―」

「ギョベクリ・テペを中心とする先土器新石器時代の儀礼的要素に関する考察」

「2010 年代の漫画作品における考古学者」

2021 年度

「弥生前～中期における石製武器の発達の研究」

「東北地方の縄文晩期の土器にみられる矢羽状沈線文について」

「有明海沿岸部を中心とした刳抜式石棺の規格と輸送について」

「鶴見川流域の縄文時代石錘」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

佐野良彦 「耳朶穿孔に関わる考古資料の吟味―耳飾り研究における耳朶穿孔の重要性を問う―」〈指導教員〉福田正宏

柴原聡一郎 「伊勢湾西岸地域における前方後円墳の設計」〈指導教員〉設楽博己

萩野はな 「北筒式土器の成立と展開に関する研究」〈指導教員〉福田正宏

ト半馨 「北メソポタミア後期銅石器時代土器の年代的変化と地域性―シリア、テル=コサック・シャマリ遺跡出土土器を中心に―」〈指導教員〉西秋良宏

2021 年度

工藤景史 「刀剣類からみた擦文文化期における北海道と本州の交流について」〈指導教員〉熊木俊朗

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

新井才二 「先史時代西アジアとその周辺における偶蹄類家畜の拡散プロセスの研究」

〈主査〉西秋良宏〈副査〉佐藤宏之・設樂博己・福田正宏・本郷一美

小原俊行 「関東平野北西部における後期旧石器集団の居住形態の変遷」

〈主査〉佐藤宏之〈副査〉設樂博己・福田正宏・長﨑潤一・森先一貴

林正之 「古代東北地方社会構造の研究」

〈主査〉設樂博己〈副査〉佐藤宏之・福田正宏・滝沢誠・田中裕

山下優介 「弥生・古墳時代移行期における近江系土器の移動とその背景」

〈主査〉設樂博己〈副査〉佐藤宏之・福田正宏・滝沢誠・長友朋子

太田圭　「縄文時代中期／後期移行期における社会変容プロセスの研究」
〈主査〉佐藤宏之〈副査〉設樂博己・福田正宏・阿部昭典・根岸洋
金崎由布子　「南米ペルー、ワヌコ盆地の紀元前二千年紀の社会動態」
〈主査〉佐藤宏之〈副査〉設樂博己・福田正宏・鶴見英成・松本雄一

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

山本 尭　「東周時代青銅器の生産と流通―華中地域を中心に―」
〈主査〉福田正宏〈副査〉佐藤宏之・根岸洋・大貫静夫・角道亮介
西村広経　「日本列島東北部における縄文時代後期中葉土器群の研究」
〈主査〉福田正宏〈副査〉佐藤宏之・根岸洋・設樂博己・高橋龍三郎
髙屋敷飛鳥　「南関東地方における砂川期の行動論的研究」
〈主査〉佐藤宏之〈副査〉福田正宏・根岸洋・長﨑潤一・国武貞克

（乙）

なし

０３　　美術史学

1.　研究室活動の概要

1910 年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917 年、「美学美術史」と改められた。1963 年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5 年後に、第二類（史学）へと移る。1994 年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995 年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

2019 年度末に佐藤康宏教授（日本美術史）が定年退職、2021 年 4 月に増記隆介准教授（日本美術史）を迎え、2021 年度の教員は、教授 1 名、准教授 2 名である。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言い難い。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員 4 名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センターの教員 1 名の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多い。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も教授 1 名、准教授 1 名が美術史学会の常任委員を務め、学会活動を主導した。1985 年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年 1 冊発行し、既に 38 号（2022 年）に至っている。特色ある教育活動としては、毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

秋山聰教授　　（西洋美術史）
髙岸輝准教授　　（日本美術史）
増記隆介准教授　　（日本美術史）

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「久保惣本伊勢物語絵巻について―図様系譜における位置と画面の特質―」
「17 世紀スペインにおける「聖ベルナルドゥスの授乳」―ムリーリョの作品を中心に―」
「戦時中、兵器開発の最前線にいた秀才たちがなぜ SF 的「未来兵器絵」を生み出したのか――美術家の作品中心の昭和戦争期美術史に提出する一検討――」
「ファン・エイク作《アルノルフィーニ夫妻の肖像》とヴィクトリア朝イギリス」
「J.M.W.ターナー《平和―海の葬式》について」
「土佐光信筆「清水寺縁起絵巻」考―光信様式と合戦場面について―」
「「民藝」からの飛躍―異端児としての河井寛次郎と棟方志功―」
「王雲浦与張高士（王雲浦と張高士）」
「俵屋宗達筆「松島図屏風」考」
「ホイッスラーの早期作品　―《白のシンフォニーNo.2　―小さなホワイト・ガール》を中心に」
「ピカソ研究」
「浮世絵に描かれた堀切の花菖蒲―江戸時代からの園芸文化と花の名所―」

2021 年度

「高橋由一の作品とその時代」
「長谷川等伯と信春の接続における諸点における考察」

「曾我蕭白「群仙図屏風」再考 ―図像及び文化的背景の検討―」
「小林清親の花鳥浮世絵をめぐる諸検討」
「エマニュエル・デ・ウィッテの教会室内画に関する一考察　―墓の表現を中心に―」
「國學院大學図書館所蔵「羅生門絵巻」について」
「藤田嗣治「平和の聖母礼拝堂」フレスコ画再考」
「南蛮漆器の聖龕に関する一試論」
「ジャクソン・ポロック研究」
「江戸時代後期京都画壇における岸駒の活動　―岸派の形成過程および円山派との関係に注目して―」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

岡﨑咲弥　「近世初期における都市の変容と洛中洛外図屏風―舟木本を中心として―」〈指導教員〉髙岸輝

2021 年度

原田遠　「戦後アメリカ美術における総合芸術の諸相―オルデンバーグらハプニングの作家を中心に―」〈指導教員〉秋山聰

讃井瑞祥　「本阿弥光悦の茶碗――様式の形成・受容・派生過程の再検討――」〈指導教員〉髙岸輝

森田詩織　「金井烏洲筆「月ヶ瀬探梅図巻」をめぐって」〈指導教員〉板倉聖哲

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

神田惟　「Persian Verses and Crafts in the Late Timurid and Safavid Periods（ティムール朝末～サファヴィー朝期におけるペルシア語詩と工芸品）」

〈主査〉桝屋友子〈副査〉秋山聰・森本一夫・近藤信彰・鎌田由美子

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

（乙）

宮崎法子　「中国絵画の内と外」

〈主査〉塚本麿充〈副査〉髙岸輝・増記隆介・板倉聖哲・小林宏光

０４　　哲学

1.　研究室活動の概要

1877 年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910 年、「哲学」、「史学」、「文学」の 3 学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木厳翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963 年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして 1995 年から 2015 年までは、思想文化学科中の、さらに現在では人文学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953 年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995 年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2022 年 3 月現在の所属教員は、教授 3 名、准教授 1 名、助教 1 名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカヴァーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している（なお、外国人専任講師 1 名が 2016 年度前期まで在職）。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008 年度から 2009 年度は、米国のメアリマウント・コレッジの Roger Robins 教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010 年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに 2011 年 10 月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から 3 名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年 20 名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心がもたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあって重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披瀝と研鑽の場として機能している。2017 年 4 月からは、伝統ある「哲学会」の歴史と近代日本哲学の形成に果たした役割を検証するために、『哲学雑誌』のバックナンバーのアーカイヴ化をもとにした研究プロジェクトを研究室を中心に立ち上げ、2018 年 4 月以降は科学研究費補助金の支援を受け実質的な研究を進めている（2021 年度で終了）。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書も刊行してきた。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2019 年 6 月までに、計 11 回の BESETO 哲学会議が開催された。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

納富信留　　（教授、西洋古代哲学、西洋古典学）
鈴木泉　　（教授、近世形而上学・現代フランス哲学）
古荘真敬　　（教授、近現代ドイツ哲学）
乗立雄輝　　（准教授、近現代の英語圏の哲学）

(2) 助教の活動

平岡紘

在職期間　2018 年度～2020 年度

研究領域　レヴィナスを中心とする現代フランス哲学

主要業績

（論文）Hiroshi HIRAOKA, « « Le langage conditionne la pensée » : Le son et le signe chez Levinas », *Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*, Volume 4, 日本哲学会、208-223 頁、2020.5

（啓蒙）平岡紘、「倫理学入門①――功利主義」、『奈良健康倶楽部』、vol. 9、6 頁、2020.4

平岡紘、「倫理学入門②――功利主義(2)：ミルの自由論」、『奈良健康倶楽部』、vol. 10、8 頁、2020.10

（研究テーマ）文部科学省科学研究費補助金、若手研究、平岡紘、研究代表者、「20 世紀フランス哲学を背景とする後期レヴィナスの自己論に関する分析的研究」、2020～

（他機関での講義等）非常勤講師、成城大学、「倫理学講義」、2020.4～2022.3

（学会）国内、哲学会、委員、2018.4～2021.3

国内、レヴィナス協会、運営委員（会計）、2018.9～

相松慎也

在職期間　2021 年度～

研究領域　デイヴィッド・ヒューム、倫理学

主要業績

（書評）ダグラス・クタッチ（著）、相松慎也（訳）、『現代哲学のキーコンセプト 因果性』、岩波書店、UTokyo BiblioPlaza、https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/G_00029.html、2022.3

（学会発表）国内、相松慎也、「道徳的配慮に値するロボット：道徳的被行為者性の可変性」、第 39 回日本ロボット学会学術講演会オーガナイズドセッション、2021.9.10

国内、相松慎也、「因果性とは何か：言語・概念・実質の交錯」、令和 3 年度 産業日本語研究会 ワークショップ、2021.12.14

（翻訳）マイケル・スロート（著）、相松慎也（訳）、「行為者基底的な徳倫理学」、大庭健（編）、古田徹也（監訳）、『現代倫理学基本論文集Ⅲ 規範倫理学篇②』、183-223 頁、勁草書房、2021.8

（研究テーマ）文部科学省科学研究費補助金、研究活動スタート支援、相松慎也、研究代表者、「ヒューム道徳哲学と現代メタ倫理学を基盤とした道徳判断の心理的・言語的分析」、2021～

（他機関での講義等）非常勤講師、駒澤大学、「倫理学」・「応用倫理学」・「哲学」、2020.4～2022.3

非常勤講師、山梨学院大学、「哲学」・「哲学 I・II」・「論理学 I・II」、2020.4～2022.3

（学会）国内、哲学会、委員、2021.4～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「カントにおける道徳法則の正当化について」

「プラトン『パイドン』篇におけるミソロギアについて」

「ライプニッツ形而上学における悪の問題について」

「デカルト『省察』における「形而上学的な懐疑」についての考察」

「カントにおける時間的継起の秩序と動力学」

「人間機械論の適応行動論に基づく再展開」

「測られる時間と感じられる時間の区別と連関――ベルクソン『時間と自由』の読解をもとに」

「チャールズ・テイラーにおける多元性概念の批判的考察」

「メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における主観性の問題」

「『存在と時間』における時間性の問題」

「『ソリロクィア』における生への愛と知の関係について」

「アリストテレス・ディヴィドソンにおける無抑制について」

「統覚の統一とは何か――カント『純粋理性批判』第二版における演繹論の研究――」

「ロックの人格同一性論について――意識・自己・人格――」

「ヒュームの道徳感情論についての考察　道徳的区別と道徳的行為を実践するために」
「ウィトゲンシュタイン『確実性について』における相対主義問題に関して」
「西田哲学における「論理」の意義について」
「ホワイトヘッドの有機的宇宙観における個人の死について」
「ドナルド・デイヴィドソンにおける根元的解釈と反懐疑論的論証について」

2021 年度

「バークリにおいて物質否定と「観念の原型」は両立しうるのか」
「ニーチェ『道徳の系譜学』における方法と「価値」の問題」
「カント『宗教論』における「善への根源的素質」について」
「ひとはいかにして永遠回帰を望むにいたるか　―『善悪の彼岸』第 56 節の場合―」
「ハイデガー『存在と時間』における情態性について」
「批判期のカントは客観性をどのように基礎付けていたのか」
「ベルクソン『創造的進化』における進化と生命の問題について」
「プラトン『パイドロス』におけるミュートスの役割」
「スピノザ『エチカ』における観念間の因果関係と内在関係について」
「『純粋理性批判』の機能主義的解釈について」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

稲田進一　「Metaphysics as an Inquiry into Cognitive Frameworks（認知的フレームワークの探究としての形而上学）」〈指導教員〉乗立雄輝
中西淳貴　「前期ハイデガーにおける存在了解の転換の問題」〈指導教員〉鈴木泉
杉本英太　「アリストテレスの無矛盾律論」〈指導教員〉納富信留
福地信哉　「カントによる外界の懐疑論批判について――『純粋理性批判』「第 4 誤謬推理」「観念論論駁」の解釈――」〈指導教員〉鈴木泉
柳瀬大輝　「メルロ=ポンティにおける〈弁証法〉の問題」〈指導教員〉鈴木泉

2021 年度

浦野敬介　「道徳の客観性と構築主義」〈指導教員〉乗立雄輝
金川悟之　「マルブランシュにおける叡知的延長について」〈指導教員〉鈴木泉
笹谷賢人　「ホッブズ『リヴァイアサン』の権威論」〈指導教員〉乗立雄輝
松本将平　「知識帰属に関する文脈主義の擁護可能性についての検討―意味論的相対主義者からの批判に応答する―」〈指導教員〉乗立雄輝
渡辺一樹　「バーナード・ウィリアムズの道徳批判」〈指導教員〉乗立雄輝
山室薫平　「On the Feasibility and Infeasibility of Conceptual Engineering（概念工学の実行可能性と不可能性について）」〈指導教員〉乗立雄輝
吉田廉　「推論・知識・真理――アンスコムの実践哲学」〈指導教員〉乗立雄輝

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

相松慎也　「ヒュームにおける道徳性と合理性」
〈主査〉乗立雄輝〈副査〉鈴木泉・納富信留・矢嶋直規・一ノ瀬正樹
鴻浩介　「行為の理由と規範性のジレンマ」
〈主査〉乗立雄輝〈副査〉鈴木泉・納富信留・古田徹也・一ノ瀬正樹
飯泉佑介　「ヘーゲル『精神現象学』研究：「学」としての哲学の歴史的成立とその正当化をめぐって」
〈主査〉鈴木泉〈副査〉納富信留・久保陽一・榊原哲也・大河内泰樹
松井隆明　「Inference, Meaning, and Conceptual Change Wilfrid Sellars and the Dynamics of the Space of Reasons（推論、意味、概念変化　ウィルフリッド・セラーズと理由の空間のダイナミクス）」
〈主査〉乗立雄輝〈副査〉鈴木泉・納富信留・榊原哲也・秋葉剛史
野上志学　「道徳懐疑論研究」
〈主査〉乗立雄輝〈副査〉鈴木泉・納富信留・一ノ瀬正樹・大谷弘

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

丸山文隆 「ハイデッガーの超越論的な思惟の道」

〈主査〉古荘真敬〈副査〉鈴木泉・納富信留・榊原哲也・轟孝夫

今井悠介 「デカルト形而上学研究―存在論の系譜、主にクラウベルクとの対比のもとで―」

〈主査〉鈴木泉〈副査〉納富信留・乗立雄輝・山内志朗・大西克智

（乙）

なし

０５　　倫理学

1.　研究室活動の概要

人間存在、価値、道徳意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものとがあり、教授2名、准教授1名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度4名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年5名前後である（2021年度6名、2022年度4名）。研究室全体としてみれば、学生、院生あわせて30名ほどだが、学生、院生の研究テーマは、古代ギリシア哲学からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年1回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、在籍中の大学院生やオーバドクターの研究成果を発表する場ともなっている。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

教授　熊野 純彦
　専門分野　倫理学原理論・近現代西欧倫理思想
　在職期間　2007年4月－現在

教授　賴住 光子
　専門分野　倫理学原理論・日本倫理思想史
　在職期間　2013年4月－現在

准教授　古田 徹也
　専門分野　倫理学原理論・近現代西欧倫理思想
　在職期間　2019年4月－現在

助教　長野 邦彦
　専門分野　倫理学原理論・日本倫理思想史
　在職期間　2020年4月－現在

⑵　助教の活動

長野 邦彦
　在職期間　2020年4月－現在
　研究領域　倫理学原理論・日本倫理思想史
　主要業績
　　（論文）
　　長野邦彦、「道元における「鏡」についての予備的考察：世俗の「鏡」と仏法の「鏡」との差異」、『倫理学紀要』第29輯　東京大学文学部倫理学研究室、2022.3
　　（学会発表）
　　国内、長野邦彦、「道元思想における叢林と世俗共同体との差異」、日本思想史学会「思想史の対話」研究会、2021.11.7
　　国内、長野邦彦、「道元における〈鏡〉について」、比較思想学会東京例会、2021.12.19
　　（非常勤講師）
　　お茶の水女子大学、「ことばと世界１３　思考力トレーニング」、2020.4～2020.9、2021.4～2021.9、「倫理学特殊講義ＡＩ」、2020.10～2021.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「『葉隠』における「和」の思想」

「規範倫理学における徳倫理の検討」

「義務の導出におけるカントの定言命法の有効性 ――クリスティン・コースガードの論考をめぐって」

「正義の倫理とケアの倫理の関係」

「シノペのディオゲネスの倫理思想――「生への志向」の哲学」

「レヴィナス『全体性と無限』における欲望の自我論的意義」

2021 年度

「アリストテレス『ニコマコス倫理学』における人間関係論と倫理学の問題」

「吉屋信子「黒薔薇」の研究」

「行為者基底的徳倫理への批判的検討」

「一九四〇年代のレヴィナスにおけるエロス・繁殖性概念の射程」

「R・M・ヘアの合理的な道徳的推論への批判的検討」

「ドゥオーキンにおける「善き生」の追求―「平等」と「共同体」をめぐって―」

「デイヴィッド・ヒュームの自由論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

なし

2021 年度

小原優吉 「『精神現象学』意識章における実在・本質」〈指導教員〉古田徹也

野々村伊純 「モーリス・メルロ＝ポンティの前期真理論――「真理の現実化」をめぐって」〈指導教員〉古田徹也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

長野邦彦 「師弟および修行者間における修証の相互相依的成立構造――『正法眼蔵』「古鏡」巻注解」

〈主査〉頼住光子〈副査〉熊野純彦・古田徹也・高島元洋・倉澤幸久

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

０６　　宗教学宗教史学

1.　研究室活動の概要

本専修課程（宗教学宗教史学研究室）における研究は宗教の人文社会科学的研究である。2020～21 年度の研究活動は、教授 2 名、准教授 2 名、専任講師 1 名の計 5 名の教員を中心として行われた。これまでの教員による特色ある研究を継承するとともに、最近の研究状況、社会情勢を踏まえ、新たな可能性をも模索している。研究分野としては、宗教理論・宗教学史、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史・地域宗教史（中近世および近現代欧米、イスラエル、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、慰霊と追悼、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）などをカバーしている。方法論は、宗教哲学・思想研究、比較宗教学、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学などである（詳しくは本書第Ⅲ部を参照のこと）。宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学・応用倫理センターとの活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

2020～21 年度の本専修課程の全教員を中心メンバーとする共同研究としては、JSPS 科研費基盤研究 B「日本宗教研究の新展開―ローカリティーへのグローバルなアプローチ」（西村明代表）に取り組み、成果を 2020 年の国際宗教学宗教史学会（IAHR）世界大会で発表することを直近の目標として共同研究を進めた。しかし新型コロナウイルスの感染拡大により IAHR 世界大会は中止となり、さらに国際連携はもちろんのこと国内での研究・教育活動にも大きな制限がかかることとなった。進路を変更し研究から離れた院生もおり、コロナの影響は長引き深刻化している。

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・研究動向サーヴェイ論文・研究ノート等が掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会誌的な性格をもち、同窓生や留学生の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業論文題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。

本専修課程の過去 10 年余の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（15 名前後）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事もコロナのために 2020～21 年度は実施することができなかった。

国際研究交流については、上記のようにコロナのために対面の交流は不可能となった。他方、オンラインによる研究会は次第に増加した。また、教員の一人が 2020 年 8 月から IAHR の事務局長に選出されたため、IAHR の事務局が研究室に置かれる形になっている。IAHR は 1950 年に創立された宗教学分野最大の国際的学術組織であり、その潤滑な運営に大きく貢献している。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

池澤　優　　：中国宗教研究、祖先崇拝、生命倫理（1995 年 4 月～）
藤原　聖子　：宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、北米の宗教（2011 年 4 月～）
西村　明　　：宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化（2013 年 4 月～）
渡辺　優　　：西洋近世神秘主義、神秘主義概念の系譜学的研究、現代宗教思想・宗教哲学（2019 年 4 月～）
志田　雅宏　：中世キリスト教世界のユダヤ教、現代ユダヤ教、アブラハム宗教史（2020 年 4 月～）

(2)　講師の活動

志田　雅宏

在職期間　2020 年 4 月～現在

研究領域　中世キリスト教世界のユダヤ教、現代ユダヤ教、アブラハム宗教史

主要業績

（著書）

共著、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、『世界哲学史 4』（第 10 章「中世ユダヤ哲学」）、筑摩書房、2020.4

（論文）

志田雅宏、「新型コロナ感染流行とユダヤ教世界」、『現代宗教 2021』、151-176 頁、2021.3

志田雅宏、「ユダヤ教世界のイエス伝―ストラスブール写本版『トルドート・イェシュ』とその文脈についての研究」、『東京大学宗教学年報』、38、1-24 頁、2021.3

志田雅宏、「聖書解釈の広がりと深み―中世キリスト教文化との対話のなかで―」、『京都ユダヤ思想』、12、44-74 頁、2021.12

（学会発表）

国内、志田雅宏、「聖書解釈の広がりと深み―中世キリスト教文化との対話のなかで」、京都ユダヤ思想学会第 13 回学術大会公開シンポジウム「中世ユダヤ教聖書解釈の諸相―キリスト教世界とその周辺」、オンライン、2020.9.13

国内、志田雅宏、「感染症と現代ユダヤ教世界」、日本宗教学会第 79 回学術大会、オンライン、2020.9.20

国内、志田雅宏、「ユダヤ教における聖地の「地図」」、同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）リサーチフェロー研究会「「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討：聖書テキストから今日に至るまで」第 2 回、オンライン、2020.12.19

国内、志田雅宏、「コロナ禍での宗教生活：オンライン・レスポンサを中心に」、日本ユダヤ学会 2021 年度公開シンポジウム「コロナ禍のユダヤ人社会」、学習院女子大学（オンライン）、2021.7.4

国内、志田雅宏、「ヨセフ・キムヒ『契約の書』―宗教論争とユダヤ教聖書解釈―」、日本宗教学会第 80 回学術大会、オンライン、2021.9.7

国内、志田雅宏、「カイロ・ゲニザ文書と中世地中海世界のユダヤ教文化」、日本ゲニザ学会「ゲニザ入門講義」、オンライン、2021.11.7

（社会活動）

⑴ 他機関での講義等

非常勤講師、東京工科大学、「宗教学」「世界の宗教」、2018.4～

非常勤講師、埼玉学園大学、「宗教学」、2018.4～

非常勤講師、慶應義塾大学、「宗教学 I」「宗教学 II」、2019.4～

非常勤講師、山梨大学、「宗教学」、2019.4～

リサーチフェロー、同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

市民講座、朝日カルチャーセンター、「ハラハーが創り出すユダヤ教世界―法をおこない、法を学ぶ」、2022.2.8

⑵ 学会

京都ユダヤ思想学会、運営委員、2010.4～

日本ユダヤ学会、理事、『ユダヤ・イスラエル研究』編集委員、2019.4～

⑶ 外国人研究員・内地研究員

ヤニス・ガイタニディス（千葉大学助教）

3. 卒業論文等題目

⑴ 卒業論文題目一覧

2020 年度

「VOCALOID の宗教性―声の問題を中心に」

「勇者ロトの神学　～ドラゴンクエスト　ロトシリーズの宗教世界～」

「性的マイノリティの権利運動に対抗する宗教の論理と戦略」

「「日本人は風呂好き」というステレオタイプを考える」

「現代のラジオにおける教団提供番組の効果と役割　―創価学会及び聖教新聞による提供番組を事例として―」

「ラカン派精神分析とキリスト教神秘主義」

「「オンラインサロン」の宗教性」

「「精神野球」はなぜ日本に広まったのか　―飛田穂州の思想を中心に―」

「日本ヨガ史におけるパイオニアを宗教学的観点からみる」

「明治期仏教における雑誌メディアの活用」

「香料の宗教的役割　―薔薇水を中心に―」

「三千の顔をもつアマテラス　―中世の「異端」者たちが試みた〈神仏コスモロジー〉の侵犯―」

「ヴァイヤーとボダンの魔女論争」

「昭和戦前期における怪異記録記事から見る日本人の宗教」
「顕密体制論における平安仏教から鎌倉仏教への移行の意義」
「旧満州における大日本帝国による海外神社の戦後の扱いに関して」
「『贈与論』からトークンエコノミー、ギフトエコノミー を読み解く」
「J.W.ファウラーの信仰発達理論に関する文献研究　―日本人の宗教性を測るための提案―」

2021 年度

「小林秀雄における〈魂〉の解明」
「心中のゆくえ　―フィクションに見る死生観・恋愛観の変遷―」
「「宗教 2 世」をめぐる諸問題　～「カルト 2 世」から「宗教 2 世」へ～」
「日蓮宗系新宗教教団における災害解釈」
「廃娼運動を巡る日本キリスト教婦人矯風会の宗教性」
「甲子園の聖地化　―その歴史と構造―」
「イスラエル右傾化の背景　―宗教的要因はどの程度作用していたか―」
「日本における「心の病」と仏教の実践に関する通史的考察―「憑き物」、「癲狂」、「精神病」、「精神障害」と共に―」
「死者の埋葬と記念における司牧者アウグスティヌス　―古典文化への応答と身体観―」
「「宇宙人」という創造主像　―宗教現象と SF 作品との関わりと同時代性についての考察―」
「「移民社会」における宗教の役割　―ベトナム人コミュニティを事例として―」
「〈幻想文学〉のオカルティズム　近現代日本における「異端」の知と文学」
「現代日本におけるニーチェ受容　―永遠回帰思想に注目して―」
「K-Pop アイドルのミュージックビデオにおける宗教的モチーフの使用 ―ガオンアワーズを受賞した 3 世代アイドルを中心に― 」
「GLA は「新新宗教」だったのか？　―教団史の再検討に基づく学説批判―」
「大乗仏教の「慈悲」概念に基づく社会活動についての考察」

⑵　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

堀内裕子　「献体思想の身体観とその死生観」〈指導教員〉池澤優
村田奈生　「宗教･思想史における反出生主義の定位」〈指導教員〉藤原聖子
伊藤優　「「宗教」と「芸能」の再編成　―明治期日本の奇術師を事例として―」〈指導教員〉西村明
犬塚悠太　「宗教シオニズムにおける暴力性の源泉」〈指導教員〉藤原聖子
清田武志　「刑死者の弔い研究序説」〈指導教員〉西村明
武田七星　「ウィリアム・ジェイムズの宗教思想」〈指導教員〉渡辺優
田宮克真　「甲骨文における「帝」観念の様相と「天」との関係性」〈指導教員〉池澤優
李歳寒　「在日中国人プロテスタント教会における「新華僑」若者の信仰形成」〈指導教員〉藤原聖子

2021 年度

松濤芙紀　「現代ロシアにおける死生学の特徴」〈指導教員〉池澤優
鈴木亮　「ラテンアメリカ宗教研究史　―アルゼンチンの宗教社会科学を中心に―」〈指導教員〉西村明
輝元泰文　「フランスにおける禅の受容と変容　―弟子丸泰仙を中心として―」〈指導教員〉渡辺優

⑶　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

藤井修平　「生物学・認知科学に基づいた宗教理論および宗教思想の研究」
〈主査〉藤原聖子〈副査〉鶴岡賀雄・井上順孝・深澤英隆・荒川歩

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

０７　　美学芸術学

1.　研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテクストを取り上げ、その精読によって厳密なテクスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあっては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方で日本の学界における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、外国人研究生をコンスタントに受け入れている。

本研究室では現在 JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要（1976 年創刊）と『美学芸術学研究』（1982 年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995 年改題）と題された和文の紀要の 2 つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

2015 年 4 月より渡辺裕教授（在籍は 1996 年～2019 年。聴覚文化論、音楽社会史）、小田部胤久教授（在籍は 1996 年～。近代美学）、三浦俊彦教授（在籍は 2015 年～。分析哲学、分析美学）の 3 名で運営してきたが、2019 年 3 月の渡辺裕教授の定年退職にともない後任として同年 4 月より吉田寛准教授（ゲーム研究、感性論）が着任し、3 名の体制によって、少しでもバランスのとれた教育活動を展開できるよう心がけている。

(2)　助教の活動

松原　薫

在職期間　2020 年 4 月 1 日～

研究領域　音楽学

主要業績

（著書）

単著、松原薫、『バッハと対位法の美学』、春秋社、2020.1

（論文）

Matsubara Kaoru、「Friedrich Wilhelm Marurg's *Abhandlung von der Fuge* and the Early Reception of the Fugues of J. S. Bach」、『*Actes du Congrès de la SIEDS 2015 (JSECS)* 』、1-6 頁、2021.3

松原薫、「バッハと愛好家――フォルケルの著述とゲッティンゲン大学「冬の演奏会」をてがかりに」、『美学芸術学研究』、39、61-89 頁、2021.3

松原薫、「シュヴァイツァーのバッハ伝とフランスのヴァグネリスム――仏語版から独語版への変遷に着目して」、『美学芸術学研究』、40、39-68 頁、2022.3

（解説）

松原薫、自著紹介『バッハと対位法の美学』、UTokyo BiblioPlaza、2021.3

（非常勤講師）

桜美林大学、「文化と芸術（芸術と科学技術）」、2021.4～

（学会）

国内、美学会、東部会編集幹事、2020.4～

(3) 外国人研究員・内地研究員

スティーヴン・ライドン（日本学術振興会外国人特別研究員）、2020 年 4 月～2021 年 7 月 27 日

フェデリコ・ファルネ（日本学術振興会外国人特別研究員）、2021 年 11 月 1 日～2022 年 3 月 31 日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「森田芳光『家族ゲーム』における音響の演出」

「ビデオゲーム作品批評の批評」

「グループアイドル・システムの誕生」

「ジャニーズのホモソーシャル性 アイドルグループ嵐についての考察」

「成瀬巳喜男監督作品における小道具の意味作用に関する考察」

「林光《原爆小景》におけるリアリズム」

「「美しいソースコード」の分析と記号化」

「絵画鑑賞と主題解釈に関する視覚芸術論的考察―ガレン＝カレラのカレワラ画を出発点に―」

「モダニズムの演劇：さらにさらに新たなるラオコオンに向かって」

「仮構性から見るコントの笑いの構造」

「80's リバイバルの間テクスト性」

「グレタ・ガーウィグの映画 その身体と容姿」

「是枝裕和の映画における家族像」

「自動車の内部空間における特異性」

「ライブ空間におけるオーディエンスの体験 ―何が「現場の空気感」を生み出すのか―」

「ビデオゲームにおける、ループする BGM の在り方について」

「文学作品の鑑賞理論―個別の「世界」を創り出すということ」

「「ライト文芸」における「現実」の描き方 ―大塚英志・東浩紀の「キャラクター小説」論を通して―」

「フィクション作品の意図せざる差別性について――ノエル・キャロルの論考を手掛かりに――」

「キャラクター論の展開におけるキャラクターソングの立ち位置について」

「ゲームデザインの遊戯性」

2021 年度

「クラシック音楽の演奏は何に忠実であるべきか―個人的オーセンティシティ再考―」

「『アイリッシュマン』から読み解くマーティン・スコセッシ監督のマフィア作品の現在」

「ハイデガーにおける哲学と人間、芸術と人間―「芸術作品の根源」を中心に」

「フィクションのノスタルジー ――「手に届かなさ」を起点とした時間性から虚構性への転回」

「草間彌生の用いる反復と増殖について」

「ディズニーアニメーションの映像面における「リアリティ」の変遷について」

「『同時代ゲーム』『もうひとり和泉式部が生れた日』考―引用において神を見るということ」

「デジタル写真、その展開と変容についての論考」

「日本における「アール・ブリュット/アウトサイダー・アート」史の特異性が示す今後の発展可能性」

「オンライン演劇に見る劇空間拡張の可能性について」

「バーチャル YouTuber ―多層化するキャラクターの現在―」

「『スパイダーマン：スパイダーバース』のヒップホップ表象――アメリカのヒップホップ映画史における特異性」

「映画『The Truman Show』において監督役クリストフが果たした役割」

「サンプラーを用いた音楽制作の分析」

「デジタル時代の「アニメ・マシーン」 ―21 世紀のアニメーション/アニメはテクノロジーをどう思考するか―」

「岩井俊二映画『リップヴァンウィンクルの花嫁』の構築論―嘘が地位を得る構造―」

「鷲田清一のファッション論における「演出」について」
「インタラクティブ・メディアで提示されるマンガに関する考察　―ピエール・レヴィの作品概念を手がかりに―」
「美的経験には（どのような）本質があるのか―自然種論の恒常的性質群説による美的経験の自然化を通して」
「戦略的言説としてのポルノグラフィ：その来歴とこれからの可能性」
「VTuber の三層構造」
「生物を用いた芸術について考える際の論点の整理―倫理と美的効果の観点から」
「魔法少女アニメにおけるジェンダー表象」
「ヴィジュアル系ロック再批評」
「従来のスポーツと e スポーツにおける美的体験の比較検討」
「J.S.バッハ《ヨハネ受難曲》における演奏の変遷―20 世紀後半における古楽復興―」
「神経美学と唯物論」
「ユーモア、あるいは書くことの問題　―ジル・ドゥルーズ『ザッヘル＝マゾッホ紹介』を中心に―」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

岡田進之介　「Fiction, Narrative, and Imagination: A Study on the Puzzle of Imaginative Resistance（フィクション・物語・想像力―想像的抵抗の議論を手がかりに―）」〈指導教員〉三浦俊彦

中村将武　「ロー・ファイ・ヒップホップにおけるロー・ファイとその変遷―ロー・ファイ・ミュージックとの比較を通して―」〈指導教員〉吉田寛

葉涵天　「芸術の定義の妥当性を検証する―芸術のクラスター説を中心に―」〈指導教員〉三浦俊彦

2021 年度

青本柚紀　「ジュディス・バトラーのデリダ受容――『ジェンダー・トラブル』におけるパフォーマティヴィティ概念を通じて」〈指導教員〉小田部胤久

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

劉佳　「豊子愷の芸術論における「気韻生動」概念の現代的意義――カンディンスキーの抽象芸術論との交渉において」

〈主査〉小田部胤久〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・西村清和・尼ヶ崎彬

清水康宏　「19 世紀半ばのドイツ語圏におけるベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》論――芸術とカトリック典礼をめぐる音楽論の研究――」

〈主査〉吉田寛〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・渡辺裕・沼口隆

鈴木亘　「ジャック・ランシエールの美学――美の美学とパフォーマティヴィティ」

〈主査〉小田部胤久〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・田中均・星野太

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

具慧原 KOO HYEWON　「小津安二郎はなぜ「日本的」なのか――小津映画の「日本的なもの」に対する言説史的考察」

〈主査〉小田部胤久〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・頼住光子・和田マルシアーノ光代

リンジンイェンジン LIN Jean Yuanjing　「文化と芸術の帰属的性質をめぐる価値発生のメカニズム」

〈主査〉三浦俊彦〈副査〉小田部胤久・吉田寛・新井潤美・村本由紀子

（乙）

なし

０８　　心理学

1.　研究室活動の概要

本専修課程は、1903 年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授 3 名、准教授 1 名、助教 1 名、日本学術振興会の PD・研究員・大学院生・学部生ら約 70 名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・運動制御・社会認知などの心理現象を心理物理学的手法・脳科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。毎年、教養学部文科 3 類や他の科類の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトを対象とした実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果をまとめている。

大学院教育に関しては、指導体制の充実を図り、数名の課程博士（博士（心理学））が毎年誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本視覚学会・日本認知科学会・日本神経回路学会・日本認知心理学会・認知神経科学会・日本神経科学学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010 年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

なお、パンデミック下であった 2020 年度は講義や演習を専らオンライン授業とせざるを得なかった。2021 年度は感染症対策を施した上で講義や演習を部分的に対面で実施した。この期間中、実験室における感染症対策を徹底し、細心の注意を払って研究活動を継続した。ウェブ上でおこなう心理学実験もこれまで以上に取り入れた。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946 年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官 1 名が兼任し助手 1 名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954 年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第になくなっていった。さらに 1960 年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は 1992 年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

横澤　一彦

専門分野　統合的認知の心理学

在職期間　1998 年 10 月～　　大学院人文社会系研究科　助教授

2006 年 4 月～2022 年 3 月　　同　教授

今水　寛

専門分野　運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

在職期間　2015 年 9 月～現在　　大学院人文社会系研究科　教授

村上　郁也

専門分野　知覚心理学、認知神経科学

在職期間　2005 年 4 月～　　大学院総合文化研究科　助教授

2013 年 4 月～　　大学院人文社会系研究科　准教授

2018 年 4 月～現在　　同　教授

鈴木　敦命

専門分野　実験心理学、認知心理学

在職期間　2017 年 9 月～現在　　大学院人文社会系研究科　准教授

(2) 助教の活動

中島　亮一

専門分野　実験心理学

在職期間　2016 年 4 月～2020 年 9 月

主要業績

(論文)

Ryoichi Nakashima & Takatsune Kumada、「Explicit sense of agency in an Automatic Control Situation: Effects of Goal-Directed Action and the Gradual Emergence of Outcome」、『Frontiers in Psychology』、11:2062、2020.8

(他機関での講義等)

明治学院大学、非常勤講師、2020.4～2020.9

東京藝術大学、非常勤講師、2020.4～2021.3

立教大学、兼任講師、2020.9～2021.3

東京電機大学、非常勤講師、2020.4～2021.3

中山　遼平

専門分野　知覚心理学

在職期間　2020 年 10 月～現在

主要業績

(論文)

Nakayama, R. & Holcombe, O. A.、「A dynamic noise background reveals perceptual motion extrapolation: The twinkle-goes illusion.」、『Journal of Vision』、21(11):14、2021.10

(学会発表)

国際、Nakayama, R. & Holcombe, O. A.、「The "twinkle goes" illusion: Attention-dependent extrapolation of motion.」、Annual Meeting of Vision Sciences Society 2020、2020.5.19

国内、中山遼平、「運動物体の位置の知覚におけるトップダウン注意の役割」、日本基礎心理学会第 39 回大会オンライン若手セッション、2020.11.7

国内、中山遼平、「動的背景上で生じる運動外挿の運動消失後の漸増」、日本基礎心理学会第 40 回大会、2021.12.4

国内、田中真衣・中山遼平・村上郁也、「Double-drift illusion による主観的な運動軌道への方位順応」、日本視覚学会 2022 年冬季大会、2022.1.21

(受賞)

国内、中山遼平、日本基礎心理学会優秀発表賞、日本基礎心理学会、2021.12.4

(他機関での講義等)

東京藝術大学、非常勤講師、2021.4～現在

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「顔の信頼性とソースモニタリングエラーに関する知識とがソース記憶に与える影響」

「数え上げにおける特徴ベースの注意の効果」

「選択的注意と特性不安が意思決定におけるリスク回避傾向に与える影響」

「複数刺激の質感と時間知覚」

「カスタマーレビューの平均評価点と評価数に基づく意思決定方略に関する検討」

「運動対応から推定される Craik-O'Brien-Cornsweet effect の時間的特性」

「外傷・病変による特徴的な顔への潜在的差別の解消に関する検討」

「注意に基づく運動追跡に影響する音刺激」

「予測誤差及び規則性の検出と運動学習の速さの関係性」

「空間周波数操作を用いた「不気味の谷」の知覚不一致仮説の検討」

「瑣末な口コミが商品の評価と選択に与える影響の検討」

「可操作性の違いは行動選択に影響するのか」

「アバターを用いた運動学習における身体所有感の影響」
「表情が視線に対する顕在的・潜在的評価に与える影響の検討」
「涙と表情が接近・回避行動に与える影響の検討」
「盲点近傍領域における Flash-Grab 効果」
「運動残効による見かけ上の運動と時間知覚」
「運動学習における環境の変動性と運動結果の予測の曖昧性の関連についての検討」
「報酬が隠蔽・探索行動に及ぼす影響の検討」
「日本舞踊の映像の見せ方が美的評価に与える影響」
「自己の認識と矛盾した他者の表情がエラー処理に与える影響について」
「サッカード前後のフラッシュラグ効果」
「複合周波数刺激を用いた視覚的レイト順応」
「人相学的信念と特性判断に使用される顔手がかりとの関連の検討」
「聴触覚リズム知覚に身体同期運動が及ぼす影響」

2021 年度

「瞳孔サイズに伴う光強度変調の検出能力」
「文章読解時における背景音楽の既知性とマインドワンダリングの関係性」
「VR 空間での障壁による距離知覚の変容に対する視触覚情報の影響」
「共感覚色と色の恒常性の関係に関する研究」
「直前の音刺激暴露は注意の目覚めに影響を及ぼすか」
「行為と整合した感覚フィードバックが運動主体感に与える影響の検討」
「仮想現実内の脅威への恐怖反応とその推移の検討」
「非侵襲的脳刺激を用いた右側頭・頭頂接合部と右下前頭回ネットワークによる主体感の階層プロセスへの介入」
「注意追跡が困難な刺激に生じる Flash-Grab 効果」
「アモーダル補完領域における Flash-Grab 効果」
「他者の信頼性判断における顔バイアスの抑制―知識付与と説明責任の効果の再検証―」
「血縁度と社会的距離が血縁者への利他的選択に与える影響の検討」
「複数の顔が同一人物であるという情報が顔の短期記憶に与える影響とそのメカニズムの検討」
「開口笑顔と閉口笑顔が顔再認における人種の効果に与える影響」
「主観的な運動軌跡への方位順応効果」
「ダンスの動作と音楽から受ける印象の分解」
「高速運動印象の生じる high-phi motion 錯視における運動残効について」
「遅延割引における日付・期間効果のメカニズムの検討―主観的時間知覚に着目して―」
「他者の信頼性に関する事前の予測が後知恵バイアスへと与える影響」
「系列提示された顔に対するチアリーダー効果の検討」
「仮想空間における腕の偏位が自己受容感覚に与える影響」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

鬼頭宗平 「両義性運動が位置処理に及ぼす効果：フリッカー運動残効によるフラッシュドラッグ効果」〈指導教員〉村上郁也
愛甲隼大 「感情認知におけるベイズ的手がかり統合と選択的手がかり利用に関する研究」〈指導教員〉鈴木敦命
大久保らな 「周辺視野における視覚的意識の消失現象に関する検討」〈指導教員〉横澤一彦
菅原岳 「クロスモーダルマッチングを用いたレート知覚の生起範囲及び順応効果の研究」〈指導教員〉村上郁也
中村友哉 「逆向マスキングによる視覚的気づきの変容―Visibility と Appearance を形成する視覚表象の微小時間発展」〈指導教員〉村上郁也
峯大典 「仮想空間を用いた変調身体表象と身体近傍空間に関する研究」〈指導教員〉横澤一彦

2021 年度

勝又健太 「空間・感情メタファへの身体化認知の関与の検討―身体性の異なる不快感情に注目して―」〈指導教員〉鈴木敦命
柴田浩史 「心拍フィードバックを用いた内受容感覚の情報処理過程の検討」〈指導教員〉今水寛
吉池由佳子 「開口笑顔と閉口笑顔に対する日本人の顕在的・潜在的態度」〈指導教員〉鈴木敦命

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）（乙）

なし

2021 年度

（甲）

宇野究人 「視聴覚入力間の協応関係に基づく同時性知覚メカニズムの解明」

〈主査〉横澤一彦〈副査〉今水寛・村上郁也・鈴木敦命・日髙聡太

齋藤真里菜 「盲点領域に与えた光刺激が撮像経路の機能に及ぼす影響の検討」

〈主査〉村上郁也〈副査〉横澤一彦・今水寛・鈴木敦命・辻村誠一

ラブレンテヴァソフィア LAVRENTEVA Sofia 「Perceptual time distortion and its dependence on physical and perceived properties of visual stimuli（知覚時間歪みの視覚刺激の物理特徴と知覚特徴への依存性）」

〈主査〉村上郁也〈副査〉今水寛・横澤一彦・鈴木敦命・柴田和久

（乙）

なし

０９a　日本語日本文学（国語学）

1.　研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897 年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は 1997 年 9 月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続いてきたものが、1975 年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほかに、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995 年の大学院化への過渡的措置として 1994 年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げることになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2020 年度・2021 年度は、大学院生として 1 名の外国人留学生が本専修課程に在籍し、研究に従事している。外国人研究員は、新型コロナの影響により、いずれも来日が中止・延期となった。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

井島　正博	教授	日本語文法論	1998 年 4 月～現在
肥爪　周二	教授	日本語史	2003 年 4 月～現在
小西　いずみ	准教授	方言学	2020 年 4 月～現在

(2)　助教の活動

鴻野　知暁

在職期間　2019 年 4 月－2021 年 3 月

研究領域　日本語史

主要業績

（著書）

共著、田中牧郎（編）『コーパスで学ぶ日本語学　日本語の歴史』、朝倉書店、「第 2 章　奈良時代」（pp. 23-46）、2020.5

（論文）

小池俊希・大向一輝・鴻野知暁・永崎研宣、「『日本語歴史コーパス』への TEI 適用に基づく諸本比較：『万葉集』における『読添えのモ』を事例として」、『研究報告人文科学とコンピュータ』、2020-CH-123 (2)、pp.1-6、2020.5

（他機関での講義等）

青山学院大学　非常勤講師、2018.4～2021.3

早稲田大学　非常勤講師、2019.4～2021.3

中澤　光平

在職期間　2021 年 4 月－2022 年 3 月

研究領域　日本語学、方言学

主要業績

（論文）

中澤光平、「淡路方言の音節融合の共時的・通時的分析」、『東京大学言語学論集』、43、pp.159-182、2021.10

中澤光平、「与那国方言の音韻変化と形態変化」、『国立国語研究所論集』、22、pp.89-111、2022.1

中澤光平、「岡山県備前市日生方言のアクセント資料」、『日本語学論集』、18、pp.210-236、2022.3

（他機関での講義等）

立正大学、非常勤講師、2021.9～2022.3

名桜大学、特別講演、2022.1

(3)　外国人研究員・内地研究員

2020 年度・2021 年度とも、新型コロナの影響により、外国人研究員の来日は中止・延期された。

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「日葡辞書及び平曲における漢語の連声濁と語構造の関係」

「言語における規範意識のルールとその齟齬について」

「近代漢語研究―図学用語「透視」「投影」を中心に―」

「並立助詞「たり」の用法の変遷」

「逃走や回避の動詞におけるヲ格とカラ格の使用について」

「富山方言における動詞語末の促音化および撥音化についての形態音韻論的考察」

「院政鎌倉期の文体史における記録体の展開―『十訓抄』の『古事談』・『袋草紙』出典話を例として―」

他、特別演習を履修し、卒業した者、1 名。

2021 年度

「言語運用を通して構築される複合的なアイデンティティについての質的研究　―三重県北・中伊勢方言話者を対象に―」

「江戸語終助詞「サ」に関する一考察」

「宗淵開板『法華経安楽行品呉漢両音』の分析と本資料に於ける字音整理の実態」

「自動詞ナルの用法とその関係」

「「いちおう」の意味用法と歴史的変遷」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

鈴木賢祐　「動詞化接尾語の通時的研究」〈指導教員〉肥爪周二

大島英之　「呉音漢音混読の通時的研究」〈指導教員〉肥爪周二

小池俊希　「上代における助詞モの研究―非合説的機能の検討―」〈指導教員〉肥爪周二

阪上健夫　「言いつくし文における主節の解釈」〈指導教員〉井島正博

新庄航人　「日本語における「景」に関する語彙の様相―特に新漢語「景観」の成立と発展について―」〈指導教員〉井島正博

常世田将希　「諸本比較による『狭衣物語』の国語学的研究」〈指導教員〉肥爪周二

2021 年度

なし

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

（甲）（乙）

なし

０９b　日本語日本文学（国文学）

1.　研究室活動の概要

国文学研究室は、学部の言語文化学科・日本語日本文学専修課程と大学院の日本文化研究専攻・日本語日本文学専門分野の国文学の教育研究を担当している。本研究室は、1877 年（明治 10）の東京大学発足時の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一らの先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963 年（昭和 38）に国語国文学専修課程となり、1975 年（昭和 50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994 年（平成 6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまも保たれている。

2021 年 4 月現在、本研究室は教授 3 名・准教授 2 名・助教 1 名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカヴァーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。また 2021 年 4 月現在で、国文学研究室には大学院学生 39 名（内、外国人留学生 4 名）・学部学生 49 名が在籍し、その他、大学院外国人研究生 1 名を受け入れている。

本研究室は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012 年度以来、本専修課程では「総合日本文学」の研究・教育という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本研究室は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出しており、また、数多くの海外からの留学生を、それぞれ母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるよう、指導を行ってきた。特に国際交流には力を入れており、多くの外国人研究員を受け入れると共に、教員が海外の学会の招待講演を引き受けている。

「総合日本文学」は、留学生、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者の存在に配慮した試みでもある。2013 年度より、集中講義、あるいは A2 タームを利用した「総合日本文学」を開講し、スタッフ全員の輪講で年度毎に統一テーマにそった講義を行っている。2016 年度からはこれを全学教養教育科目とし、20 年度は「虚と実」、21 年度は「夢」をテーマに、最終回に教員相互でシンポジウムを行った。2021 年 3 月には、以前の「総合日本文学」の成果をまとめて、『講義　日本文学―共同性からの視界―』（東京大学出版会）を刊行した。

上記のような研究教育活動のほかに、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている（コロナ禍のために休止中）。卒業生を中心とする活動としては、東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924 年（大正 13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として「東京大学国文学論集」をも毎年刊行し、その内容は UT リポジトリで公開している。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

渡部　泰明　教授　　日本中世文学
安藤　宏　　教授　　日本近代文学
鉄野　昌弘　教授　　日本古代文学
高木　和子　教授　　平安朝文学
佐藤　至子　准教授　日本近世文学
木下　華子　准教授　日本中世文学

(2)　助教の活動

藤田　佑

在職期間　2020 年 4 月～現在
研究領域　日本近代文学
主要業績
（著書）
井上隆史他編、『三島由紀夫小百科』、水声社、68-73 頁、179-190 頁、466-474 頁、2021.11

（論文）

藤田佑、「三島由紀夫の鷗外受容」、『東京大学国文学論集』、17、107-123 頁、2022.3

（書評）

安岡真、『三島事件　その心的基層』、石風社、『三島由紀夫研究』、21、148-149 頁、2021.4

野村幸一郎、『二・二六事件の思想課題―三島事件への道程』、新典社、『日本近代文学』、105、181 頁、2021.11

（口頭発表）

「三島由紀夫の文学」、第 72 回東京大学駒場祭公開講座、2021.11

（その他）

藤田佑、「「没後〇〇年」という言説：三島由紀夫の「現在」」、『昭和文学研究』、83、217-219 頁、2021.9

（非常勤講師）

武蔵大学、「日本近現代文学研究」、2020.4～、「日本近代文学演習」、2021.4～

(3)　内地研修員・外国人研究員

内地研修員

2020 年度

加藤敦子　（受入教員：佐藤至子）

野本瑠美　（受入教員：木下華子）

2021 年度

古川裕佳　（受入教員：安藤宏）

吉田幹生　（受入教員：高木和子）

外国人研究員

2020 年度（なし）

2021 年度（なし）

日本学術振興会特別研究員

2020 年度（なし）

2021 年度

村瀬空　（DC1、受入教員：木下華子）

古川諒太（DC1　受入教員：佐藤至子）

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「北村透谷詩研究　―象徴の変化を通じて―」

「『源氏物語』における「長恨歌」引用について」

「『醒睡笑』の説教らしさに関する研究」

「夢野久作『ドグラ・マグラ』研究」

「立原道造研究」

「『行人』―読者としての直」

「坂口安吾の戦争観―戦後作品を中心に―」

「志賀直哉「城の崎にて」―事実と物語―」

「『源氏物語』における遺言について」

「『仮面の告白』論 ―「私」について」

「『源氏物語』柏木論」

「『朧月猫の草紙』の研究」

「『第七官界彷徨』論―「ひとつの恋」と「第七官」に関する考察―」

「『源氏物語』における垣間見の描写方法」

「慶安四年版本『発心集』の説話配列―巻四第九話・第十話を起点として」

「『むさしあぶみ』における楽斎房の機能」

2021 年度

「徒然草に見る兼好の死生観」

「芥川龍之介の「刹那の美学」とその限界」

「坂口安吾と戦争」

「福永武彦『忘却の河』論」

「武者小路実篤と志賀直哉―互いに描いたそれぞれの姿―」

「『源氏物語』終末における構造 ―物語内外の引用を手がかりに」

「源氏物語の物語構造における物の怪の役割―六条御息所の考察を中心に―」

「上代における「和習」」

「『限りなく透明に近いブルー』論 ―― 一九七〇年代におけるヒッピー文化を中心に――」

「梶井基次郎の「光と闇」」

「安部公房『けものたちは故郷をめざす』の諸相―引揚・初期テクスト・戦後表象」

「ライトノベル論 ―『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』を中心に―」

「旅の文学としての『東海道中膝栗毛』」

「近世前期の怪談における「型」について」

「井上ひさし『吉里吉里人』論」

「梅の由兵衛の殺しの論理」

「佐藤春夫『田園の憂鬱』論―物象が暗示する登場人物の心情示唆―」

「堀辰雄論――「ルウベンスの偽画」から「聖家族」へ――」

「『徒然草』第一三七段の研究―兼好の美意識と後世の享受」

「黄表紙に描かれた天体に関する研究」

「樋口一葉『にごりえ』論―結城朝之助の役割と「出世」の意味」

「夏目漱石作品における「高等遊民」の概念について」

⑵ 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

小泉文香 「志賀直哉作品研究―大正六年まで―」〈指導教員〉安藤宏

後藤喜生那 「源氏物語における仏教―出家者を中心として―」〈指導教員〉高木和子

新藤宣和 「和漢聯句の文学史的研究」〈指導教員〉木下華子

杉山翔哉 「神能の文学的研究」〈指導教員〉木下華子

張文經 「堀辰雄作品研究―昭和十年代を中心に―」〈指導教員〉安藤宏

皆川梨花 「尾崎翠作品研究――幻想世界を創出する手法――」〈指導教員〉安藤宏

稲毛由加子 「谷崎潤一郎作品の方法―古典回帰時代を中心に―」〈指導教員〉安藤宏

木下優友 「『日本書紀』述作の研究」〈指導教員〉鉄野昌弘

木村翔也 「「芸術至上主義」の再評価―芥川龍之介の短編小説―」〈指導教員〉安藤宏

中田健人 「芥川龍之介作品研究―語り残された領域―」〈指導教員〉安藤宏

古川諒太 「江戸中後期の歌舞伎研究」〈指導教員〉佐藤至子

宮内理伽 「『源氏物語』における家と政治について」〈指導教員〉高木和子

村瀬空 「承久の乱前後の和歌文学の研究」〈指導教員〉木下華子

2021 年度

李細妃 「A Study of Shohon-utsushi gokan in the late Tokugawa period（幕末期の正本写合巻の研究）」〈指導教員〉佐藤至子

大木すみれ 「太宰治文学における「国家」と「自己」―昭和一〇年代から戦後へ―」〈指導教員〉安藤宏

佐藤桃花 「初代林屋正蔵の研究」〈指導教員〉佐藤至子

青本瑞季 「近代の俳壇における女性」〈指導教員〉安藤宏

桐山大生 「異種百人一首についての研究」〈指導教員〉佐藤至子

長谷川和 「曲亭馬琴の読本についての研究」〈指導教員〉佐藤至子

松井優茉 「初期草双紙研究 ―鳥居清経画作品を中心に―」〈指導教員〉佐藤至子

森下佳帆 「太宰治と聖書」〈指導教員〉安藤宏

李敏知 「大江健三郎と政治―「奇妙な仕事」から『万延元年のフットボール』まで―」〈指導教員〉安藤宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

邵明琪 「横光利一文学研究」

〈主査〉安藤宏〈副査〉島村輝・十重田裕一・佐藤至子・木下華子

藤田佑 「三島由紀夫研究」

〈主査〉安藤宏〈副査〉井上隆史・渡部泰明・鉄野昌弘・高木和子

山﨑健太 「『古事記』歌表現の研究」

〈主査〉鉄野昌弘〈副査〉渡部泰明・高木和子・木下華子・多田一臣

渋谷百合絵 「近代童話と宮沢賢治」

〈主査〉安藤宏〈副査〉栗原敦・高木和子・佐藤至子・木下華子

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

梁誠允 YANG Sungyun「西鶴奇談研究」

〈主査〉佐藤至子〈副査〉安藤宏・鉄野昌弘・高木和子・長島弘明

井内健太「源氏物語論―物語の論理と方法―」

〈主査〉高木和子〈副査〉佐藤至子・木下華子・藤原克己・今井上

石井悠加「中世和歌と絵画・空間の相関」

〈主査〉木下華子〈副査〉鉄野昌弘・髙岸輝・佐々木孝浩・渡部泰明

丁世珍 JEONGSejin 「井伏鱒二作品研究」

〈主査〉安藤宏〈副査〉高木和子・佐藤至子・木下華子・片山倫太郎

（乙）

なし

１０　　日本史学

1.　研究室活動の概要

本専修課程は、1889 年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近来では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野―考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など―の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994 年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授 4 名、准教授 3 名、助教 1 名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として 2 名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史学コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手 2 名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年 25 名内外で、卒業時には約 3 分の 2 が就職し、約 3 分の 1 が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994 年創刊。6 冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996 年創刊。現在 26 号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年 11 月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2021 年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に 8 名、研究生に 5 名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

野島（加藤）　陽子	教授	日本近代史
大津　透	教授	日本古代史
鈴木　淳	教授	日本近代史
高橋　典幸	教授	日本中世史
牧原　成征	准教授	日本近世史
三枝　暁子	准教授	日本中世史
村　和明	准教授	日本近世史

(2)　助教の活動

崎島　達矢

在職期間　2020 年 4 月～現在

研究領域　日本近代史

主要業績

（論文）

崎島達矢、「明治初期における都市財政構造の変容：府県税創設から三部経済制へ」、『史学雑誌』、129 編 1 号、40-68 頁、2020.1

崎島達矢、「明治初期大阪都市行政における同業組合の役割―大阪商法会議所設立前史―」、『日本歴史』、867、39-56 頁、2020.7

（書評）

杉森哲也・塚田孝・吉田伸之 編、『シリーズ三都　京都巻・大坂巻・江戸巻』、東京大学出版会、『歴史科学』、248 号、47-54 頁、2022.1

三村昌司、『日本近代社会形成史―議場・政党・名望家―』、東京大学出版会、『明治維新史研究』、第 20 号、80-86 頁、2022.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、成蹊大学、「近現代日本史Ｂ〈２〉」、2021.9～2022.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「八世紀における四等官制の考察」

「近世後期に於ける金沢藩の対幕関係」

「赤松氏再興をめぐる赤松氏被官の動向と室町幕府政治の展開について ―赤松満政・則尚の挙兵と政則への加賀半国守護職付与を中心に―」

「桓武朝の祭祀政策と都城―中和院を中心に―」

「自由党名古屋事件像の研究―事件関係者の特赦復権を中心として―」

「戦国期京都における供御人の活動」

「戦国期における在地社会と武力」

「海軍大船捕虜収容所 戦後裁判重罰化についての考察」

「「神火」と国郡司」

「鎌倉末期における比叡山延暦寺の大衆結合」

「近衛内閣期の日本外交とスペイン内戦への対応　フランコ政権の承認をめぐって」

「スペイン風邪をめぐる認識：当時の新聞報道を中心に」

「室町幕府別奉行制の成立と展開　―山門奉行を事例に―」

「北陸型初期荘園から見る在地豪族」

「一一八〇年代内乱における源頼朝の勢力拡大過程について」

「平安時代における馳駅使の研究」

「織田政権下におけるイエズス会の布教活動」

「古代維摩会の歴史的展開と藤原氏」

「昭和五十年代の留学生政策に関する一考察―『留学生十万人計画』の理念を中心に」

「平安貴族社会における散楽」

「小金原御鹿狩における演出と民衆との関係性についての一考察」

「我妻栄と「解説法学」」

「霜月騒動の要因の再検討」

「「佐賀の七賢人」の形成過程とその目的」

「明治・大正期の教育関連展覧会における審査の変遷」

「昭和十一年の日本海軍の中国警備」

「大阪朝日と大阪毎日の災害義捐金」

「救国埼玉青年挺身隊事件と「栗原運動」」

2021 年度

「幕末期における幕府直轄軍の軍制改革―八王子千人同心を中心に」

「中世大和国における声聞師集団の成立と展開」

「江戸内海猟師町の役船負担 ―深川猟師町を中心に―」

「満州事変期の森本州平―森本日記の記述を中心に―」

「文久期における流行病と情報の流れ」

「中世成立期の筥崎宮支配と日宋貿易」

「戦時中の群馬県における思想統制について」

「品川歩行新宿の髪結と江戸の髪結仲間」

「幕末における大野藩専売制」

「警察から見た昭和維新―五・一五事件を中心に―」

「安政江戸地震に見る江戸の町　御救小屋の立地に注目して」

「江戸廻船問屋の基礎的研究」
「近世初期における天台座主の役割と機能」
「南北朝期安芸国における国人と守護武田氏」
「戦国期石山本願寺をめぐる「音信」について」
「近世江戸における売買春について」
「古代国家の儀式と蝦夷」
「高陞号事件を中心に検討する日清戦争時の日本政府の対外宣伝の手法と目的」
「関ヶ原合戦前後における武将間の私的同盟」
「近世の江戸・大坂における出版と商人」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

荒木舜平 「中世後期寺院組織と荘園経営―高野山領紀伊国志富田荘を中心に―」〈指導教員〉三枝暁子
荻原悠 「南北朝期における寺社勢力と公武権力」〈指導教員〉高橋典幸
太田聡一郎 「戦後の再軍備と「警察」概念―法解釈をめぐる政治過程」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
栗田敦 「明治後期～大正初期の輸出産業における品質規制と勧業政策の展開―花莚・羽二重産業を事例として―」〈指導教員〉鈴木淳
塩畑里紗 「戦国期の家督継承に関する一考察―特に上杉氏を中心に―」〈指導教員〉高橋典幸
下松由季 「近世後期における水防体制の展開」〈指導教員〉牧原成征
森文実 「明治期の地域社会における師範学校卒業生の位相―神奈川県下の「地方教育会」を巡る分析を中心に―」〈指導教員〉鈴木淳
山本瑞穂 「近世中後期の日露交渉とオランダ商館」〈指導教員〉村和明
渡部亮 「社会大衆党の体制内化と地域社会」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
袁也 「平安・鎌倉前期における天台宗山門派の熾盛光法」〈指導教員〉大津透
高大成 「中世神社御幸の成立と展開」〈指導教員〉高橋典幸

2021 年度

戸瀬昌之 「中世前期朝廷儀礼における「奉行職事」の成立と展開」〈指導教員〉高橋典幸
于晨 「中世前期における女性院宮と摂関家―摂関家出身の女性院宮をめぐって」〈指導教員〉高橋典幸
平岩渉 「近世中後期武蔵国秩父郡域における山地利用と地域社会」〈指導教員〉牧原成征
張郭原 「近世後期における幕府官僚制の展開」〈指導教員〉村和明
安藤克真 「明治期日本における大学―学士院体制の確立と議会」〈指導教員〉鈴木淳
大窪有太 「帝国日本の航空と政治」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
貝塚啓希 「中世東寺における廿一口供僧方の成立過程」〈指導教員〉三枝暁子
今田風人 「明治初期海事法制の形成と「海上法律」」〈指導教員〉鈴木淳
錦戸智弘 「明治期内国勧業博覧会における関係主体の検討―民間関係者、府県を中心に―」〈指導教員〉鈴木淳
藤田聡 「戦国期室町幕府における伊勢氏」〈指導教員〉高橋典幸
宮脇啓 「近世前期大名家の政治運営 ―佐賀藩主鍋島勝茂を事例に」〈指導教員〉牧原成征

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

賀申杰 HE Shenjie 「明治期の造船業と「外需」事務」
〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・保谷徹・中村尚史・土田宏成
金炯辰 KIM HYUNGJIN 「近世後期朝廷の復興理念と朝幕関係」
〈主査〉村和明〈副査〉牧原成征・小野将・藤田覚・佐藤雄介

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

アンジェイク AHNJaeik「日米開戦外交の再検討―アメリカの積極的極東政策を中心として」
〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・千葉功・土田宏成・吉井文美

鈴木智行 「大都市東京の形成史」

〈主査〉鈴木淳〈副査〉野島（加藤）陽子・粕谷誠・沼尻晃伸・髙嶋修一

（乙）

川本慎自 「中世禅宗の儒学学習と科学知識」

〈主査〉高橋典幸〈副査〉三枝暁子・小島毅・山家浩樹・原田正俊

１１　　中国語中国文学

1.　研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877 年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学科の分離、帝国大学文科大学への改組などを経て、1904 年哲史文三学科制への移行にともない、漢学科が支那哲学、支那文学に分かれ、学科制度の変更によって支那哲学支那文学科となった時期を挟みつつ、現在まで続いている。中国語中国文学の名称は、1953 年新制東京大学大学院人文科学研究科に設けられた専攻に始まる。

研究領域は、中国語学と中国文学の 2 分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビドラマなどが含まれる。ほぼ 3000 年の間に作られたすべての言語テクストが研究の対象である。教員数は、教授 3 名、専任講師 1 名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員 2 名、大学院総合文化研究科の教員 3 名が教育に参加している。学生数は、2020 年度は学部学生 3 名、大学院修士課程 5 名、博士課程 9 名、研究生 2 名、2021 年度は学部学生 7 名、大学院修士課程 6 名、博士課程 10 名、研究生 4 名で、多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陸からの留学生が 13 名にのぼっている。留学生の増加は授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。また国内における研究発表や交流の機会も豊富である。2017 年度からは年に 1 度、学生の研究発表を中心に、京都大学中国語学中国文学研究室と合同で研究会を開催し、交流を図っている。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。また、国内外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催するほか、学内での公開講演会等でも広く発信を行っている。

中文研究室では、1998 年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は 2020 年度第 23 号、2021 年度第 24 号を UT Repository で公開している。
(https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/index.php)

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

大西　克也　教授（中国古典文法、文字学）
齋藤　希史　教授（中国古典詩文）
鈴木　将久　教授（中国近現代文学）

(2)　助教の活動

宮島　和也

在職期間　　2020 年 4 月～2021 年 3 月
研究領域　　中国古文字学、中国古典文法
主要業績

（翻訳）
姜生著、三浦國雄・田訪監訳『漢帝国の遺産　道教の勃興』、東方書店、2020.10（共訳、担当：第 5 章）

（書評）
戸内俊介著『先秦の機能語の史的發展―上古中國語文法化研究序説―』、『中國出土資料研究』第 24 号、pp199-207、2020.7

（非常勤講師）
成蹊大学、「中国語基礎 AI・II」、2020.4～2021.3

佐髙　春音

在職期間　　2021 年 4 月～現在

研究領域　　中国古典小説、明清白話小説

主要業績

（論文）

博士論文「明清白話小説の「語り」 ――『三国志演義』『水滸伝』を例に」、2021.3

（翻訳）

廖偉棠「弔客と凶年」（詩 12 首）、關天林「地に落ちた硝子」（詩 16 首）、關天林「詩について」（散文）、余文翰「死と炸裂――廖偉棠と關天林の詩を読んで」（詩評）、『三田文學』 第 145 号 春季号、三田文学会、pp162-183、2021.5 所収

（非常勤講師）

慶應義塾大学、「中国語学・中国文学演習IX・X」、2020.4～現在、「中国語 I （初級）」、2021.4～現在

(3)　外国人教員の活動

王　俊文（専任講師）

在職期間　　2021 年 4 月～現在

研究領域　　中国近現代文学、日中比較文学

主要業績

（論文）

「「長谷川四郎与中国」初探―以魯迅与周作人為中心」、『上海文化交流発展報告』（2021）、pp140-153、2021.4

（研究ノート）

「まぼろしの日常性」、『新世紀人文学論究』第 6 号、pp335-340、2022.3

（翻訳）

下出鉄男「“人之子”阿 Q」、『魯迅研究月报』2021 年第 10 期、pp4-5

(4)　外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

裴　亮：武漢大学文学院准教授

研究題目―日本における中国新詩の翻訳と受容に関する研究――1920 年代を中心に

研究期間―2019 年 3 月 1 日～2020 年 8 月 31 日

苗　壮：遼寧大学文学院副教授

研究題目―日本における簡牘学と秦漢期書写体制の研究――出土小学書を中心として――

研究期間―2019 年 9 月 1 日～2020 年 10 月 28 日

邵　琛欣：陝西師範大学講師

研究題目―上古中国語における動詞句の意味・構造と具格を表す「以」前置詞句の語順に関する研究

研究期間―2019 年 9 月 20 日～2020 年 7 月 20 日

楊　中薇：コロンビア大学博士課程

研究題目―失われた地図：晩清のスパイ物語及び 20 世紀初期中国小説家の地理的想像における日本の役割

研究期間―2020 年 1 月 2 日～2020 年 8 月 31 日

張　春田：華東師範大学中文系副教授

研究題目―Subjectivity and objectivity of Chinese revolution discourses. 1899-1928

研究期間―2020 年 1 月 21 日～2020 年 4 月 21 日

内地研究員

田中　雄大：日本学術振興会　特別研究員（DC1）

研究題目―中国語文学における「現代主義」的思考様式の形成と変遷――穆時英・戴望舒を起点に

研究期間―2019 年 4 月 25 日～2022 年 3 月 31 日

三村　一貴：日本学術振興会　特別研究員（DC2）

研究題目―上古漢語モダリティ研究

研究期間―2020 年 4 月 24 日～2022 年 3 月 31 日

片倉　峻平：日本学術振興会　特別研究員（DC2）
研究題目―用字避複を中心とした、上古中国語の用字法に関する研究
研究期間―2021 年 4 月 28 日～2023 年 3 月 31 日
福長　悠：日本学術振興会　特別研究員（PD）
研究題目―中国における左翼文学とモダニズム文学の交錯――張天翼を中心に――
研究期間―2020 年 4 月 24 日～2023 年 3 月 31 日

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

なし

2021 年度

「閻連科『丁庄夢』に見る死を待つ人の欲求、倫理観」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

小嶋奎吾　「『史記』と『漢書』における辞賦・文章の引用について」〈指導教員〉齋藤希史

2021 年度

森下朋美　「馮夢龍と万暦三大征」〈指導教員〉大木康

金卓　　「上古中国語における「疾」「病」再考――出土資料による」〈指導教員〉大西克也

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

(甲)

権慧 Quan Hui　「東アジアにおける村上春樹文学の翻訳と受容」

〈主査〉鈴木将久〈副査〉伊藤徳也・藤井省三・島村輝・南富鎮

佐髙春音　「明清白話小説の「語り」――『三国志演義』『水滸伝』を例に」

〈主査〉大木康〈副査〉齋藤希史・上原究一・田口一郎・中里見敬

(乙)

なし

2021 年度

(甲)

千賀由佳　「明末通俗小説における僧侶と神異」

〈主査〉大木康〈副査〉齋藤希史・横手裕・上原究一・柳幹康

李墨宇 LIZHAOYU　「南朝文人の精神世界と詩的言語」

〈主査〉齋藤希史〈副査〉大西克也・谷口洋・田口一郎・木津祐子

(乙)

なし

１２　　東洋史学

1.　研究室活動の概要

本研究室の起源は、1910 年の「東洋史学科」の成立まで遡る。当初は中国・朝鮮およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2018～2019 年度本専修課程の授業を担当したのは、教授 2・准教授 2・助教 1 名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995 年 4 月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009 年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけではなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるほか、史学会大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡協議会、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわり、また個別的には、中国社会文化学会、社会経済史学会、歴史学研究会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係をもちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

教　授　　佐川　英治　　(中国古代史)
教　授　　吉澤　誠一郎　　(中国近現代史)
准教授　　島田　竜登　　(東南アジア史)
准教授　　守川　知子　　(西アジア史)

(2)　助教の活動

助　教　海老根　量介
在職期間　2018 年 4 月～2021 年 3 月
専門分野　中国古代史
主要業績

(論文)

海老根量介「岳麓書院蔵秦簡《置吏律》札記」、王捷主編『出土文献与法律史研究』第 9 輯、法律出版社、2020.11

海老根量介「歴史のなかの中国の南向政策――漢と南越の関係についてのケーススタディ」、中居良文編著『中国の南向政策』、御茶の水書房、2020.12

海老根量介「関於包山楚簡中所見“県”的若干認識」、徐少華・谷口満・羅泰主編『楚文化与長江中遊早期開発国際学術研討会論文集』武漢大学出版社、2021.2

(学会発表)

国際、海老根量介、「再論“視日”――以伝世文献与秦漢行政文書為線索」、第九届出土文献青年学者国際論壇暨先秦秦漢荊楚地区的空間整合学術工作坊、2021.3

(非常勤講師)

立正大学経済学部、「歴史学の世界」、2019.9～2021.3
明治大学理工学部、「中国語 1a」・「中国語 2a」、2020.4～2021.3

助　教　三浦　雄城

在職期間　2021 年 4 月～現在

専門分野　中国古代史

主要業績

（論文）

三浦雄城、「後漢光武帝と儒教的讖緯――莽新末後漢初の政治情勢から――」、『東洋学報』、2020.3

三浦雄城、「後漢官学における讖緯と章句」、『中国――社会と文化――』、2020.7

(3)　外国人研究員・内地研究員

呂博（中国）　2019 年 4 月～2020 年 6 月

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「陳羣と九品中正制」

「秦の軍功爵制について」

「劉邦集団と離反者」

「南京国民政府時期の体育教育」

「象とムガル朝：インド支配拡大期における制度・軍事・儀礼」

「宋代墓誌に見る陰宅風水の実態」

「アッバース朝の都バグダードと『イスラム帝国夜話』にみる 10 世紀の社会」

「近代中国における全体主義概念の受容――1930～40 年代の雑誌記事を中心として」

「易地聘礼交渉期の倭学訳官および問慰行の役割―朝鮮時代後期問慰行研究の一環として」

「1930 年代におけるタイ人日本留学制度」

「半両銭の成立及び実態について」

「荀子の「礼」の思想と法家との関連について」

「ラッフルズと日本貿易計画」

「対災害政策から見る前漢代政治」

「前漢における恩赦の変化」

「近世日本における東南アジア産品」

2021 年度

「11 世紀ヘラートの都市社会――新出史料『ヘラートの歴史』を中心に――」

「香港メディアと対外ボイコット・ストライキ（1919-26）」

「ペルシア語史料が描く 15～16 世紀の明朝―『ハターイー・ナーマ（中国の書）』を中心に」

「国際都市の帝国臣民：日中戦争期の上海朝鮮人社会」

「国際連盟東洋婦人売買調査と日本政府」

「19 世紀ルクソールの人々と古代遺跡」

「上海租界における中国法院設置を巡る外交交渉 (1928-30)」

「南京国民政府建設委員会と電力産業」

「インドネシア賠償交渉をめぐる日本メディアの論説」

「アッバース朝カリフ宮廷の侍従・宦官・グラーム」

「日中戦争期、中華民国における漫画家の活動」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

大矢純　「Portuguese and Muscat after the Fall of Hormuz Island −Toward the Establishment of a "Second Hormuz" in the Sea of Oman−（ホルムズ島陥落後のポルトガル人とマスカト―オマーン湾海域における「第二のホルムズ」形成を目指して―）」〈指導教員〉守川知子

中島優希　「清末の一知識人の師弟関係と生活態度―人の師としての王闓運―」〈指導教員〉吉澤誠一郎

三宅舞佐志　「5-6 世紀内陸アジアの勢力再編と北魏六鎮の乱」〈指導教員〉佐川英治

2021 年度

劉昂　　「宮城中枢部に見る魏晋南北朝時代の皇帝権力」〈指導教員〉佐川英治

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

宇都宮美生 「隋唐洛陽城水利研究」

〈主査〉佐川英治〈副査〉平勢隆郎・小寺敦・妹尾達彦・塩沢裕仁

付晨晨 FU CHENCHEN 「中国中古の類書と士人社会」

〈主査〉佐川英治〈副査〉吉澤誠一郎・大津透・齋藤希史・古勝隆一

板橋暁子 「兩晉十六國時代の「正統」と「周縁」」

〈主査〉佐川英治〈副査〉小寺敦・關尾史郎・小林聡・阿部幸信

三浦雄城 「漢代符瑞と儒教国教化の研究」

〈主査〉佐川英治〈副査〉小島毅・吉澤誠一郎・小寺敦・小嶋茂稔

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

上出徳太郎 「財政支援からみた近代中国の新疆統治」

〈主査〉吉澤誠一郎〈副査〉佐川英治・黒田明伸・杉山清彦・新免康

石原遼平 「秦・前漢期における労役制度の類型と変遷」

〈主査〉佐川英治〈副査〉大津透・小寺敦・宮宅潔・安部聡一郎

守田まどか 「Neighborhoods of Ottoman Istanbul: Politics of Order and Urban Collectivity, 1703-54（オスマン帝都イスタンブルの街区：秩序と地縁的共同体（1703-54 年））」

〈主査〉森本一夫〈副査〉吉澤誠一郎・秋葉淳・黛秋津・黒木英充

（乙）

なし

１３　　中国思想文化学

1.　研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治 10 年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と 2 度の名称変更を経て現在に至っている。平成 7 年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成 21 年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。令和 2（2020）年度の教員は教授 3 名、助教 1 名で、令和 3（2021）年度は教授 3 名、助教 1 名であり、他に非常勤講師を 4～5 名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成 4 年度より毎年 2 名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助教 1 名体制にともない、平成 8 年度からは嘱託 1 名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に令和 2 年度は計 15 名（博士課程 8 名、修士課程 4 名、研究生 3 名）が在籍、令和 3 年度は計 16 名（博士課程 9 名、修士課程 4 名、研究生 3 名）が在籍、テューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選抜される事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年 1～3 名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会文化学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和 48 年～）が組織されて月例会を開いており、平成 2 年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

小島　毅　教授　　専門分野　儒教史・東アジア王権論
横手　裕　教授　　専門分野　道教史・中国三教交渉史
陳　　捷　教授　　専門分野　中国書籍史・東アジアの書籍交流史・日中文化交流史

(2)　助教の活動

李　龢書　助教　　専門分野　道教思想史
在職期間　2016 年 4 月～2021 年 3 月
主要業績
（著書）
李龢書『晉唐道教の展開と三教交渉』、汲古書院、2021.3

平澤　歩　助教　　専門分野　儒教史・五行思想史
在職期間　2021 年 4 月～現在
主要業績
（著書）
共著、川原秀城、井ノ口哲也、平澤歩、田中良明、古橋紀宏、池田恭哉、南澤良彦、木下鉄矢、水上雅晴、陳捷、新居洋子、渡辺純成、志野好伸、『漢学とは何か――漢唐および清中後期の学術世界』、勉誠出版、2020.7

（学会発表）

国内、平澤歩、「テキストの変容する過程に関する一試論――『洪範五行伝』を題材に論ず」、東方学会国際東方学者会議、オンライン（Zoom）、2021.5.15

（非常勤講師）

早稲田大学人間科学部、「中国語基礎」、2013.9～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「『呂氏春秋』の「本」思想」

「近世日本における家を主体とした養生―その実践と背景について―」

2021 年度

「『水滸伝』における女性観」

「駐米公使張蔭桓の中華意識及び華人管轄論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

顧嘉晨　「明末清初における遺民像についての研究―王夫之の孤臣像を中心に―」〈指導教員〉小島毅

2021 年度

海藤水樹　「西晋『荘子』注釈史における司馬彪『荘子注』の位置」〈指導教員〉横手裕

脇山豪　「姫志眞の思想史的位置づけ――『知常先生雲山集』を中心に――」〈指導教員〉横手裕

金スマロ　「『鶡冠子』における生命観の考察」〈指導教員〉中島隆博

孔詩　「十三世紀後半における道仏二教の交渉状況に関する再認識」〈指導教員〉横手裕

徐燕斌　「清末民国初期における志士像――国家と革命の視点から――」〈指導教員〉小島毅

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

頼思妤　「東アジアにおける女仙信仰と女仙伝－その起源と展開、伝播」

〈主査〉横手裕〈副査〉小島毅・大木康・高山大毅・二階堂善弘

水野博太　「大学と漢学――東京帝国大学とその前身校における漢学および「支那哲学」の展開について――」

〈主査〉小島毅〈副査〉中島隆博・山口輝臣・高山大毅・町泉寿郎

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

１４　　インド語インド文学

1.　研究室活動の概要

インド亜大陸では三千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治 34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治 18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アーリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。平成 8（1996）年度からは、これも紀元前にさかのぼる文献を有し、長い歴史と内容を誇るドラヴィダ系のタミル語タミル文学の授業も設けられた。さらには、プラークリット語各種やヒンディー語を学べる設計となっている。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の充分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、本専修課程でいうインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術書、歴史書、占星術・医学・建築などの科学文献、さらには仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として、両者で単一のコースを形成している。学部・大学院ともに、さまざまな行事を共同で行い、インドの文学と言語について学ぶ機会を豊かなものにしている。

2020 年度・2021 年度はコロナ禍により授業をオンラインで行った。本専修の中核をなす原典講読が、複数の資料を PC 画面上で切り替えつつファイルに書き込んでいくオンライン授業と相性がいいことは発見であった。対面によるコミュニケーションを大切にしつつ、オンラインの便利さをも取り込んでいく方式を、今後は模索することになるだろう。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

非常勤講師

伊澤敦子、水野善文、宮本城、横地優子（2021 年度）

(2)　助教の活動

尾園絢一

在職期間　2020 年 4 月－2022 年 3 月

研究領域　サンスクリット語学、パーニニ文法学

主要業績

（論文）

尾園絢一、「ヴェーダ語の命令的言及法（hortativer Injunktiv）について」、『歴史言語学』、第 9 号、pp.45-66、2020.12

Junichi Ozono、「“Ai. śrāyati und lat. caleō: Zu einem Fortsetzer der uridg. *-eh1-Bildung im Altindoarischen”」、『Historische Sprachforschung』、Band 131、2021.5

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「バガヴァッド・ギーターとウィトゲンシュタイン」

2021 年度

なし

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

谷口力光 「中世インド法の基礎研究――Mitākṣarā と Ujjvalā における相続理論――」〈指導教員〉梶原三恵子

2021 年度

なし

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

（甲）（乙）

なし

１５　　インド哲学仏教学

1.　研究室活動の概要

本専修課程は、1879 年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916 年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播して、それぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2020 年度現在、教員は教授 2 名（1 名は兼担）、准教授 2 名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に対応し、その一部を構成する。そこでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門と連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年 3～4 名ほどであり、学士入学者も 1～2 名ほどいる。学部卒業生の半分近くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学するが、一般企業に就職する者も少なくない。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくる者も稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としており、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通している。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に 4 回研究例会を開催している。そこでは、大学院の博士課程在学生などによる研究発表、国際会議等で最新成果を発表した教員による帰朝報告、海外留学者の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993 年以来、年に 1 回、『インド哲学仏教学研究』を刊行している。

本専修課程が関わるインド哲学ならびに仏教学の研究は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。2020 年度には、東国大学校（ソウル）、北京大学（北京）、台湾大学（台北）とともに合同でオンライン・シンポジウムを開催し、教員による発表が行なわれた。2021 年度には中国の清華大学との学生交流のシンポジウムに、教員と大学院生が参加した。また、数名の留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の諸学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951 年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中枢的役割を担い続けて今日に至っている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

教授　下田　正弘　　専門分野　インド・東南アジア仏教　在職期間　1994 年 10 月より現在に至る
教授　蓑輪　顕量　　専門分野　東アジア・日本仏教　　在職期間　2010 年 4 月より現在に至る
准教授　高橋　晃一　　専門分野　インド・チベット仏教　在職期間　2017 年 4 月より現在に至る
准教授　加藤　隆宏　　専門分野　インド哲学　在職期間　2018 年 4 月より現在に至る

(2)　助教の活動

一色　大悟　　専門分野　仏教学
在職期間　2020 年 4 月～現在
主要業績
（論文）
一色大悟、「東アジアの諸註釈が論じる『倶舎論』の全体構成―三分分別から破我別論へ―」、『印度學仏教學研究』、70(2)、970-975 頁、2022.3
一色大悟、小林遼太郎、「1960 年代における東京大学仏教青年会学生部の復興―問いとしての「仏教青年」―」、『仏教文化研究論集』、21/22、3-39 頁、2022.3

（解説）

一色大悟（平川彰、加藤純章、秦本融による旧版項目を改訂）、「部派仏教の教理」「発智論」「毘婆沙論」「倶舎論」「順正理論」「アビダルマ・ディーパ」「成実論」、斎藤明他監修『仏典解題事典第三版』（春秋社，東京）、pp.16-20, 148-157、2020.12

（学会発表）

国内、一色大悟、「近世日本のアビダルマ研究におけるインド仏教史認識―部派観の変遷を中心として―」、日本印度学仏教学会第 71 回学術大会、創価大学（オンラインリモート会議）、2020.7.5

国際、Daigo Isshiki, "Acceptance of the Abhidharmakosa in Japan: Focusing on the Relationship with Buddhist Studies in Modern Era," The 4th Biannual International Conference of the Group of 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies "East Asia as a Method of Research", Online, 2021.3.14

国内、一色大悟、「東アジアの諸註釈が論じる『倶舎論』の全体構成―三分分別から破我別論へ―」、日本印度学仏教学会第 72 回学術大会、オンライン、2021.9.4

（講演）

国内、一色大悟、「仏教思想として日本の近代仏教学を再考する：輪廻批判・縁起説論争・仏教研究法」、東京大学東アジア藝文書院研究会「東アジアと仏教―人と仏教の交錯から照らす東アジア」第 2 回、オンライン、2022.3.9

国内、一色大悟、「存在論のもう一つの系譜―説一切有部・衆賢・体滅用滅論争」、未来哲学研究所「第 2 回探険・哲学叢林」、オンライン、2022.3.15

（予稿・会議録）

国際会議、Daigo Isshiki, "Acceptance of the Abhidharmakosa in Japan: Focusing on the Relationship with Buddhist Studies in Modern Era," , *Proceedings of the 4th Biannual International Conference of the Group of 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies March 14th 2021 (Online Conference Hosted by the University of Tokyo): East Asia as a Method of Research*, pp. 59-64

国内会議、護山真也、師茂樹、一色大悟、末木文美士、「座談会　仏教学研究と現代思想の最前線」、『未来哲学』、3、302-330 頁、2021.12

（会議主催（チェア他））

国際、対法雑誌刊行会主催シンポジウム「東アジアにおける仏教の宇宙観」、チェア、オンライン、2021.9.11

（会議コメンテーター他）

国内、東京大学アジア研究図書館・東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）主催シンポジウム「漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開」、コメンテーター、オンライン、2020.8.8

国内、公開シンポジウム「バウッダコーシャの総括と展望」第二部「パネルディスカッション」、パネリスト、オンライン、2020.11.21

国内、2021 年度 RINDAS 第 1 回若手セミナー「仏教今昔―日印・ネパール・女性―」、コメンテーター、オンライン、2021.11.21

国内、東京大学東アジア藝文書院シンポジウム「死から生の価値を問い直す」、コメンテーター、オンライン、2022.2.11

（他機関での講義等）

東京大学仏教青年会、「アビダルマ入門」、2020.1～2021.3、「近現代仏教入門」、2021.4～2022.3

非常勤講師、中央大学文学部、「印度哲学史」、2020.4～

非常勤講師、放送大学、「仏教思想―原典に学ぶ―」、2020.10、2021.10

非常勤講師、筑波大学、「宗教学特講 III」、2021.1～2021.3、2022.2～2022.3

（学会）

国内、対法雑誌刊行会、事務局長、2020.2～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「『摩訶止観』煩悩境における四悉檀について―煩悩対処の観点から―」

特別演習 5 名

2021 年度

特別演習 3 名

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

木村光仁 「『法華経』「法師品」の研究―法師の出現―」〈指導教員〉下田正弘

2021 年度

鈴木政宏 「『文殊師利根本儀軌経』の成立と展開に関する包括的研究」〈指導教員〉下田正弘

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

楊潔 YANG Jie 「瑜伽行派における五遍行の研究―『瑜伽師地論』を中心として―」

〈主査〉髙橋晃一〈副査〉下田正弘・馬場紀寿・斎藤明・室寺義仁

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

朴賢珍 Park Hyunjin 「仏華厳経「寂滅道場会」の研究」

〈主査〉下田正弘〈副査〉蓑輪顕量・高橋晃一・馬場紀寿・斎藤明

（乙）

なし

１６　　イスラム学

1.　研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982 年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2020 年度及び 2021 年度は教授 1 名、准教授 1 名がそれぞれ近代より前の古典期イスラムの法学や伝承、その他の諸思想の文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、イスラム経済、アフリカ・イスラム史研究、南アジア・イスラム史研究、現代アラブ政治、イラン思想、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属するアジア史専門分野と連携しつつ、さらには先端科学技術研究センターならびに大学院総合文化研究科の教員 2 名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年 2～3 名前後である。学部及び大学院の在籍数は、2020 年度は 9 名、2021 年度は 7 名である。他大学からの学士入学者もいる。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2 名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

2020年度

教授　　柳橋博之　専門分野　イスラーム法・預言者伝承

准教授　菊地達也　専門分野　シーア派思想史

2021年度

教授　　柳橋博之　専門分野　イスラーム法・預言者伝承

准教授　菊地達也　専門分野　シーア派思想史

(2)　助教の活動

井上貴恵　専門分野　スーフィズム

在職期間　2019 年 4 月～2021 年 3 月

主要業績

（論文）

Kie Inoue、「The Method of Guidance on the Sufi Path of Shams-i Tabrizi」、『Debate, Dialogue and Diversity in Sufism』、pp. 103-114、2021.4

井上貴恵、「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』第 3 章翻訳」、『イスラム思想研究』、第 3 号、123-139、2021.7

小野仁美　専門分野　イスラム法

在職期間　2021 年 4 月～現在

主要業績

（著書）

共著、鷹木恵子編（長沢栄治監修）、『越境する社会運動（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ２）』、明石書店、2020.3

（論文）

小野仁美、「『子の利益（マスラハ）』とは何か―イスラーム法と現代チュニジア法―」、『中東イスラーム圏における社会的弱者の権利を考える』、SIAS Working Paper Series、33、21-51 頁、2021.2

Ono Hitomi、「The Concept of Family in the Thought of Ibn ʿAshur: Islamic Traditions and Modern Patriarchy (Special Issue: Gender and Tradition in Contemporary Islam)」、『Orient: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan』、56、69-90 頁、2021.4

（学会発表）

国内、小野仁美、「21 世紀におけるマカースィド・シャリーア理論の展開」、日本中東学会第 36 回年次大会特別研究集会、オンライン、2020.8.30

国内、小野仁美、「チュニジアの女性裁判官と「子の利益」」、「中東イスラーム圏における社会的弱者の権利を考える」（NIHU 現代中東地域研究上智拠点研究会）、オンライン、2020.10.31

国内、小野仁美、「イスラーム法の中に〈子ども〉を探す試み」、2020 年度第 15 回 女性史学賞 受賞記念講演、オンライン、2021.1.9

国内、小野仁美、「コメント」、イスラーム地域研究・若手研究者の会 1 月例会：髙橋稜央「後ウマイヤ朝期アンダルスにおける混合家族と法学議論」、オンライン、2021.1.31

国内、小野仁美、「イスラーム家族法とフェミニズム―チュニジアの相続規定をめぐる多様な立場」、2021 年度立教大学史学会大会 公開講演会「人権と向き合う現代世界―権力と人権をめぐる現代人類史・誌的省察のために」、オンライン、2021.6.19

（会議主催（チェア他））

国内、公開セミナー「日本に暮らすムスリムを取り巻く諸問題―職場・学校・地域から」、実行委員長、オンライン、2020.9.26

国内、比較ジェンダー史研究会「同性愛の比較文化史」、実行委員長、オンライン、2021.2.13

国内、映画『Voices from the homeland』上映会、実行委員長、オンライン（ウェビナー）、2021.8.29

国内、公開シンポジウム「女性の財産権・相続をめぐる比較ジェンダー史」、実行委員長、オンライン、2022.2.11

（受賞）

国内、小野仁美、2020 年度第 15 回女性史学賞、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、2020.10

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、小野仁美、研究代表者、「身体をめぐるイスラームの規範とジェンダー：前近代の思想と法の比較研究」、2022～

文部科学省科学研究費補助金、小野仁美、分担者（代表者は桜美林大学・堀井聡江）、「ムスリム社会におけるマスラハ（福利）の実践―弱者の権利をめぐる比較研究」、2020～

文部科学省科学研究費補助金、小野仁美、分担者（代表者は追手門大学・三成美保）、「「アジア・ジェンダー史」の構築と「歴史総合」教材の開発」、2020～

文部科学省科学研究費補助金、小野仁美、分担者（代表者は東京大国語大学・長沢栄治）、「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」、2020～

（非常勤講師）

立教大学、「イスラームの世界」、「国際社会の中の宗教」、2020.4～2022.3

多摩美術大学、「国際社会と宗教Ⅰ・Ⅱ」、2020.4～2022.3

千葉商科大学、「アラブ・イスラーム文化論」、2020.4～2022.3

大阪大学、「イスラーム法概論」、2021.4～2022.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

なし

2021 年度

「現代イスラム社会における食肉を避ける食生活の出現」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

堂本彩賀 「Islam and Politics in al-Ghannūshī's Thought（ガンヌーシーの思想におけるイスラームと政治）」〈指導教員〉柳橋博之

2021 年度

西山尚希 「モンゴル期における十二イマーム派イマーム論の展開」〈指導教員〉菊地達也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

小野純一 「イブン＝アラビーの神秘体験と形而上学的思考の根拠―事物・文字・無限をめぐって―」

〈主査〉菊地達也〈副査〉竹下政孝・鎌田繁・小林春夫・東長靖

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

１７　　西洋古典学

1.　研究室活動の概要

西洋古典学は、ギリシア語とラテン語で記されたあらゆる文字資料を対象とする。文字資料の研究を通じて古典古代世界の文化全体の把握を目指す学問である。そして、ヨーロッパの文化と社会を理解する上で、この学問の重要性はいまさら強調するまでもない。欧米においては、広範な領域を対象に永い伝統を誇る総合的学問として認識されている。本専修課程では、ギリシア語とラテン語の双方の読解に習熟し、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、少しづつ視野を拡大していくという指導方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は、2021 年 3 月の葛西康徳教授の定年退職後、教授 1 人助教 1 人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシア語・ラテン語の両言語について原典講読の授業を、韻文・散文にわたって開講できるように努めている。しかし、現状では十分とはいえない。

そこで、従来は全国の他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしてきた。しかし、2020-2021 年度は、コロナ禍の影響のため、海外からはおろか国内の研究者を招くことすら困難だった。当研究室の院生や出身者が主体となって行っている研究会、「クラシカル・セミナー」については、オンライン形式で 2020 年度は 5 回、2021 年度は 9 回開催した。卒業論文や修士論文にかんして構想発表、中間報告などが行われた。

研究室紀要（査読つき）を原則として年 1 回発刊している。2022 年 3 月に第 12 号を刊行した。

この他、葛西教授が中心となって 2019 年度まで、東京大学本部「体験活動」プログラムの資金援助を受け、オクスフォード大学クライスト・チャーチを主たる宿泊地として、「古典学とコモンロー」入門と称するサマープログラムを実施してきた。このサマープログラムについても、やはり世界的なコロナ禍のために、現地での対面開催は困難となり、オンライン開催にせざるを得なかった。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

葛西　康徳　　ギリシア・ローマ法とその普及、法廷弁論、ギリシア宗教、西洋古典学継受史
（教授）2011 年度～2020 年度

日向　太郎　　ラテン語韻文、ギリシア・ローマ叙事詩、西洋古典の受容
（教授）2020 年度～

⑵　助教の活動

吉川　斉

在職期間　　2020 年 10 月～2022 年 3 月

研究領域　　西洋古典学、古典受容研究、イソップ研究

主要業績

（論文）

吉川斉、「「イソップ」の渡来と帰化」、葛西康徳、ヴァネッサ・カッツァート編『古典の挑戦―古代ギリシア・ローマ研究ナビ』所収、知泉書館、2021.3

（翻訳）

吉川斉、「ギリシアは東からやって来た？」、葛西康徳、ヴァネッサ・カッツァート編『古典の挑戦―古代ギリシア・ローマ研究ナビ』所収、知泉書館、2021.3

（解説）

吉川斉、「Perseus Digital Library : 人文情報学の先駆的図書館」、人文情報学研究所（監修）・小風尚樹他（編）『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』所収、文学通信、2021.7

吉川斉、「The digital Loeb Classical Library：西洋の古典文学叢書の電子版」，人文情報学研究所（監修）・小風尚樹他（編）『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』所収、文学通信、2021.7

（他機関での講義等）

非常勤講師、大妻女子大学、「ヨーロッパ研究入門 A1、A2」、～2021.3

非常勤講師、関東学院大学、「ギリシャ・ラテンの世界 1、2」「西洋古典語 1、2」、～2022.3

非常勤講師、津田塾大学、「ギリシャ語・ラテン語演習 a、b」、～2022.3

非常勤講師、東京農工大学、「多文化共生論」、～2022.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「ヘシオドス『神統記』における女神「夜」の子供たちについて」

「「トロイアの女」におけるヘレネとヘカベの対話の立ち位置・作用について」

「英雄アイアスのイメージの形成」

「Ἐμπεδοκλῆς の断片 115 における δαίμων について―Dodds のシャーマニズム論を参考にして―」

「ギリシア語史における消失したディガンマの研究」

「古代ギリシアにおけるバルバロイ」

2021 年度

「酒神ディオニュソスの原形を求めて―エウリピデス『バッカイ』を中心に―」

「『オデュッセイア』第 9 歌における客人歓待」

「エウリピデス『オレステス』におけるオレステスの「狂気」についての精神医学的考察」

「アリストテレースを中心とした古代ギリシアと現代哲学における時間の概念について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

本田元　「エウクレイデス『ファイノメナ』のテクスト伝承」〈指導教員〉日向太郎

2021 年度

橋本譲次 「ソポクレス『ピロクテテス』の人物造形におけるホメロス叙事詩の影響」〈指導教員〉日向太郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）（乙）

なし

2021 年度

（甲）

松浦高志 「古期ギリシア語碑文に見られる定動詞の接語としての性質について」

〈主査〉日向太郎〈副査〉小林正人・筒井賢治・葛西康徳・佐野好則

（乙）

なし

１８　　フランス語フランス文学

1.　研究室活動の概要

本研究室は、テクストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテクストという概念の拡張にともなって、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授 2 名、准教授 1 名、外国人教師（准教授）1 名、助教 1 名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実際的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2021 年度の大学院学生数は、修士課程 18 名、博士課程 17 名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格（Master II）を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。もちろん、本研究科に課程博士論文を提出し博士号を取得する学生もコンスタントに存在する。一方で、修士課程修了後に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年 5 名程度である。2021 年度の学部在学生は 14 名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、他専修課程・他学部の学生にも受講しやすい授業を心がけている。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院 2 コマ（「アカデミック・ライティング」を含む）、学部 2 コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年 1～2 回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリおよびリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年 1 名の大学院学生の交換を続けている。また、例年、東京大学の交換留学生制度を使って、学部生、修士学生が、パリ第 8 大学、ストラスブール大学、ブザンソン大学、ジュネーヴ大学等に留学している。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。以上は、例年の国際交流の様子であるが、2020-2021 年度については、新型コロナ感染症の世界的流行のため、学生の留学、研究者の来日がすべてストップしてしまった。流行が落ち着くとともに、学生の留学は 2021 年度から、研究者の来日については 2022 年度から徐々に常態に戻りつつある。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

教授　　塚本　昌則（ヴァレリー、フランス 20 世紀文学）
教授　　塩塚　秀一郎（ペレック、フランス 20 世紀文学）
准教授　王寺　賢太（ディドロ、フランス 18 世紀文学）

(2)　助教の活動

2020 年度

上杉　誠

研究領域　　19 世紀フランス文学、特にスタンダール研究

主要業績

（論文）

上杉誠「『パルムの僧院』における名誉の掟 :「地方色」をめぐって」、『仏語仏文学研究』第 53 号、東京大学仏語仏文学研究会、2020.6、p. 73-93

（翻訳）

共訳、ミシェル・ビュトール『レペルトワール　I』、石橋正孝監訳、幻戯書房、「錬金術と言語」（p.17-24）、「『クレーヴの奥方』について」（p. 84-89）、2021.1

（非常勤講師）

共立女子大学、「基礎フランス語」、「応用フランス語」、2018.10～2021.3　学習院大学、「フランス語圏文化演習」、2019.4～2021.3

2021 年度

浜永　和希

研究領域　　フランス近代詩（特にランボー研究）

主要業績

（学会発表）

国内、浜永和希「花々について詩人たちが口をつぐむこと――ボードレール、バンヴィル、ランボーにおける英雄的詩人像の裏面」、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2021.10.30

(3)　外国人教員の活動

准教授　マリアンヌ・シモン＝及川（Marianne SIMON-OIKAWA）

略歴

1989 年 9 月　　国立高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）およびパリ第 7 大学入学

1990 年 9 月　　同大学にて仏文（現代文学）学士号、英文学士号取得

1991 年 9 月　　同大学にて修士号取得（現代文学）

1992 年 7 月　　大学教育教授資格（アグレガシオン）取得

1993 年 9 月　　パリ第 7 大学にて DEA (PhD)取得（現代文学）

1993 年 9 月－1995 年 8 月　東京大学研究生

1995 年 9 月－1998 年 9 月　リール大学講師（現代文学）

1996 年 9 月　　パリ第 7 大学にて日本語学士号取得

1999 年 12 月　　パリ第 7 大学にて文学博士号取得（現代文学）

1999 年 4 月－2005 年 4 月　早稲田大学非常勤講師（フランス文学）

2000 年 9 月－2005 年 9 月　慶應義塾大学訪問講師（フランス文学）

2000 年 4 月－2008 年 8 月　日仏会館客員研究員

2006 年 10 月　　東京大学准教授（現在に至る）

2016 年 6 月　　パリ第 7 大学にて教授昇進資格取得（Habilitation à diriger des recherches）

2016 年 11 月　　日仏会館客員研究員（現在に至る）

研究対象　　フランス文学と絵画；日仏両文化における視覚詩の伝統

主要業績

（著書）

編著、Carole Aurouet et Marianne Simon-Oikawa、『Le Cinéma des Poètes, dans Revue de langue et de littérature françaises, no54』、Société de langue et littérature françaises de l’Université de Tokyo、2020

編著、Hélène Campaignolle-Catel, Ségolène Le Men et Marianne Simon-Oikawa、『« Illustrer ? », dans Textimage, no12』、2020

単著、Marianne Simon-Oikawa、『Epigenetic Poetry』、Fondazione Bonotto、2020

（論文）

Marianne Simon-Oikawa、「L’écriture scénaristique d’Ilse Garnier : pour une poétique du ciné-poème spatialiste」、『Revue de langue et de littérature françaises』、54、107-127 頁、2020

Marianne Simon-Oikawa、« Le livre d’artiste, une création en miroir － Interactions entre peintre et poète », entretien avec Michel Mousseau、『Textimage』、12、2020

Marianne Simon-Oikawa、« Femme ou renarde ? Écran de papier et révélation de l'invisible chez Tsukioka Yoshitoshi »、『écriture et image』、1、2020

Marianne Simon-Oikawa、« Image et écriture »、『L'Archicube』、29、91-96 頁、2020

Marianne Simon-Oikawa、「Ilse Garnier (1927-2020), une vie dans l’espace」、『Europe』、1093、317-318 頁、2020.5

（書評）

Jan Baetens、『"Pour le roman-photo" et"Le Roman-photo, un genre entre hier et demain"』、『Littera』、5、146-147 頁、2020.3

Jacques Donguy、『Jean-François Bory. Une monographie』、les presses du réel、『Art Press』、476、96 頁、2020.4

Ilse Garnier, Pierre Garnier, Carlfriedrich Claus、『« wobei die Ethik in der Kühnheit der Veränderung liegt ». Die Künstlerfreundschaft zwischen Carlfriedrich Claus und Ilse und Pierre Garnier, Briefwechsel 1963-1998" et "Une amitié de lettres"』、Kerber Verlag / Kunstsammlungen Chemnitz et L'herbe qui tremble、『Acta fabula』、https://www.fabula.org/revue/document12897.php 頁、2020.5

Collectif、『Celebrity Cafe (4)』、『Art Press』、485、97 頁、2021.2

Frédéric Acquaviva、『Isidore Isou』、Éditions du Griffon、『Acta fabula』、2021.4

Cécile Sakai et Nao Sawada、『Pour une autre littérature mondiale – La traduction franco-japonaise en perspective』、Philippe Picquier、『Acta fabula』、2021.5

（他機関での講義等）

特別講演、Yonsei University (Seoul, South Korea)、「La poésie visuelle en France et au Japon : échanges et créations」、2020.8

特別講演、上智大学、「Poèmes à voir : tradition et métamorphoses de la poésie visuelle en France」、2020.11

(4) 受け入れ外国人研究者

2020 年度、2021 年度

コロナ禍のため受け入れなし。

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「アンドレ・ブルトン『ナジャ』 ―労働と放蕩、その間で揺れ動く」

「『明るい部屋』における「見えない場」」

「アンドレ・ブルトン『ナジャ』における「私」を巡る問いかけ――「思いあたる」という行為から浮かび上がるイメージ――」

「「詩」の条件―マラルメ後期韻文詩における言語と詩人の問題」

「内面化された都市を書くこと――文学論としてのジュリアン・グラック『ひとつの町のかたち』――」

「エメ・セゼール『帰郷ノート』における身体の問題」

「パスカル・キニャール『音楽の憎しみ』にみるリズム」

「サルトル『嘔吐』に関して」

他、学科卒 1 名

2021 年度

「アンドレ・ジッド『狭き門』における「人間性」の称揚」

「父親とは誰か？『肉体の悪魔』における親子関係」

「ボリス・ヴィアン「日々の泡」における愛と死」

「カミュ『異邦人』論」

「ジョルジュ・ペレック「眠る男」の映画化について　～映画が生み出した付加価値の研究～」

「ジッド『贋金つかい』における小説の生成と自己描出について」

「流出するゴモ――マルセル・プルースト『失われた時を求めて』における女性と液体――」

「フロベール『感情教育』を読む ――〈ロザネットの肖像画〉をめぐる考察を中心に――」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

梅﨑紫乃 「『サラムボー』における生成と解体―ゆらぐ« corps »の表象から―」〈指導教員〉塚本昌則

清水佳暁 「「非個人」になれないエロディアード―「頑なな心」で抗う、意志のメタポエム「舞台」―」〈指導教員〉塩塚秀一郎

酒井七海 「『モンテ＝クリスト伯』は何故おもしろいのか？――テクスト戦略と英雄像」〈指導教員〉塚本昌則

山下奈女美 「クロード･シモン『アカシア』(1989)―残滓から現れる存在と不在への問いかけ」〈指導教員〉塚本昌則

渡邉禎恒 「Michel Houellebecq: The Americanism of anti-hypermodern literature（ミシェル・ウエルベック：アンチ・ハイパーモダン文学のアメリカニズム）」〈指導教員〉塩塚秀一郎

2021 年度

池田崇弘 「ステファヌ・マラルメ研究　想像力と喜びについて。マラルメの意味の探求」〈指導教員〉塩塚秀一郎

板場匡史 「ル・クレジオ初期作品の都市論的分析の試み――物質的恍惚から都市へ――」〈指導教員〉塩塚秀一郎

氣駕知明 「サン＝テグジュペリ『人間の土地』における、具体的なイメージと、その役割について」〈指導教員〉塚本昌則

青木仁美 「『聖アレクシス伝』における家族の表象」〈指導教員〉王寺賢太

益田伊織 「応答と交流――ジョルジュ・バタイユ『文学と悪』」〈指導教員〉塚本昌則

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

(甲)（乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

なし

2021 度

(甲)

清水さやか 「共に苦しむ「私」たち――中期サミュエル・ベケット作品における受苦と共苦の諸相」〈主査〉塚本昌則〈副査〉塩塚秀一郎・王寺賢太・阿部賢一・田尻芳樹

(乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

なし

１９　　南欧語南欧文学

1.　研究室活動の概要

本専修課程は 1979 年 4 月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994 年 4 月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も 1995 年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、1994 年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業（学部・大学院共通）も年度により開講されてきた。また、2001 年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2020～2021 年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように 3 名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994 年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行してきた。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

教授　：浦　一章（イタリア 13･14 世紀文学）
准教授：Lorenzo Amato（ロレンツォ・アマート）（イタリア 15 世紀文学）
助教　：長野　徹（イタリア近現代文学･イタリア児童文学）

(2)　助教の活動

長野　徹

在職期間　　1997 年 10 月～現在
研究領域　　イタリア近現代文学・イタリア児童文学
主要業績

（論文）

長野徹、「ブッツァーティの作品における動物の表象」、『早稲田大学イタリア研究所研究紀要』、第 11 号、pp.95-123、2022.3

（書評）

セルジョ・トーファノ『ぼくのがっかりした話』、英明企画、『図書新聞』、3527 号、6 頁、2022.1

（受賞）

国際、長野徹、IBBY オナーリスト（2022 年、翻訳作品部門）、IBBY: International Board on Books for Young People（国際児童図書評議会）、2021.9.15

国内、長野徹、JBBY 賞（2022 年、翻訳作品部門）、JBBY: Japanese Board on Books for Young People（日本国際児童図書評議会）、2021.9.15

（翻訳）

個人訳、エリーザ・プリチェッリ・グエッラ『紙の心』、岩波書店、2020.8
個人訳、ディーノ・ブッツァーティ『動物奇譚集』、東宣出版、2022.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、共立女子大学、「イタリア語」、2020.4～2022.3

非常勤講師、明治大学、「イタリア語 IA, IB, IIA, IIB」、2020.4～2022.3

(3) 外国人教員の活動

Lorenzo Amato（ロレンツォ・アマート）

研究領域　15 世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容

在職期間　2011 年 4 月～現在

主要業績

(著書)

共著、『Da Boccaccio a Landino. Un secolo di "Lecturae Dantis", Atti del Convegno Internazionale (Firenze, 24-26 ottobre 2018)』、Le Lettere, 2021

共著、『Dante a Porta Sole: dai manoscritti a Dante pop, catalogo della mostra bibliografica (Perugia, Biblioteca comunale Augusta, 16 dicembre 2020 - 30 novembre 2021)』、Bertoni, 2021

(論文)

Lorenzo Amato,「Le 'Pietre' di Michelangelo Serafini: edizione critica e commento」、『Medioevo e Rinascimento』、n.s. 31、pp. 185-230、2020

Lorenzo Amato,「Dante Alighieri e la neve delle antiche ere: la Commedia finnica di Eino Leino (Jumalainen näytelmä)」、『Testimonianze』、pp. 286-291、2021

Lorenzo Amato,「Testimone di verità proibite, guida coraggiosa lungo i sentieri del Male: Dante e la Commedia nell'opera di due pittori giapponesi, Fukuzawa Ichirō (1898-1992) e Kazumasa Chiba (n. 1967)」、『Testimonianze』、pp. 292-297, 2021

Lorenzo Amato,「Fra Dante Alighieri e l'Ōjōyōshū di Genshin: la società come Inferno nell'opera di Fukuzawa Ichirō, pittore umanista e misantropo」、『Insulaeuropea』、2021.2

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「ダンテ『神曲』における「外来語」の用いられ方に関する考察　pelegrin という語彙に焦点を当てて」

2021 年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

（甲）（乙）

なし

２０　　英語英米文学

1.　研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは 1887 年であり、1893 年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962 年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995 年 4 月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100 年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から 20 世紀末の英語圏作品までと幅広い。2022 年 4 月現在、専任教員は教授 4 名、准教授 2 名、外国人客員教授 1 名、助教 1 名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライテイング」を含み）10 名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年 4 月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2 年間の専門教育を踏まえ、大学生活 4 年間の総決算として、英語で 30 枚程度の卒業論文を執筆する。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレヴェルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に 1～2 回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhD の学位を取得した者はすでに 14 名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年 1 回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhD などの学位を取得することが多く、すでに PhD の学位の取得者を 38 名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

教授	後藤　和彦	GOTO, Kazuhiko	（アメリカ文学）
教授	渡邉　明	WATANABE, Akira	（英語学）
教授	新井　潤美	ARAI, Megumi	（イギリス文学）
教授	阿部　公彦	ABE, Masahiko	（イギリス文学）
准教授	諏訪部　浩一	SUWABE, Koichi	（アメリカ文学）
准教授	中尾　千鶴	NAKAO, Chizuru	（英語学、2020 年度から）
客員教授	CLARK, Stephen		（イギリス文学）
助教	丸谷　徳嗣	MARUTANI, Atushi	（アメリカ文学、2020 年度まで）
助教	井上　和樹	INOUE, Kazuki	（イギリス文学、2021 年度から）

(2)　助教の活動

丸谷　徳嗣

在職期間　2019 年 9 月－2021 年 3 月

研究領域　アメリカ文学

井上　和樹

在職期間　2021 年 4 月－現在

研究領域　イギリス文学

主要業績

（論文）

"Ghost Psychology" in T. S. Eliot and W. B. Yeats（University of York, PhD Thesis. 2020 年 12 月提出、審査後 2021 年 9 月に正式受理）

（学会発表）

「T. S. エリオットと霊媒の詩学（講演）」、東京大学英文学会、Zoom、2022 年 3 月 19 日

"The Dramatic and Haunted Voice in W. B. Yeats's *The Words upon the Window- Pane*." *Religion, Spiritualism and Occultism in Irish Literature from the Nineteenth Century to the Present*, Zoom, 7 Jan. 2022.

「『荒地』とエレジー —心霊主義における死者の詩学」、日本 T. S.エリオット協会第 33 回大会、Zoom、2021 年 11 月 7 日

ミニ・シンポ司会兼発表「"Care" をめぐる今とその向こうへ」、英詩研究会、Zoom、2021 年 9 月 12 日

"W. B. Yeats and Spiritualist Noh Theatre: Irish and Japanese Ghosts in War." *Reflecting/Reflected Modernity: Sites of Interface Between the Occidental and Oriental*, Zoom, 8 June 2021

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark：客員教授

（論文）

"Isabella Bird: Selected Works (1856-1899)." *Handbook of British Travel Writing*, ed. Barbara Schaff. De Gruyter 2020, pp. 397-410.

"Asian Romanticism: Construction of the Comparable." *British Romanticism in Asia*, ed. Alex Watson and Laurence Williams. Palgrave, 2019, pp. 387-94.

"Preface." *Asian Children's Literature and Film in a Global Age: Local, National and Transnational Trajectories*, ed Bernard Wilson and Sharmani Patricia Gabriel. Palgrave 2020, pp. vii-ix.

Robinson Crusoe in Asia, co-edited with Yukari Yoshihara. Palgrave, 2021

"Introduction." Yoshihara, pp. 1-22.

" 'Le coeur fou Robinsonne a travers les romans': Crusoe's Farther Adventures in the French Robinsonade," Yoshihara, pp. 137-58.

Asian English: Histories, Texts, Institutions, co-edited with Myles Chilton and Yukari Yoshihara. Palgrave 2021.

"Introduction: Redefining English in Asia for the Twenty-First Century." Chilton and Yoshihara, pp. 1-16.

"Asian English in Arnold, Mill and Newman," Chilton and Yoshihara, pp. 271-96.

（書評）

Review-essay, *Angela Esterhammer, Print and Performance in the 1820s*, *Essays in English Romanticism*, vol. 45, 2021, pp. 68-73.

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

The Ending of *Adventures of Huckleberry Finn*（『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末）

A Study of the Narrative of *Winesburg, Ohio*（『ワインズバーグ、オハイオ』における語りの研究）

Narrative and Context in Poe's "Ligeia"（Poe の "Ligeia"における語りとコンテキスト）

What Ishiguro expresses through Stevens in *The Remains of the Day*（『日の名残り』でイシグロがスティーブンスを通して描いたものについて）

Loquacious and Obscene Portnoy: The Self-Conscious Discourse of an Intellectual Jew（饒舌で猥褻なポートノイ：知識階級に属するユダヤ人の自意識によるディスクール）

Narrative and Vision in *The Turn of the Screw*（『ねじの回転』における語りと視覚）

「2 人のダーシーから見る理想の結婚相手像の変容」

Pride and Prejudice: The Presentation of a New Type of Heroine（*Pride and Prejudice* における新たなヒロイン像の提示について）

Caroline Compson as the Mother in *The Sound and the Fury*（『響きと怒り』におけるキャロライン・コンプソンの母としてのあり方）

Erroneous Use of Past Participles by Japanese Learners of English（日本人英語学習者による過去分詞の誤用について）

A Study of *The Sound and the Fury*: On Jason Compson, his Love and Fury（『響きと怒り』研究：ジェイソン・コンプソンの「愛と怒り」）

Unreliable Narrator and Literary Realism in *The Remains of the Day*（『日の名残り』における信頼できない語り手とリアリズム）

The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*（*Emma* における勘違いの喜劇的要素について）

Peer Pressure and Exclusion in *Brave New World* and *Nineteen Eighty-Four*（『すばらしい新世界』と『1984 年』における同調圧力と排除）

他、学科卒 12 名

2021 年度

Juliet in Control: A Young Woman's Strive and Ultimate Win（ジュリエットによる支配：若い女性の葛藤と勝利について）

A Study of the Jewishness in *Goodbye, Columbus*（『さようならコロンバス』におけるユダヤ性）

The Comparison of Comparative Correlative Constructions in English and Japanese（日本語と英語における比較相関構文の分析）

Literacy and Esther's Character in *Bleak House*（*Bleak House* におけるリテラシーの意識と Esther 像）

What Is Wrong with Nelly Dean?: The Sense of Order in Emily Brontë's *Wuthering Heights*（ネリー・ディーンの特殊性：エミリ・ブロンテ『嵐が丘』における秩序感覚）

Bernard's Narrative Failure in *The Waves*（『波』におけるバーナードの語りの失敗）

Views on love in *The Taming of the Shrew* and *Kiss Me, Kate*（『じゃじゃ馬ならし』と『キスミーケイト』における恋愛観）

A Study of *Adventures of Huckleberry Finn*: On Huck and Jim's Separation and Reunions（離合から見る『ハックルベリー・フィンの冒険』）

F. Scott Fitzgerald's View of Class in *The Great Gatsby*（『グレート・ギャツビー』における F・スコット・フィッツジェラルドの階級観）

Law and Order on the Ship: The Language of Sailors in *The Bird of Dawning*（船上の法と秩序：『ニワトリ号一番乗り』における船乗りの言葉遣い）

A Study on Classification of Japanese Indirect Passives（日本語間接受動の分類について）

The Requirements for Being a "Beautiful" Grotesque: What George and Helen Get on the Hill in *Winesburg, Ohio*（「美しい」グロテスクになるための条件――『ワインズバーグ・オハイオ』のジョージとヘレンが丘の上で得たもの）

他、学科卒 17 名

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

なし

2021 年度

筒井遥　Solidarity and Isolation on the Ship: A Study of Double Vision in *Lord Jim*（船員間の団結と孤立―『ロード・ジム』における二重視の研究）〈指導教員〉阿部公彦

岩見貴之　Incomprehensible Law and its Fear in Herman Melville's *Typee*（ハーマン・メルヴィル『タイピー』における理解不可能な法とその恐怖」）〈指導教員〉諏訪部浩一

杉本悠　Time, Space and Automobility in Evelyn Waugh's *Vile Bodies*（Evelyn Waugh の Vile Bodies における時空間と自動車移動）〈指導教員〉阿部公彦

前田有伊子　Discontinuation and Denouement: 'Turning' in Jane Austen（断絶に導かれる喜劇―オースティン作品における転回―）〈指導教員〉新井潤美

中村一創　Sentencehood（文らしさ）〈指導教員〉渡邉明

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

高桑晴子　Domestic Ideology and National Tale in Maria Edgeworth's Novels（マライア・エッジワースの小説における家庭のイデオロギーとナショナル・テイル）

〈主査〉新井潤美〈副査〉阿部公彦・Stephen Clark・高橋和久・大橋洋一

三山美緒子　Some Aspects of Disjunction Constructions and Alternative Questions in English and Japanese（日英語における選言構造と選択疑問文の諸相）

〈主査〉渡邉明〈副査〉中尾千鶴・今西典子・郷路拓也・髙橋将一

（乙）

なし

2021 年度

（甲）（乙）

なし

２１　　ドイツ語ドイツ文学

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテクストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

⑵　専攻としての活動

両年度の大学院兼担・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

［2020 年度］

「ドイツ語圏現代ユダヤ系文学作品研究（１）（２）」

「ドイツ語学概論Ｉ」

［2021 年度］

「21 世紀ユダヤ系ドイツ語文学研究」

「ムージルを読む（１）（２）」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキアムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

⑶　研究室としての活動

研究論文誌として年 2 号発行している『詩・言語』は、2020年度に 88 号が、2021年度には 89 号、90 号が発行された。

科学研究費補助金関係では、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）が 2019 年度から、「ドイツ英雄詩の受容史研究―英雄詩素材の歴史的アクチュアリティ」（基盤研究（C）、研究代表者山本潤）が 2020 年度から交付されている。

専門学会である日本独文学会には、 専任スタッフの何人かが 理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。学会長をつとめた宮田眞治は 2021 年に退任し、現在は監事の職にある。山本潤は 2019 年度より理事職にある。その他の学会活動として、宮田眞治は 2008 年度より日本シェリング協会理事を、山本潤は 2019 年度より西洋中世学会常任委員をつとめている。

⑷　国際交流の状況

従来は、国際交流として、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2020 年度、2021 年度はコロナの影響で従来の形の交流は残念ながら実現不可能であった。一刻も早く、通常の形の交流を実現できればと願っている。

また、大学院の学生の多くがドイツ、オーストリアへ留学している。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

教　授：　大宮勘一郎　　近現代ドイツ文学

教　授：　宮田　眞治　　近現代ドイツ文学

准教授：　山本　潤　　ドイツ中世文学

⑵　外国人教員の活動

准教授　　Keppler-Tasaki Stefan

在職期間　2012 年 10 月 1 日～現在

主要業績

（論文）

Stefan Keppler-Tasaki、「Goethe in Kalifornien. Thomas Mann und die Weimarer Ausgabe.」、『Goethe-Jahrbuch』、Vol.136、199-213 頁、2020.6

Stefan Keppler-Tasaki、「Transpacifica: Quellen zum deutschsprachigen Diskurs über die USA und Ostasien, 1900–1945. Einleitung」、『Transpacifica. Quellen zum deutschsprachigen Diskurs über die USA und Ostasien, 1900–1945』Ed. by Johannes Görbert、Stefan Keppler-Tasaki、Tomas Sommadossi、Iudicium Verlag、11-69 頁、2021.4

Stefan Keppler-Tasaki、「Politische Publizistik und Weltanschauungsliteratur. Einleitung」、『Transpacifica. Quellen zum deutschsprachigen Diskurs über die USA und Ostasien, 1900–1945』 Ed. by Johannes Görbert、Stefan Keppler-Tasaki、Tomas Sommadossi、Iudicium Verlag、420-430 頁、2021.4

Stefan Keppler-Tasaki、「Ein "Californisches Vermögen (enorm)": Film und Exil bei Else Lasker-Schüler.」、『Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen』、Vol.258、52-72 頁、2021.6

Stefan Keppler-Tasaki、「Fluchtpunkt Los Angeles: 25 Jahre Literatur aus der Villa Aurora / Focus: Los Angeles as Sanctuary. 25 Years of Villa Aurora Literature」、『All the Lonely People (Festschrift 25 Jahre Villa Aurora)』 Ed. by Heike Catherina Mertens、Spector Books、32-46 頁、2022.2

（学会発表）

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Wie Goethe Japaner wurde. Ästhetik und nationaler Identitätsdiskurs」、Universität Tübingen、2021.7.17

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Der „Turm zu Babelsberg" und die „Hölle Hollywood". Literarische Filmdämonologie der 1920er bis 1940er Jahre」、Universität Wuppertal、2021.10.8

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「„Das Gewissen der Welt". Thomas Mann im Spiegel seiner Tokyoter Korrespondenz 1946 bis 1955」、Deutsches Literaturarchiv Marbach、2021.10.13

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「25 Years of Literature from the Villa Aurora, a Sanctuary of Exile and a Gateway to California」、Villa Aurora Los Angeles、2021.11.6

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Wie Goethe Japaner wurde. Stationen einer Aneignung」、Rotes Rathaus Berlin、2022.1.31

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「The Temporal Community of Exiles: Representation of Sanctuaries during War and Refuge」、Freie Universität Berlin, Cluster of Excellence "Temporal Communities"、2022.2.21

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Einführung: Writing in Residence: Globale Literaturproduktion in deutschen Residenzprogrammen」、Freie Universität Berlin、2022.3.4

（会議主催（チェア他））

国内、「Doris Dörries Kirschblüten – Hanami (2008) und Kirschblüten & Dämonen (2019)」、主催、ドイツ文化会館、2020.11.21

国際、「6. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften」、主催、森鷗外記念館 ベルリン、2020.12.18

国際、「7. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften」、主催、森鷗外記念館 ベルリン、2020.12.17

国際、「Writing in Residence: Globale Literaturproduktion in deutschen Residenzprogrammen」、主催、Freie Universität Berlin、2022.3.4-5

（マスコミ）

「Stefan Keppler-Tasaki und Chunjie Zhang im Gespräch: „Ein Symbol für das Transatlantische und das Transpazifische"」、2020.2.7

「Stefan Keppler-Tasaki. Wie Goethe Japaner Wurde.」、公益社団法人 OAG・ドイツ東洋文化研究協会、2020.5.12

「#MannsLA: Episode 3. Alfred Döblin – Love Thy Enemy, 9. Juni 2020」、『#Mann's LA』、2020.6.9

「Thomas Mann House: Stefan Keppler-Tasaki, German Literature in Los Angeles」、Thomas Mann House、2020.7.5

「Felix Lill: Der etwas andere Dandy – Mythos Yukio Mishima.」、『Deutschlandfunk, Corso』、2020.11.25

「#MutuallyMann: The Irony of Thomas Mann's Germany and the Germans, 2. Dezember 2020」、『#MutuallyMann https://mutuallymann.vatmh.org/』、2020.12.2

「#GoetheMoMa: Goethe, der Buddha」、『#GoetheMoMa, https://goethemoma.de/』、2021.3.12

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「『ガラス玉遊戯』におけるキリスト教世界の役割とその象徴」

2021 年度

「ブラームスのティーク受容 ―作品 33《ティークのマゲローネによるロマンス》を例に―」

⑵　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

髙畠一棋　「フランツ・カフカ『息子たち』の生成過程」〈指導教員〉大宮勘一郎

宮本寿樹　「トーマス・マンの「市民」批評―市民的教養の同定と補完および「普遍的な関与」の導出」〈指導教員〉宮田眞治

2021 年度

神林由佳　「ヘルマン・ブロッホ『ヴェルギリウスの死』における帰郷」〈指導教員〉大宮勘一郎

中村祐子　「クリスタ・ヴォルフと「病」―『引き裂かれた空』における女性たちの選択」〈指導教員〉大宮勘一郎

渡邊能寛　「遊び小説としての『フェーリクス・クルル』」〈指導教員〉大宮勘一郎

⑶　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）（乙）

なし

2021 年度

（甲）

髙田梓　「クラハトとアジア―ドイツ語圏作家クリスティアン・クラハトの詩学―」

〈主査〉大宮勘一郎〈副査〉宮田眞治・山本潤・前田良三・福岡麻子

（乙）

なし

２２　　スラヴ語スラヴ文学

1.　研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年（昭和47年），東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが，それまで東京外国語大学，早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが，すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に，また1995年度の大学院の部局化にともない，大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし，日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

教員数は教授1名，准教授1名、助教1名である（2022年度は教授1名、助教1名で運営）。ほかに他専門分野教員，総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て，スラヴ語学，スラヴ語史，ロシア文学（詩，小説，演劇，批評），またスラヴ語圏の言語文化に関する研究・教育が行われている。今後，スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し，国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在，学部学生1名，大学院修士課程院生5名，博士課程院生7名が在籍している。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており，2021年度分として第36号を刊行した。これは教員，大学院生および学部学生の日頃の研究勉学成果を発表する場であるが，社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会，研究会活動に参加させており，日本のスラヴ学，ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在，東京大学はポーランドのワルシャワ大学，セルビアのベオグラード大学，クロアチアのザグレブ大学，国立ロシア人文大学、ロシア国立サンクト・ペテルブルグ大学と交流協定を結んでいるが，本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

三谷惠子　　スラヴ語学（在職期間　2013年4月～2022年1月）

楯岡求美　　ロシア演劇・芸術（在職期間　2016年4月～現在）

(2)　助教の活動

越野剛

在職期間　2019年4月1日～2021年3月31日

研究領域　ロシア・ソ連文学

主要業績

（著書）共著、亀山郁夫・望月哲男・番場俊・甲斐清高編『ドストエフスキー：表象とカタストロフィ』、名古屋外国語大学出版会、2021年、52-67頁　（越野剛「現代アジアの映画・テレビドラマにおける『罪と罰』の翻案」）

共著、Ananka, Yaraslava, Heinrich Kirschbaum, Magdalena Marszalek, eds., Heu auf dem Asphalt: Topoi belarussischer Selbstverortungen (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2021), pp.145-158. (Go Koshino, “The Image of Belarusian Village War in Ales’ Adamovič’s Work and its Film Adaptations”)

（論文）田村容子・越野剛「中国映画における『白鳥の湖』の受容と変奏」、『饕餮』28号、2020年、114-143頁

越野剛「コレラ・放射能・流言―ロシア文学と感染する言葉」、『現代思想』5月号、2020年、178-183頁

越野剛「ドストエフスキーにおける病気と火事―『白痴』のナスターシャの身振りを再考する」、『現代思想』Vol.49-14、2021年12月臨時増刊号、267-274頁

越野剛「ロシア帝国のポーランド人と1830-31年のコレラ」、『スラヴ学論集』24号、2021年、127-141頁

古宮路子

在職期間　2021年4月1日～現在

研究領域　ロシア・ソ連文学

主要業績

（著書）共著、*Комия М.* Измененные финалы: трансформация пьесы Ю.К. Олеши «Заговор чувств» под влиянием постреволюционной цензуры // Редакционно-издательского совета филологического факультета МГУ имени М.В. Ломоносова (ред.) Русская литература: XX век и современность. М.: Макс пресс, 2020. С. 269-280.

共著、*Комия М.* Ретроспекция и авангард в 1920-е годы: о внесюжетной прозе в литературе факта // *Гречко В., Нам Х., Нонака С., Ким С.* (ред.) Русская культура на перекрестках истории. Белград, Сеул, Сайтама: Логос, 2021. С. 189-199.

単著、古宮路子『オレーシャ『羨望』草稿研究――人物造形の軌跡』、成文社、2021 年、全 240 頁

（論文）古宮路子、「映画から新聞へ――セルゲイ・トレチヤコフとファクトの文学」、『SLAVISTIKA』第 35 号、2020、509-524 頁

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「カレリア共和国と『カレワラ』」

2021 年度

「『カラマーゾフの兄弟』イワンの無神論について」

「イヴォ・アンドリッチ『ドリナの橋』における「永続性」と「忘却」」

「ゴーゴリ作品におけるペテルブルク表象―「ネフスキイ大通り」を中心に―」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

齋藤友貴 「レフ・トルストイ『戦争と平和』論――戦争体験の語りとその受容」〈指導教員〉楯岡求美

2021 年度

永田怜絵 「ドストエフスキー作品へのアフェクト理論（情動論）の応用―『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に―」〈指導教員〉楯岡求美

下村莉央 「ヴァルラーム・シャラーモフの短編作品群『コルィマ物語』における自然観」〈指導教員〉楯岡求美

濱田玲央 「ガルシン戦争作品群における人々の苦しみの分析」〈指導教員〉楯岡求美

福島賢士 「ユーリ・ノルシュテインとエドゥアルド・ナザーロフのアニメーション作品における自然描写の比較」〈指導教員〉楯岡求美

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

（甲）（乙）

なし

２３　　現代文芸論

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006 年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として 2007 年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員 2 名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に 2007 年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア・中東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009 年創刊、ほぼ年刊のペースで発行。2021 年 3 月には第 11 号、2022 年 3 月には第 12 号を発行した）。

非常勤講師による授業も、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。またチベット語、オランダ語、アイマラ語、フィンランド語、イディッシュ語、リトアニア語、バスク語など、他では学ぶことが難しいマイナー言語の授業も積極的に開講していることが、現文の特徴になっている。

⑵　大学院の専攻・コースとしての活動

2007 年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に 6 名程度、博士課程に 3～4 名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はこれまでの実績を見ると、ロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、大学院生相互の国際的な交流はきわめて盛んである。

⑶　研究室としての活動・国際交流活動

現代文芸論研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。新型コロナウィルスの影響でイベントの開催は大きく減らさざるを得なかったが、毎年行っている現代文芸論研究発表会はオンラインにて開催することができた。

2020 年度：

特別講演「「北海道文学」を脱構築する「アイヌ文学」――モダニズムと惑星思考」（日時：2020 年 6 月 23 日、オンライン（Zoom）、講師：岡和田晃（批評家）、司会：阿部賢一、主催：東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室）、第 5 回現代文芸論研究報告会（日時：2020 年 10 月 31 日、オンライン（Zoom）、報告者：土屋優、須藤輝彦、コメンテータ：宮下志朗（東京大学名誉教授）、司会：阿部賢一、特別報告：棚瀬あずさ（日本学術振興会特別研究員 PD／慶應義塾大学訪問研究員）、邵丹（名古屋外国語大学）、今井亮一、特別企画「秋草俊一郎著『「世界文学」はつくられる　1827-2020』（東京大学出版会、2020）を読む、語る。」、特別ゲスト：秋草俊一郎（日本大学）、コメンテータ：安原瑛治、邢亚南、司会：柳原孝敦、主催：東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室

2021 年度：

川添愛氏特別講義「今の AI、未来の AI――言葉と心の問題を中心に――」（日時：2021 年 5 月 26 日、オンライン（Zoom）、司会：阿部賢一、主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室）、第 6 回現代文芸論研究発表会（日時：2021 年 10 月 23 日、報告者：安原瑛治、ハビャン・ニーナ、オウケンホウ・ジェームス、コメンテータ：野谷文昭（東京大学名誉教授）、西成彦（立命館大学名誉教授）、加藤陽子（東京大学）、特別報告：五月女颯（学振 PD・京都大学）、マヌエル・アスアヘアラモ（早稲田大学）、特別企画「一世たちと三世たち 記憶と物語」：宮下遼（大阪大学）「記憶の沈黙:オルハン・パムク『静かな家』におけるセラハッティンの『百科事典』をめぐって」、

藤井光「ポール・ユーンにおける過去の継承と物語の空白」、主催：東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教授

教授　：柳原孝敦（ラテンアメリカ文学・芸術、広域スペイン語圏文学）
准教授：阿部賢一（中東欧文学、比較文学）
准教授：藤井光（現代英語圏文学、翻訳論）

(2) 助教の活動

今井亮一

在職期間　2020 年 4 月～現在
研究領域　比較文学、近現代日本文学、英語圏文学
主要業績

（著書）

単著、今井亮一、『路地と世界――世界文学論から読む中上健次』、松籟社、2021.3

（書評）

秋草俊一郎・戸塚学・奥彩子・福田美雪・山辺弦編、奥彩子・鵜戸聡・中村隆之・福嶋伸洋編、『世界文学アンソロジー　いまからはじめる』、『世界の文学　文学の世界』、三省堂、松籟社、『れにくさ』、11 号、213-217 頁、2021.3

Ryan Johnson、*Transnationalism and Translation in Modern Chinese, English, French and Japanese Literatures*、Anthem Press、『れにくさ』、12 号、287-293 頁、2022.3

（学会発表）

国内、今井亮一、「路地と世界――世界文学論から読む中上健次作品研究」、第 5 回　現代文芸論研究報告会、第 2 部　学位取得者による特別報告、2020.10.31

（マスコミ）

「教科別　東大教員からのエール　国語」、『東京大学新聞』、2020.9.8

（受賞）

国内、今井亮一、東京大学而立賞、東京大学、2021.3.31

（非常勤講師）

東京薬科大学、「薬学英語入門I・II」、2020.4～2022.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

なし

人文社会系研究科研究員

なし

日本学術振興会特別研究員

高木佳奈（PD）、研究課題「ラテンアメリカ文学・美術における酒井和也の役割と日本文化紹介に関する研究」
2018 年 4 月～2021 年 3 月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「現代文学作品の映画化における喪失と創造 ―村上春樹『ノルウェイの森』の翻案を通して―」
「ピランデッロ『作者を探す六人の登場人物』の翻訳論」
「テクストの存在論的、読者論的考察――円城塔『Self-Reference ENGINE』を題材に」
「アダプテーションから論考するストルガツキー兄弟『ストーカー』」
「テロという「悲劇」を描く―ジョナサン・サフラン・フォア『ものすごくうるさくてありえないほど近い』」
「娘たちの群像―イサク・ディーネセン『冬物語』をめぐって」
「「死に至る病」を癒やす近代小説」
「Tim O'Brien "Going After Cacciato"―想像力のゆくえ」

2021 年度

「ロベルト・ボラーニョ『チリ夜想曲』の語りの設定」

「三島由紀夫『金閣寺』における「火」と「水」の精神分析」

「句作の瞬間と身体性―波多野爽波と飯島晴子の制作学」

「Breakfast at Tiffany's における Holly Golightly の姿」

「児童文学の発展と翻訳―『クマのプーさん』を中心に―」

「演劇的観点から分析する『若草物語』―小説および映画を比較して―」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

笠原未来歩 「カルロス・フエンテスと〈文学資本〉」〈指導教員〉柳原孝敦

豊島美波 「ナ・ザーブラドリー劇場におけるヴァーツラフ・ハヴェルの劇作とチェコスロヴァキアにおける不条理演劇」〈指導教員〉阿部賢一

古屋敷雄基 「「脆弱（ヴァルネラブル）」な者たちの救済をめぐって――大江健三郎『「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち』を読む」〈指導教員〉阿部賢一

岩佐頌子 「Slaughterhouse-Five as an Unexpected War Story（奇妙な戦争小説としての『スローターハウス 5』）」〈指導教員〉阿部賢一

AU Kin Pong James 「司馬遼太郎の歴史小説と坂本龍馬（竜馬）像」〈指導教員〉柳原孝敦

魏思思 「『異邦人』と『人間失格』におけるよそもの」〈指導教員〉阿部賢一

李澈 「演劇論としての『近代能楽集』」〈指導教員〉阿部賢一

2021 年度

原田礼久 「アンドレイ・ベールイ『ペテルブルグ』の表層性について」〈指導教員〉阿部賢一

加藤安沙子 「創造する女性たち――シャーリイ・ジャクソンにみる分身の表象」〈指導教員〉阿部賢一

杉林大毅 「『レモネード・ジョー』におけるパロディとアダプテーションの問題」〈指導教員〉阿部賢一

村元拓哉 「『密林の語り部』・語り部の語りから見た諸問題」〈指導教員〉柳原孝敦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

マヌエル・アスアヘアラモ Manuel Azuaje-Alamo 「彼方の海岸―20 世紀と 21 世紀のラテンアメリカ文学者らによる、日本古典文学の翻訳とその時代背景」

〈主査〉柳原孝敦〈副査〉阿部賢一・齊藤文子・沼野充義・野谷文昭

五月女颯 「ジョージア近代文学研究におけるポストコロニアリズムの諸問題―ポストコロニアル・環境／動物批評の試み」

〈主査〉阿部賢一〈副査〉柳原孝敦・乗松亨平・沼野充義・中村唯史

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

坪野圭介 「遊園地と都市文学――アメリカン・メトロポリスのモダニティ（1893-1925）」

〈主査〉柳原孝敦〈副査〉阿部賢一・藤井光・柴田元幸・舌津智之

須藤輝彦 「ミラン・クンデラにおける運命」

〈主査〉阿部賢一〈副査〉柳原孝敦・藤井光・塚本昌則・王寺賢太

（乙）

なし

２４　　西洋史学

1.　研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に発足した史学科を母体とし、1919年に西洋史学科として独立、大学・大学院・学部の制度の改変を経て、現在の西洋史学専修課程・専門分野に至っている（両方をあわせて研究室と呼ぶ）。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までをも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2020-21年度には教授3名、准教授2名、講師1名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教員2名から、また学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2020年度、2021年度ともに5名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ20名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2020年度42名、2021年度44名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2020年度38名、2021年度36名である。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、宗教史、さらに異文化交流やジェンダーの問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う（海外の大学で学位を取得する場合も多い）。

学会活動への参与においても精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集に研究室として協力している。さらに各教員は、自ら国内外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、さまざまな研究者と連携して、国際会議や講演会を定期的に開催し、その成果を公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

高山　博	教授	西洋中世史
橋場　弦	教授	古代ギリシア史
勝田俊輔	教授	近代アイルランド史・近代ブリテン世界史
長井伸仁	准教授	フランス近現代史
池田嘉郎	准教授	近現代ロシア史

(2)　講師の活動

芦部　彰

在職期間　2019年4月1日～現在

研究領域　ドイツ近現代史

主要業績

（論文）

芦部彰、「一九五〇年代東西ドイツの都市計画と住宅建設―東ベルリン・フェンプール住宅団地計画に注目して」、『ゲシヒテ』、14号、40-51頁、2021.4

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（C）、芦部彰、研究代表者、「アデナウアー期西ドイツの西側結合とナショナリズム：ザールラント帰属問題に注目して」、2020.4～2024.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、お茶の水女子大学文教育学部、「西洋社会経済史」、2020.10～2021.3、「西洋文化史」、2021.4～2021.9

(3)　助教の活動

内田　康太

在職期間　2020 年 4 月 1 日～現在

研究領域　古代ローマ史

主要業績

（共同研究）

国内、参画、慶應義塾大学言語文化研究所、「ラテン文学研究会」、2020～

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、若手研究、内田康太、研究代表者、「共和政ローマの終焉と帝政ローマの成立過程の研究」、2021.4～2026.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、中央大学文学部、「ラテン語初級」、2020.4～、「ラテン語上級」、2020.4～

(4)　外国人研究員・内地研究員

森本　光　（特任研究員、2019 年度～2021 年度）

内川　勇太（特任研究員、2021 年度）

3.　卒業論文等題目

(1)　卒業論文題目一覧

2020 年度

「革命初期のドイツ独立社会民主党穏健派の動向と連立政権の失敗―妥協と包摂、非妥協と排除の観点を中心に―」

「ヴァイマール期ドイツにおける優生学に関する考察」

「アイルランドにおける 1883 年から 1911 年までの農業労働者立法について」

「神聖ローマ帝国等族としてのデンマーク」

「18 世紀中葉から 18 世紀末におけるイギリス産業発展と民衆教育の関係性」

「19 世紀中葉スコットランドにおけるナショナリズムの性質：スコットランド権利擁護民族協会を中心に」

「17 世紀後半から 18 世紀にかけてロンドンのコーヒーハウスの果たした社交場としての意義」

「ドイツ第二帝政期におけるポーランド人問題」

「2 世紀から 3 世紀ローマ帝国における騎士身分に関する一考察 軍政民政分離に注目して」

「11-12 世紀カタルーニャにおける入植地初期社会の建設 ―バルセロナ伯と教会領主の動向―」

「フランス革命期の市民服・官服の受容に見る革命家ら指導者層と民衆層の意識の差異」

「シャルル 7 世とパリの住人の関係から見る、百年戦争後期フランスにおける「臣民意識」」

「工業化後のイングランドにおける労働者の「余暇時間」と水辺リゾート都市の発展」

2021 年度

「負債と経済変動」

「19 世紀イギリスにおける東インド会社の役割と解散の影響」

「ヨーロッパ中世初期の「国家」の定義の再考―クローヴィス王権下のメロヴィング朝フランク王国を例に―」

「17 世紀中葉ロンドンにおけるペストの流行と社会システムについての考察」

「ファシズム期イタリアにおけるカトリック勢力の体制参加の一形態―1930 年代イタリアカトリック大学生連盟（FUCI）を中心に―」

「1848 年革命とウィーンのユダヤ人」

「17 世紀イングランドの海上戦力が敵対勢力の駆逐に果たした役割について」

「いわゆる「中間層テーゼ」の再検討を通した，ヴァイマル共和国末期におけるナチスの支持基盤の考察」

「神聖ローマ皇帝カール 6 世治世初期における皇帝権と帝国諸邦」

「ハインリヒ獅子公の領域政策と家門意識」

「ヴィクトリア時代におけるツーリズムの進展：トマス・クックの事業を追って」

「13～14 世紀バレンシア王国におけるムスリム役人：王権とアルハマの間に立つカーディとアミーン」

「18 世紀イングランドの地方都市における劇場の社会的な性質」
「革命期フランスの食糧政策における自由主義の実際　―地方都市ルーアンで発生した 3 つの騒擾を通して―」
「カロリング家とローマ教皇座との結びつきについて―カール・マルテルからカール大帝期におけるフランク・ローマ関係―」
「古典期アテナイにおけるギュムナシオンの持つ役割」
「ポーランドとハンガリーにおける東欧革命の進展の比較」
「18 世紀の"Gin Craze"を中心としたロンドンの都市労働者と酒類の関わり」
「19 世紀インドにおけるイギリスの膨張政策とその経済的意義」
「第二次世界大戦期におけるイギリスの対日外交および対日戦略」
「南チロル人民党（SVP）の「包括性」の姿」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

十川雅浩 「後期共和政ローマの高位公職者選挙について：民衆の政治参加をめぐって」〈指導教員〉橋場弦
後藤彰　「外務卿ユーグ・ド・リオンヌの「派閥」からみるルイ 14 世親政初期外交行政（1663-1671）」〈指導教員〉長井伸仁
蔡男 「ユリウス・クラウディウス朝期におけるダルマティア属州統治の再検討―都市および軍団の視点から―」〈指導教員〉橋場弦
梅田建人 「1911 年国民保険法第一部国民健康保険の政策理念：「社会改革」の戦略的実現」〈指導教員〉勝田俊輔
奥田弦希 「二重主義体制下ハプスブルク帝国のムスリム及び対ムスリム政策」〈指導教員〉長井伸仁
増田亮　「エカチェリーナ 2 世の統治初期における商業政策の理念と実践：カメラリズムの視点を中心に」〈指導教員〉池田嘉郎

2021 年度

岡本勇貴 「ドイツ国家国民党と農業利益―対スペイン・フランス通商条約交渉を例に」〈指導教員〉池田嘉郎
市原理仙 「ノルマン征服期イングランドの修道院における「変化」～ランフランクの事業を中心に～」〈指導教員〉高山博
喜友名朝輝 「三十年戦争における教皇庁の領土問題と対スペイン政策―ウルビーノ公国直轄化の初期を中心に（1623-1625）―」〈指導教員〉高山博
須田りょう太 「西ドイツにおける「戦後民主主義」と被追放民　1953 年連邦被追放民法における被追放民の統合構想」〈指導教員〉池田嘉郎
塚部光貴 「ヴィルヘルム期初期のドイツ外交政策：フリードリヒ・フォン・ホルシュタインにみる「新航路」」〈指導教員〉池田嘉郎
長澤咲耶 「カロリング期における説教テクストと聖書注釈の機能について」〈指導教員〉高山博

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度・2021 年度

（甲）（乙）

なし

２５　　社会学

1.　研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は、社会学が「世態学」という名で初めて講じられた 1878（明治 11）年に遡る。そして、1886（明治 19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治 26）年帝国大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正 8）年には社会学科となり、翌 1920（大正 9）年には 2 講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和 36）年には 3 講座となり、1960 年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960 年代末に起こった大学闘争の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和 49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和 58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984 年には 4 講座となった。1987（昭和 62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成 2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成 5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で 1 つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成 7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では人文学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。2021 年度の教員数は、教授 4 名、准教授 3 名、助教 1 名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、都市、地域、移民、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、文化、福祉、医療、障害などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約 50 名。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的な基礎訓練とともに領域横断的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に 3 分の 1 程度の学生が就職していたが、最近は金融やメーカー、コンサルティング業界に就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約 1 割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて 10 名前後である。かつて修士課程入学者はそのほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員、研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者も定着してきた。院生総数は 50 名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては、日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行にも大きく貢献している。また、ソウル大学社会学部、国立台湾大学のそれぞれと 2 年に 1 度、国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行している。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。大学院生も、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロゴス』を毎年編集・発行している。

本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは中国・韓国からの留学生であり、研究生として 1～2 年過ごしてから大学院に進学し、社会学の博士号を取得して本国に戻り、活躍している卒業生もいる。そのほかアジア諸国や欧米からの留学生が在籍している年もある。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤健二

専門分野　歴史社会学

在職期間　1994 年 10 月～2022 年 3 月

白波瀬佐和子

専門分野　人口の社会学

在職期間　2006 年 4 月～現在

赤川学

専門分野　社会問題の社会学

在職期間　2006 年 4 月～現在

出口剛司

専門分野　理論社会学・社会学史研究

在職期間　2011 年 4 月～現在

祐成保志

専門分野　コミュニティの社会学

在職期間　2012 年 4 月～現在

井口高志

専門分野　医療社会学　ケアの社会学　認知症研究

在職期間　2018 年 10 月～現在

髙谷幸

専門分野　移民研究　国際社会学

在職期間　2021 年 4 月～現在

(2) 助教の活動

井口尚樹

在職期間　2019 年 4 月～2021 年 3 月

研究領域　労働社会学、評価の社会学

主要業績

（著書）

共著、金澤真理・安田恵美・髙橋康史・井口尚樹・川瀬瑠美・徳永元・舩山健二、『再犯防止から社会参加へ』、日本評論社、2021.1

共著、武川正吾・森川美絵・井口高志・菊地英明編、『よくわかる福祉社会学』、ミネルヴァ書房、井口尚樹、井口尚樹「労働市場――働く世界はどう変わったか？」（88-89 頁）、井口尚樹「雇用――働きやすい社会を作るためにはどうすればいいか？」（180-181 頁）、2020.10

（学会発表）

国内、井口尚樹、「対社会自己有用感の規定要因は何か――川崎市地域包括ケアシステムに関する市民意識・実態調査より」、第 92 回日本社会学会大会、2019.10.5

（翻訳）

共訳、ケン・プラマー、"Sociology: the basic"、赤川学監訳、『21 世紀を生きる社会学の教科書』、筑摩書房、井口尚樹「第 7 章　トラブル――不平等の苦しみ」、2021.1

税所真也

在職期間　2021 年 4 月～現在

研究領域　家族社会学　福祉社会学　社会政策

主要業績

（著書）

単著、税所真也、『成年後見の社会学』、勁草書房、2020.2

共著、武川正吾・森川美絵・井口高志・菊地英明編、『よくわかる福祉社会学』、ミネルヴァ書房、税所真也「看取り――どのように人生を終えるか？」、38-39 頁、2020.10

共著、張李風・胡澎・吳小英編、『少子老齢化社会与家庭――中日政策与実践比較』社会科学文献出版社（北京）、税所真也「成年人监护制度和家庭内部再分配――中日比较研究」、304-317 頁、2021.1

共著、井上千津子ほか監修、『介護福祉用語集』ミネルヴァ書房、税所真也「限界集落」（84 頁）、「孤独死」（104 頁）、「社会的孤立」（131 頁）、「コミュニティ」（106 頁）、「セン，アマルティア」（180 頁）、2021.6

共著、上村泰裕・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア――福祉国家・社会政策・ケアをめぐる想像力』ミネルヴァ書房、税所真也「地域福祉からみた成年後見――市民社会が支える看とり」、251-266 頁、2021.11

（論文）

共著、税所真也・角能・川口航史・鈴木貴久、「預貯金・生命保険への高齢期の投資行動に関する考察――投資に関する知識とリスク性向に注目して」、『生命保険論集――人生 100 年時代におけるライフマネジメント研究会 研究論文』公益財団法人・生命保険文化センター、216 号（別冊）、143-154 頁、2021.9

共著、张继元・晏子・税所真也、「深度老龄化社会的成年监护服务――日本的经验与启示」、『学术研究杂志基本信息』学術研究雑誌社（広東省）、443、106-112 頁、2021.10

（書評）

「この一冊『中国農村部における地域福祉の可能性』張継元著」、『週刊社会保障』法研、75(3128)、35 頁、2021.7.12

（学会発表）

国際、SAISHO, Shinya,“Re-Socialization and Normalization: The Role of Adult Guardianship System on Elderly with Dementia in Japan”, *The IV ISA Forum of Sociology*, Online, 2021.2.24

（シンポジウム）

国際、税所真也、「日本意定监护制度及其发展现状」、中日成人意定监护制度的学术讨论和实践、中国社会組織 NGO 尽美・講演、上海（対面）、2020.1.17

国内、税所真也、「成年後見の社会化に関する研究――福祉社会学・家族社会学の立場から」、SPSN 社会政策研究ネットワーク第 116 回研究会・報告（オンライン）、2021.12.4

国内、税所真也、「現場の事例から考える成年後見――障がい者の生活支援を含む成年後見」、社会福祉法人上州水土舎事例検討公開学習会・講演（オンライン）、2022.3.4

（解説・啓蒙）

税所真也、「コミオプ福祉で安心な暮らし」、『福祉クラブ生協機関紙うェるびィー』357、1 面、2021.12

税所真也、「『成年後見の社会学』／”The Sociology of Adult Guardianship”」、UTokyo BiblioPlaza（https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/G_00073.html）

（受賞）

国内、三井住友海上福祉財団令和 2 年度奨励賞、三井住友海上福祉財団、2020.11

国内、福祉社会学会第 6 回奨励著書賞、福祉社会学会、2021.8

国内、日本家族社会学会第 2 回奨励著書賞、日本家族社会学会、2021.9

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「成年後見制度の総合的研究」、2017～2020

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「中国・上海における成年後見制度の運用展開に関する社会学的研究」、2018～2021

文部科学省科学研究費補助金、分担研究者、「超少子高齢社会の新しい郊外戸建て住宅地像と地域マネジメント手法」、2019～2021

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「高齢社会における日本と中国の家族のあり方」、2020～

公益財団法人 SOMPO 福祉財団ジェロントロジー研究助成、研究代表者、「認知症高齢者の地域生活をめぐる社会学的研究――成年後見人による生活支援を分析軸として」、2020～

蓮花寺佛教研究所仏教と社会に関する研究助成、研究代表者、「超高齢社会における伝統仏教寺院の役割」、2020～

公益財団法人上廣倫理財団研究助成、研究代表者、「成年後見人による終活支援に関する社会学的研究」、2020～

（他機関での講義等）

非常勤講師、武蔵大学社会学部、「ネットワークの社会学」、2020.10～2021.9

非常勤講師、亜細亜大学都市創造学部、「少子高齢化社会論」、2021.4～
非常勤講師、大妻女子大学人間関係学部、「女性とライフコース特論Ⅱ」、2021.4～
非常勤講師、東京学芸大学教育学部、「社会理論と社会システム」、2021.10～
非常勤講師、東京学芸大学教育学部、「社会福祉調査」、2021.10～

（学会）

国内、社会政策学会学会幹事、2020.5～2022.5
国内、日本家政学会家族関係部会幹事、2020.6～2020.10
国内、比較家族史学会理事（企画委員）、2020.11～
国内、東京大学高齢社会総合研究機構・ジェロントロジーアカデミー「金融と法」委員、2021.4～
国内、比較家族史学会 2021 年度春季研究大会運営委員（第 68 回春季研究大会開催校：京都大学・東京大学、オンライン）、2021.6
国内、社会政策学会誌編集委員会、機関誌『社会政策』査読委員、2022.2

（学外組織）

国外、華東師範大学経済・管理学部公共管理学院客員研究員、2019.4～2021.3
国内、生命保険文化センター人生 100 年時代におけるライフマネジメント研究会委員、2019.5～2021.9

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「韓国保守政治におけるプロテスタントのかかわりについて」
「SNS におけるファンコミュニティとの距離」
「裁量労働からみた長時間労働問題―出版業で働く労働者への質的調査分析―」
「国会会議録から見る戦後日本の幸福」
「現代における隠喩の創造的機能の価値について～抜け落ちたパズルのピースを埋めるということ～」
「組織論・経営学と行動経済学から見る個人と組織の関わり」
「ネット炎上の発生要因の考察」
「越谷レイクタウンの開発と成長がもたらす影響」
「自己肯定感はなぜ語られるのか？ ～ベックの個人化論を元に～」
「構築される「貧困問題」」
「Twitter におけるフェミニズム ――日本語ユーザーによるフェミニストへの言及の計量的分析」
「市川市における外環反対運動から見る郊外の「存在問題」」
「相互行為のなかの月経：「生理」の開示と秘匿をめぐる実践の聞き取りから」
「日本におけるラップ実践の意味づけの現在形」
「日本における難民問題の社会的背景と実態」
「「アウティングという社会問題」の社会学 ―〈社会問題の自然史モデル〉による分析―」
「情報化社会における公共性」
「変容する日本企業の経営 ソニーを事例として」
「性に纏わる社会問題とその影響」
「シニア女性の衣服購入の現状と課題―ファストファッションに着目して―」
「ダイエットについての描写と語りの研究」
「「おひとりさま」現象における他者関係の様相分析―余暇・娯楽の観点から」
「アジアにおけるインフォーマル・セクターと経済発展の関係」
「東大生の就職活動から見る大学キャリア教育のあり方」
「日本の若者と日本の雇用・福祉システムの現状―日本型雇用慣行を若者が望み続ける構造的要因を探る―」
「何がエイジズムを増幅するのか ―池袋母子死亡事故に関する言説の分析―」
「高齢者の地域居住 ～住み続けることの意味と政策の変遷に着目して～」
「脱・東京一極集中と「地方」の課題 ―若年層の価値観の変化に注目して」
「視覚障害児とインクルーシブ教育：交流及び共同学習における経験に注目して」
「「理想の商店街」論を考える ―徳島市東新町商店街の事例から―」
「セクシュアル・ハラスメントをめぐる言説空間を描き出す」

「ネットニュースに見る日本における Black Lives Matter 運動の受け取り」
「新自由主義の形成と展開――統治をめぐって――」
「「未災者」における当事者意識の形成―災害報道の現状と展望」
「人間がコンパニオンアニマルに求めるものは何か」
「日本人の不公平感の規定要因に関する実証研究」
「東京都の地域類型―23 区 26 市別―」
「日本のお笑いはなぜ社会風刺が少ないのか」
「高学歴主婦に関する実証研究――東大卒女性のキャリア意識の分析――」
「構造構築主義の可能性　―大学入試女性差別の問題の位相を巡って―」
「男性政治家と女性政治家の政策にはどのような差異があるのか　――東京都北区区議会議員と参議院議員の政策を事例にして――」
「地球温暖化問題と産業界の反応―歴史的展開に注目して―」
「日本型福祉における家族の役割の検討」
「テレビドラマにおけるセクシュアルマイノリティの描かれ方」
「現代の監視社会」
「サッカー移民から見る J リーグの特性に関する社会学的研究」
「大学進学者は子ども期にどのような貧困体験をするのか　――「複数的個人」の視座から子どもの貧困を捉えなおす――」
「地方都市のエリアマネジメントを活用した中心市街地活性化 ―岩手県大船渡市キャッセン大船渡エリアの事例から―」
「大衆文化における理想的女性像の日韓比較―「女子力」と「概念女（ゲニョムニョ）」を中心に―」
「公共空間における権力の変容―生活安全条例の系譜から―」
「現代における若者のコミュニケーション　―インスタグラム（Instagram）を事例として」
「BL におけるクィアな表象の限界と可能性――「セクシュアルマイノリティ」描写の類型分析から――」
「障害をめぐる「配慮」のあり方――合理的配慮と障害者の生活実態に着目して――」
「アニメ聖地巡礼におけるオーセンティシティ」
「スポーツと文明化　～プロ野球私設応援団を事例として～ 」
「発達障害児の母親における子の障害/障害児自身への認識の変容―何が母親に安定をもたらすのか―」
「場所に対する「まなざし」の差異　―「ディープさ」への志向に着目して―」
「性同一性障害をめぐる「身体」のレトリック　身体はどう生きられるのか」
「民間企業への就職活動を行う学生の「やりたいこと」――社会貢献志向に着目して――」

2021 年度

「モラル・パニック論から見るソーシャルメディア上の同質的な moral entrepreneur ネットワークについて」
「SDGs の枠組みから見た初等教育―JICA と個人スケールでの取り組み比較を通じて―」
「性的マイノリティへの支援行動～行動へ至れない要因～」
「隅田川水辺空間等再整備構想における政策背景とその論理について」
「現代社会における自己のあり方―パーソナルカラー診断と自己分析サービスを事例として―」
「「非実在青少年」問題から見る表現規制の論理―社会問題の自然史モデルを用いた言説分析を通して―」
「文化活動の多様化とイメージの画一性―大学生の実態に着目して―」
「下北沢再開発問題に見る日本型都市計画の課題」
「情報過多社会における流言の発生と展開」
「食品ロスに対する政策形成―自然史モデルを用いた考察」
「ミスコン批判の過去と現在　―社会問題の自然史モデルによる分析を通して―」
「「サードプレイス」の枠組に基づく、小中高生によるショッピングモール空間の利用に関する分析」
「記念・顕彰行為を通じた集合的記憶の形成　―鹿児島県における「明治百年」を事例に―」
「水増し問題と日本の障害者雇用　～新聞報道の分析から～」
「鳩山ニュータウンにおける地域公共施設への諸主体の関与とその背景――現代建築家を結節点とする関係性の分析――」
「贈与論的観点からみる「妹キャラ」の魅力――「オタク」とインセスト禁忌――」
「お笑い芸人の「容姿いじり」に見られる変化と不変性」

「〈娯楽化〉するテレビ報道―ニュース研究におけるマルチモダリティ分析―」
「保育者におけるキャリア選択の背景要因と職業観」
「「ヤングケアラー」は何が問題なのか？―構築主義的視点から―」
「「都市再生」の社会学――2000 年代東京の空間戦略の分析」
「コミュニティ内で発生する心理的要因から風評被害を減らすアプローチ」
「被災地の次世代育成プログラムと若者のキャリア形成」
「ファッションの流行とメディア――雑誌と SNS についての分析から」
「日本の住宅福祉政策の現状と課題」
「現代日本社会の「起業」におけるジェンダー格差の実態―女性の起業と私的領域における結婚/子育てを中心として」
「ベーシック・インカムとベーシック・サービスの必要性の検討～インタビュー調査を通して～」
「学力形成における努力主義的価値観に関する実証研究―学習基本調査データ分析を通した検討―」
「なぜ若者は Instagram で「サブアカ」を作るようになったのか　―ユーザーのリアリティに迫る―」
「若年女性に於ける「コギャル」的志向の意義」
「若者の移動に着目した地域愛着に関する研究」
「ポスト・コロナにおける新しい観光のカタチ―観光のまなざし論とハワイの事例を手がかりにして―」
「現代の観光におけるポピュラーカルチャーの対象化と体験の個人化」
「コロナ禍は養護教諭の転換点となり得るか～養護教諭専門誌の質的分析を中心として～」
「精神疾患のある親を持つこどもたちを巡る「曖昧さ」」
「つながりの希薄化とサードプレイスの機能」
「新型コロナウイルスを経験して考える東京大学五月祭」
「戦後日本社会における子どもと貧困」
「クラシック音楽の愛好者の研究――クラシック音楽に対する認識調査と演奏活動に関する語りの分析」
「男性同性愛者のつながりについて―異性愛規範からの逸脱に関する語りを通して―」
「日本文化としてのマンガ・イメージの変遷～子供の娯楽からクール・ジャパンへ～」
「現代日本のポピュラー音楽シーンにおける「政治性」」
「生成し散開するライトノベル ――その存在形態の社会学的考察――」
「行政の標準化とまちづくりにおける地域の差別化」
「ニコニコ動画に関する社会学的考察」
「新聞における報道の自由―日本における『ユランズ・ポステン』風刺画報道の分析―」
「日本野球を支える構造――「する」「みる」の観点から」
「日本企業の採用における留学の意味付け――学生と企業人事へのインタビュー調査から――」

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

猪又梓　「「空気」による意思決定の局所的・複合的合理性について　――太平洋戦争・沖縄水上特攻の事例から――」〈指導教員〉佐藤健二
石井英久「ソーシャル・サポートからみた性別役割分業体制に関する実証研究」〈指導教員〉白波瀬佐和子
近藤万莉「企業環境からみる女性労働者のキャリア形成に関する実証研究」〈指導教員〉白波瀬佐和子
嶋田竜太「地域包括ケアにおける行政・現場のダイナミズム―ローカル・ガバナンスの観点から―」〈指導教員〉井口高志
下山颯　「規範的地位・役割関係の因果分析――中期パーソンズの再評価を通して」〈指導教員〉出口剛司
中田大夢「犯罪と社会経済的要因―社会保障制度に注目した場合―」〈指導教員〉赤川学
新田真悟「高齢者就業に関する男女比較研究：家族関係に着目して」〈指導教員〉白波瀬佐和子
韓仁熙　「ライフコースからみた女性の世代間援助」〈指導教員〉赤川学
PRAJSNAR, Julia Helena「現代日本の自己像　2010 年代の日本礼讃番組を中心にして」〈指導教員〉出口剛司

2021 年度

何沁遥　「中国朝鮮族のエスニックアイデンティティに関する考察―ライフストーリーから見るアイデンティティの変容―」〈指導教員〉井口高志
桐谷詩絵音「都市における広場の実践――分析視角の構築」〈指導教員〉佐藤健二

十文字夏美 「日本における感情資本主義と「去り際の仁義」――退職代行サービス利用者へのインタビュー調査から――」〈指導教員〉赤川学

藤本篤二郎 「現代日本における性的禁欲の論理の考察――理論的対象化と分析のための枠組み構築――」〈指導教員〉赤川学

松崎匠 「アクセル・ホネット承認論の生成：『承認をめぐる闘争』における人倫概念を中心として」〈指導教員〉出口剛司

李亦然 「現代日本のアイドルグループの作品に表現されるアイドルとファンをめぐる関係性」〈指導教員〉出口剛司

金磐石 「農村に移住した若者たちの活動と場所の感覚――韓国慶尚南道南海郡の団体 C の文化企画活動とモビリティー実践――」〈指導教員〉祐成保志

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

(甲)

櫛原克哉 「外来精神医療の治療空間の編成と患者の自己観に関する社会学的考察――自己をめぐるディスコース分析――」

〈主査〉赤川学〈副査〉出口剛司・祐成保志・井口高志・北中淳子

馬渡玲欧 「ヘルベルト・マルクーゼにおける管理社会批判の成立と展開――労働国家とオートメーション・ユートピアをめぐって――」

〈主査〉出口剛司〈副査〉伊藤賢一・宮本真也・赤川学・祐成保志

佐藤和宏 「戦後日本における居住保障システムの福祉社会学的研究」

〈主査〉祐成保志〈副査〉武川正吾・佐藤岩夫・佐藤健二・金成垣

園田薫 「日本企業と外国人労働者の雇用関係―相互行為を捉える産業社会学的考察―」

〈主査〉赤川学〈副査〉佐藤健二・祐成保志・武川正吾・小川慎一

(乙)

なし

2021 年度

(甲)

品治佑吉 「人生と闘争の社会学――社会学者・清水幾太郎の思想史的モノグラフィ（1930 年代～50 年代）――」

〈主査〉佐藤健二〈副査〉出口剛司・祐成保志・武川正吾・福間良明

宮部峻 「宗教教団の改革運動に関する歴史社会学的研究――真宗大谷派の事例分析」

〈主査〉出口剛司〈副査〉佐藤健二・白波瀬佐和子・赤川学・西村明

(乙)

松本康 「「シカゴ学派」の社会学――都市研究と社会理論」

〈主査〉佐藤健二〈副査〉出口剛司・祐成保志・吉見俊哉・町村敬志

２６　　社会心理学

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の規定因を実証的に研究する経験科学であり、社会的状況における個人の行動や認知、集団・組織行動、文化と心理の関係など、幅広い研究テーマを扱う。

当社会心理学研究室は、1974 年 4 月に創設（同年に文学部の専修課程、1976 年 4 月に大学院社会科学研究科の専攻として設置）された比較的新しい研究室である。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学専門分野として、教授 3 名、准教授 1 名、助教 1 名、特任助教 1 名で運営されている。それぞれの教員が個別にラボを運営しつつ、協力しあって学部生・大学院生の教育に従事している。

各々のラボでは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げて、旧来の社会心理学を超えた人間知の構築を目指している。いずれのラボにおいても、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることが特徴的である。教員は共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究に関する詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ（http://www.utokyo-socpsy.com/）およびリンク先の各教員ラボのホームページに公開されている。

⑵　大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的に開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表や、専門学術誌や学術書等への掲載というかたちで公表されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

⑶　学会運営，研究誌の発行など，研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集長・編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、心理学、社会心理学および関連する諸領域の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会、科学哲学会、科学基礎論学会、応用哲学会、人間行動進化学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。また教員の 3 名は、日本学術会議（第一部）の連携会員を務めている。

⑷　国際交流の状況

上述の通り、各教員が種々の国際共同研究プロジェクトに参加しており、複数の学問領域にまたがる国際交流も盛んである。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

亀田達也　教授

在職期間　2014 年 10 月～現在

専門分野　社会心理学、実験社会科学

唐沢かおり　教授

在職期間　2006 年 10 月～現在

専門分野　社会心理学

村本由紀子　教授

在職期間　2011 年 10 月～現在

専門分野　社会心理学

大坪庸介　准教授

在職期間　2021 年 4 月～現在

専門分野　社会心理学

⑵　講師の活動

白岩祐子

在職期間　2016 年 4 月～2021 年 3 月

専門分野　社会心理学

主要業績

（著書）

共著、白岩祐子、『社会的認知：現状と展望』、2020.11

編著、白岩祐子、『ナッジ・行動インサイト ガイドブック：エビデンスを踏まえた公共政策』、2021.2

（論文）

幅勇介・白岩祐子、「男性による子育て休暇取得の実状と規定因：職場・家庭・個人の枠組みから」、『人間環境学研究』、18、17-24 頁、2020.6

Tsutsumida, K & Shiraiwa, Y.、「A study of the death positivity bias in the evaluation of a painting」、『Journal of Human Environmental Studies』、18、31-36 頁、2020.6

白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり、「形見の意味と故人との継続する絆」、『社会心理学研究』、36、49-57 頁、2020.11

久家健太郎・白岩祐子、「アニミズムとホーディング（溜め込み）の関連性：溜め込むモノの種類に着目して」、『人間環境学研究』、2021.6

Hosaka, C. & Shiraiwa, Y. 「The effects of writing a graditude letter on life satisfaction」、『Joruanl of Human Environmental Studies』、19、35-39 頁、2021.6

（書評）

ハロルド・ウィンター、『やりすぎの経済学：中毒・不摂生と社会政策』、『週間書評誌図書新聞』、3450 号、2020.6

（学会発表）

国内、白岩祐子、「「DV を防ぐ」とはどういうことか？：一次予防プログラムの深化に向けて」、日本心理学会第 84 回大会、東洋大学、2020.9

（行政）

環境省日本ナッジ・ユニット連絡会議、有識者委員、2021.1～2021.3

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、白岩祐子、研究代表者、「遺体に対する心の知覚：死者に愛着と敬意を抱く心的メカニズムの解明」、2017～

文部科学省科学研究費補助金、若手研究、白岩祐子、研究代表者、「日本人の死後世界観」、2020～

（他機関での講義等）

非常勤講師、武蔵野大学、「人間の心理を探る」、2020.4～2020.9

非常勤講師、早稲田大学理工学術院、「変革期の社会と心理」、2020.4～2020.9

非常勤講師、武蔵野美術大学造形学部、「応用心理学」、2020.9～2021.3

非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「司法と犯罪政策の心理学」、2020.10～2021.3

⑶　助教の活動

橋本剛明

在職期間　2017 年 4 月～2021 年 3 月

専門分野　社会心理学

主要業績

（著書）

共著、唐沢かおり（編）、『社会的認知―現状と展望』、ナカニシヤ出版、2020.11

（論文）

清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「ギャンブル障害というラベリングがもたらす否定的態度への効果」、『認知科学』、28(10)、2021.3

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「Social rewards in the volunteer's dilemma in everyday life」、『Asian Journal of Social Psychology』、2021.3

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「The effect of impression formation on rejection in the ultimatum game」、『Letters on Evolutionary Bahavioral Science』、2021.3

（学会発表）

国内、竹部成崇・橋本剛明、「他者の善行を目撃したときに心を動かされやすいのはどのような人か？―勢力感の個人差とモラル・エレベーションの関連の検討―」、日本心理学会第 84 回大会、東洋大学（オンライン開催）、2020.9.8

国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「自動運転車に対する受容の規定因の検討」、日本心理学会第 84 回大会、東洋大学（オンライン開催）、2020.9.8

国内、橋本剛明・ターン有加里ジェシカ・唐沢かおり・田井光春、「『データ駆動型社会』に対する人々の態度構造」、日本心理学会第 84 回大会、東洋大学（オンライン開催）、2020.9.8

国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「How do people view various mental illnesses? A preliminary analysis to classify the stereotype of illnesses into four categories using the Stereotype Content Model」、59th Annual Conference of Taiwanese Psychological Association、オンライン開催、2020.10.17

国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「日常的なボランティアのジレンマ状況における対人認知」、日本社会心理学学会第 61 回大会、学習院大学（オンライン開催）、2020.11.7

国内、清水佑輔・ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「日本における障害者の象徴的偏見を測定する尺度の開発」、日本社会心理学学会第 61 回大会、学習院大学（オンライン開催）、2020.11.7

国内、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「ギャンブル障害者への否定的態度の軽減を目指して：ラベリングがもたらす影響の包括的検討」、日本健康心理学会第 33 回大会、東北学院大学（オンライン開催）、2020.11.16

国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「スキルを必要としない協力行動は女性が行う傾向にあるのか？コストリー・シグナリング理論に基づいた検討」、日本人間行動進化学会第 13 回大会、九州大学・西南学院大学（オンライン開催）、2020.12.12

国際、Numata, T., Asa, Y., Hashimoto, T., Karasawa, K.、「Gender differences of emotion perception and subjective feelings induced by animated expressions of a non-human virtual agent」、2021 Society for Personality and Social Psychology Convention、オンライン開催、2021.2.9

国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「Who incurs a cost for her group and when? The effect of justice sensitivity and previous interactions with other members on people's behavior in a volunteer's dilemma」、2021 Society for Personality and Social Psychology Convention、オンライン開催、2021.2.9

国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「A preliminary analysis of the factors related to negative attitudes toward elderly people」、11th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences、オンライン開催、2021.3.29

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、若手研究、橋本剛明、研究代表者、「被害者のエージェンシー認知に基づく被害者理解フレームの検討」、2018～

（他機関での講義等）

非常勤講師、早稲田大学商学部、「心理学 A1・B1」、2020.4～2021.3

非常勤講師、国際基督教大学、「Psychological Measurement and Evaluation」、2020.9～2020.11

非常勤講師、法政大学グローバル教養学部、「Social Psychology II」、2020.9～2021.3

岩谷舟真

在職期間　2021 年 4 月～現在

専門分野　社会心理学

主要業績

（論文）

岩谷舟真・正木郁太郎・村本由紀子、「労働市場における個人のパフォーマンスと流動性の関連について：組織風土・移動コストの調整効果に着目して」、『経営行動科学』、2020.3

Iwatani, S., & Watamura, E.、「Attribution and reputation estimation errors among mobile phone users regarding neglecting messages in computer-mediated communications.」、『Computers in Human Behavior Reports』、2021.8

（学会発表）

国内、岩谷舟真・本田秀仁・大瀧友里奈・植田一博、「意思決定能力をブーストするための介入方法：説明深度の錯覚に着目して」、2020 年度人工知能学会全国大会（第 34 回）、2020.6.11

国際、Iwatani, S., Honda, H., Otaki, Y., & Ueda, K.、「Reducing the illusion of explanatory depth: A new approach to boosting intervention.」、CogSci2020、2020.7.31

（予稿・会議録）

国内会議、岩谷舟真・本田秀仁・大瀧友里奈・植田一博、「意思決定能力をブーストするための介入方法：説明深度の錯覚に着目して」、2020.6.11

（研究テーマ）

笹川科学研究助成、岩谷舟真、研究代表者、「新型コロナウイルス感染症禍において人出増加についての情報は人々の外出行動にどのような影響を及ぼすのか」、2021～

研究活動スタート支援、岩谷舟真、研究代表者、「ナッジの有効性の再検討：個人の情報処理スタイルや社会環境に着目して」、2021～

金惠璘

在職期間　2019 年 8 月～現在

専門分野　社会心理学、実験社会科学

主要業績

（論文）

小谷侑輝, 齋藤美松, 金惠璘, 小川昭利, 上島淳史&亀田達也、「分配の正義とリスク下の意思決定: 効用モデルと瞳孔反応による検討」、『社会心理学研究』、37(1)、26-35、2021.6

（学会発表）

国内、金惠璘、「罰は両刃の剣：公共財供給場面における罰システムの効果」、第 13 回日本人間行動進化学会、オンライン、2020.12.12

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2020 年度

「社会環境の発達の影響による喫煙態度の変化」

「コロナ禍での情報認知構造の差異による行動の違い　～社会的価値志向性による説明～」

「暗黙理論がサンクコスト効果に与える影響：投資の性質に着目して」

「トーンポリシングはどのようにして起こるのか」

「Society5.0 の実現に向けた都市モデルおよびエネルギーシステムの具現化」

「コロナ禍における集団行動の採用に関わる「閾値」とその規定因」

「暗黙理論観が個人のサークルに対する態度に与える影響について」

「関係流動性が内集団ひいきに与える影響～2 つの媒介変数に着目して～」

「不公平状況回避の心理メカニズム」

「溜め込みを引き起こすモノとアニミズム的思考の関連性について」

「広告コミュニケーションにおける効果的な自虐表現の使用場面についての考察」

「しごきはなぜ起きるのか ―システムで捉える機能的側面に着目して―」

「ギャングスタ・ラップの変遷から見る黒人社会の分断についての考察」

「再分配はリスク分散として機能するか」

「親の教育観が、子の暗黙理論の形成に及ぼす影響―家庭の経済・教育環境に着目して」

「関係流動性が対人関係におけるコントロール方略に与える影響：日米の違いに着目して」

「異なる感謝介入法が幸せに与える影響の比較・検討」

「死について想起したのちの価値観変容に経験開放性が及ぼす影響について」

「コロナ禍の規範遵守行動に影響を与える他者要因の検討～新型コロナウイルスに対する恐怖意識に着目して～」

「長崎県壱岐市を舞台とした中高生の同調圧力と起業家精神の関係」

「能力に関する暗黙理論と学校環境が学業成績に与える影響」

2021 年度

「オンラインミーティングツールが対話の質に与える影響 ―テレワーク場面における VR 導入可能性の検討―」

「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のワクチン接種行動に関する心理的決定要因とワクチン情報の正誤認知の影響」

「職場におけるコンフリクトがチームパフォーマンスに及ぼす影響：メンバー流動性の調整効果に着目して」
「男性のメイクはなぜバレてはいけないのか　――多元的無知プロセスからの検討――」
「シグナリングコストがシグナルの信頼性知覚に与える影響」
「健康分野のスマートシティに対する社会受容性に影響を与える要因の検討」
「東京 2020 オリンピックへのネガティブ反応の経時変化とその要因―SNS テキスト分析による検討」
「スマートシティ関連施策の社会受容要因――導入事例を用いたアクター毎の検討――」
「多元的無知の規定因の再検討：個人の行動に対する自己認識と他者認識の差」
「多元的無知状況における共感的配慮から生じる「偽りの実効化」の検討」
「両面価値的性差別における家庭環境要因の影響」
「若年成人期のリスク傾向と社会経済的地位が中年期の社会的成功に及ぼす影響の検討」
「新型コロナウイルス感染症感染拡大下における消費者行動と広告戦略」
「情報探索場面における観察学習の停止の意思決定に関する研究」
「運動部における組織文化の伝達方法」
「信頼性のシグナルとしての利他行動の進化に関する検討 ―個体の流動性に着目して―」
「マルチエージェントシミュレーションによる多元的無知の検討：ネットワーク構造による影響に注目して」
「ダイバーシティは多元的無知を抑制するか？：集団のダイバーシティと心理的安全が規範遵守行動に与える影響」
「東京 2020 オリンピックに関する Twitter 投稿の感情分析に関する研究」
「SNS インフルエンサーの影響力の検討　～インフルエンサーの発信内容とフォロワーの分布に関する事例研究～」
「「わちゃわちゃ感」とは何か：アイドルのイメージ戦略にみる日本の若者文化の様相」」
他特別演習 1 名

(2)　修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

苫米地飛　「遺伝学的知識が社会的排斥に与える影響」〈指導教員〉唐沢かおり

2021 年度

川原瞳　「The Predictors of University Students' Career Aspirations : A Test of Objectification Theory.（大学生・大学院生のキャリア・アスピレーションの予測要因：対象化理論に基づく検討）」〈指導教員〉唐沢かおり

清水佑輔　「なぜ高齢者を否定的に捉えるのか：自己と高齢者を認知的に切り離すことの影響」〈指導教員〉唐沢かおり

原惇一郎　「心的機能の知覚が道徳的扱いに及ぼす影響とその過程：経験性の細分化による再検討」〈指導教員〉唐沢かおり

渡壁政仁　「不支持規範の解消プロセスの検討～他者の選好と評判の推測に着目して～」〈指導教員〉村本由紀子

(3)　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

上島淳史　「最不遇者への配慮を基軸とした分配的正義の実現可能性：実験社会科学によるアプローチ」
〈主査〉亀田達也〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・稲増一憲・犬飼佳吾

（乙）

なし

2021 年度

（甲）

谷邊哲史　「人工知能に対する認知とその社会的影響――適切に活用する社会の形成に向けて――」
〈主査〉唐沢かおり〈副査〉亀田達也・村本由紀子・白岩祐子・膳場百合子

鈴木啓太　「能力に関する暗黙理論の有効性の検討：環境要因としての課題選択の自由度に着目して」
〈主査〉村本由紀子〈副査〉亀田達也・唐沢かおり・大坪庸介・石井敬子

（乙）

なし

２７　　文化資源学

1.　研究室活動の概要

⑴　研究分野の概要

2000 年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の 2 つのコースから成る。

2 コースに再編されたのは 2015 年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学（文書学・文献学）で構成されていた。後 2 者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文学・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達が「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」（身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど）をともなって生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」（resource は泉に臨むという意味）とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

2020 年度担当教員（文化資源学＝中村雄祐教授、野村悠里准教授、佐藤健二教授（社会学と兼担）、大西克也教授（中国語中国文学と兼担）、髙岸輝准教授（美術史学と兼担）、西村明准教授（宗教学宗教史学と兼担）、吉田寛准教授（美学芸術学と兼担）、文化経営学＝小林真理教授、松田陽准教授、アンネグレート・ベルクマン客員准教授、鄭仁善助教、（さらに、2021 年度より大向一輝准教授（次世代人文開発センターと兼担））の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美学芸術学、美術史学、博物館学、音楽学、演劇学、芸能史、書物史、社会学、中国語・中国文学、政策科学、法学、歴史学、国際協力論、開発研究、文書学、考古学などと多彩である。さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から併任教授を招いている。

⑵　大学院専攻・コースとしての活動

2020 年度の修士課程入学者は 9 人（うち社会人学生が 4 人）、博士課程入学者が 3 人（うち社会人学生が 2 人）、2021 年度の修士課程入学者は 6 人（うち社会人学生が 2 人）、博士課程入学者が 4 人（うち社会人学生が 2 人）であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあっては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いかけるフォーラムを、毎年開催してきた。2020 年度のテーマは「アマビエ現象 2020―よみがえり妖怪の変容と拡散が映す現代」、2021 年度は「顔を隠す―日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会」であった。これらを含め、すべての回の開催記録が研究室ホームページに掲載されている。

⑶　学会運営、研究誌の発行など

2002 年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2020 年 6 月に第 18 号、2021 年 6 月に第 19 号を刊行した。2021 年度の会員数は 319 人である。

(4) 国際交流の状況

2020 年度博士課程に 2 名の外国人留学生（シンガポールと韓国より）を受け入れている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 健二（文化資源学）
大西 克也（文化資源学）（～2020 年度）
髙岸 輝　（文化資源学）
西村 明　（文化資源学）
吉田 寛　（美学芸術学）
大向 一輝（文化経営学）（2021 年度～）
中村 雄祐（文化資源学）
小林 真理（文化経営学）
松田 陽　（文化経営学）
野村 悠里（文化資源学）

(2) 助教の活動

鄭　仁善
在職期間　　2019 年 4 月～2022 年 3 月
研究領域　　文化政策、映画産業、映画政策
主要業績

（論文）

Jieun Jung, Insun Chung, A Study on Cultural Arts Education Programs at Overseas Film Festivals（韓国語）, Film Studies vol. 91: 263-290, 2022.3

Insun Chung, Olympic Film Between Nationalism and Cosmopolitanism: the 1964 Tokyo Olympiad and the Postwar Mass Mobilization, Journal of Arts Management, Law and Society 51(6): 365-378, 2021.12

Insun Chung, Did Students Watch“National Films”?:The National Films Alliance with Student Mobilization and Its Rupture（韓国語）, The Korean Journal of Cultural Sociology 29(2): 97-136, 2021.8

（著書）

共著、鄭仁善、「国策映画と動員政治――一九七〇年代韓国における映画統制と生徒の映画団体観覧」、『社会の解得力〈文化編〉―生成する文化からの反照』（出口剛司・武田俊輔編著）、新曜社、63-88、2022. 3

（翻訳）

個人訳、佐藤健二、"風景の生産、風景の開放"、鄭仁善、『풍경의 생산, 풍경의 해방』、현실문화、2020.6

（研究報告書）

鄭仁善、「커뮤니티 기반 영화관람문화 활성화 연구」、KOFIC、2020.7

（その他）

鄭仁善、「映画政策学―ハリウッド映画が日本を経由して韓国輸入された知られざる理由」、『淡青』、東京大学広報誌 44 号、2022. 3: 12-13

(3) 外国人教員の活動

特任准教授　　Bergmann Annegret
在職期間　　2020 年 4 月～現在
研究領域　　文化経営学・演劇史

（論文）

Annegret Bergmann、「Goshomaru: Kabuki Zeitgeist in Tea Bowls」、『The Journal of Asian Arts & Aesthetics』、6、33-45 頁、2020

Annegret Bergmann、「Scenic Beauty - Framing Japanese and European Performing Arts in Landscapes: Scenery by Léonard Foujita」、『Art Research Special Issue, Journal of the Art Research Center, Ritsumeikan University』、1、71-79 頁、2020.2

Annegret Bergmann、「Keshiki in Tea Ceramics」、『Art Research Special Issue, Journal of the Art Research Center, Ritsumeikan University』、1、3-10 頁、2020.2

Annegret Bergmann、「La Représentation du théâtre Japonais dans les netsuke」、『Le Bulletin Association Franco-Japonaise』、147、18-29 頁、2021

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

文化資源学専門分野

持田則子 「具体美術協会の再制作―抽象発、もうひとつのくり返し」〈指導教員〉髙岸輝

文化経営学専門分野

角田陽一郎 「バラエティ番組の制作システムから検証するテレビの演出効果」〈指導教員〉中村雄祐

黒岩千智 「自治体史の変化と活用―パブリック・ヒストリーの観点から―」〈指導教員〉小林真理

大鐘亜樹 「オーケストラの資金調達における新たな潮流―個人支援の多様化と可能性」〈指導教員〉小林真理

持田香菜子 「日本の博物館において戦争はいかに展示されてきたのか」〈指導教員〉西村明

LEE Kah Hui「都市遺産としての日本の商店街―経年的価値（Age Value）の重視と都市遺産（Urban Heritage）概念の展望―」〈指導教員〉松田陽

中村太一 「九谷焼産地における伝統文化の価値創造プロセス再考」〈指導教員〉小林真理

2021 年度

文化資源学専門分野

今井佑 「街頭紙芝居にみる日本の「公」概念 ―公共空間における文化活動の課題について―」〈指導教員〉小林真理

清水章文 「天守のライフヒストリー論：「復興遺構」としてのコンクリート造天守閣」〈指導教員〉松田陽

関慎太朗 「デジタル楽譜のコモンズ化 集合知が導く楽譜文化とその構造」〈指導教員〉吉田寛

林田明子 「教科書体を起点とする「書くこと」の動態に関する研究」〈指導教員〉中村雄祐

文化経営学専門分野

青木蘭 「富士塚を通じてみる聖なる場所の継承―聖なるランドスケープ（Sacred Landscape）の概念を援用して―」〈指導教員〉松田陽

金成めい 「映画振興策における映画保存事業の位置付け～フランス国立映画・映像センターCNC を事例に～」〈指導教員〉小林真理

伊達摩彦 「子どもの居場所としての学校図書館に関する研究」〈指導教員〉小林真理

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

(甲)

文化経営学専門分野

安江（小出）いずみ 「日米交流史における「外国研究」とライブラリー ―福田なをみの軌跡を手掛かりに―」〈主査〉小林真理〈副査〉中村雄祐・佐藤健二・吉見俊哉・木下直之

鈴木親彦 「出版を巡る流通と文化資源学の視座による取次を軸とした出版流通分析」〈主査〉佐藤健二〈副査〉中村雄祐・松田陽・水越伸・長谷川一

形態資料学専門分野

桑原和美 「楳茂都陸平の「新舞踊」の研究―鷲谷家所蔵舞踊譜の解読による再検討―」〈主査〉小林真理〈副査〉中村雄祐・野村悠里・古井戸秀夫・渡辺裕

(乙)

なし

2021 年度

(甲)

文化資源学専門分野

笠原真理子 「マスネのオペラ《マノン》における「演出」―文学のオペラ化に関する考察―」〈主査〉小林真理〈副査〉野村悠里・吉田寛・長木誠司・古井戸秀夫

(乙)

なし

２８　　韓国朝鮮文化

1.　研究室活動の概要

本研究室は 2002 年 4 月 1 日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本で初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

⑴　研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学 1 名、言語学 1 名、文化人類学 1 名、社会学 1 名の合計 4 名の教員で構成される。また、外国人客員教員（特任准教授）1 名が在籍している。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行なっている。

⑵　大学院の専攻・コースとしての活動

2002 年度に修士課程（定員 12 名）が開設され、2004 年度から博士課程（定員 6 名）が増設された。2007 年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの 3 コースに分かれていたが、2008 年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの 2 コースに改組した。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い東洋史学、言語学、社会学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

⑶　研究室としての活動

1. 東京大学コリア・コロキュアム

2003 年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2020 年度はコロナ禍のため休止したが、2021 年度はオンラインで 5 回開催した。

2. 講演記録の刊行

『東京大学コリア・コロキュアム講演記録（2021 年度）』（2022 年 3 月）

3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』第 20 号（2021 年 3 月）、第 21 号（2022 年 3 月）を刊行した。

⑷　国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）と交流協定を締結している。

2.　構成員・専門分野

⑴　専任教員

韓国朝鮮歴史文化コース

教授　　六反田豊　　韓国朝鮮中世近世史

韓国朝鮮言語社会コース

教授　　福井玲　　韓国朝鮮語学・言語学

教授　　本田洋　　社会人類学・韓国朝鮮文化研究

准教授　金成垣　　社会学・社会政策論

特任准教授　李暁源　　韓国古典文学・韓国漢文学（～2021 年 3 月 31 日）

特任准教授　李義鍾　　韓国朝鮮語学・言語学（2021 年 4 月 1 日～）

⑵　助教の活動

岩井亮雄（2018 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）

研究領域：韓国朝鮮語学

主要業績：

（論文）岩井亮雄、「現代韓国語の母音―発音の変化と地域差―」、東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、2020.9

岩井亮雄、「肉魚」、「誦んずる」、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』、第3集、61-64頁、115-118頁、2022.3

（他機関での講義等）非常勤講師、神田外語大学、「韓国語Ⅰ・Ⅱ」、2020.4～2021.3

非常勤講師、国際医療福祉大学、「日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、2020.4～2021.3

澁谷　秋（2021年4月1日～現在）

研究領域：韓国朝鮮語学・書誌学

主要業績：

（他機関での講義等）

非常勤講師、東京経済大学、「朝鮮韓国語初級」、2021.4～

非常勤講師、神田外語大学、「韓国語Ⅰ」、2020.4～

(3)　外国人教員の活動

特任准教授：李暁源

在任期間：2018年4月1日～2021年3月31日

研究領域：韓国漢文学

担当講義：韓国朝鮮文学研究、韓国朝鮮文化交流演習、韓国朝鮮語運用法2

特任准教授：李義鍾

在任期間：2021年4月1日～

研究領域：韓国語学

担当講義：韓国朝鮮語文法研究(3)、韓国朝鮮文化交流演習、韓国朝鮮語運用法2

主要業績：

（論文）李義鍾、「韓国語動詞「펴다」、「펼치다」の多義性と意味拡張機制」、『韓国学研究』 vol.80、高麗大学校韓国学研究所、2022.3、97-132頁

李義鍾、「韓国語「-지(요)」、「-잖아(요)」の条件表示用法とその機能の獲得」、『人文科学研究』 vol.45、大邱カトリック大学校人文科学研究所、2022.3、1-32頁

李義鍾、「レジスター分析方法論に基づく韓国語数量表現語順研究」、『言語』 vol.45、no.3、韓国言語学会、2021.9、829-857頁

（学会発表）李義鍾、「離接-連接連続体の意味類型論」、第222回統辞論研究会月例研究会(韓国)、online、2022.3.12

李義鍾、「離接標識の類型とその用法拡張の方向」、2022年上半期形態論集談会言語類型論研究会共同学術大会（韓国）、オンライン、2022.2.25

李義鍾、「適時性を表す韓国語の副詞語類について」、第269回朝鮮語研究会、朝鮮語研究会、オンライン、2021.8.28

3.　卒業論文等題目

(1)　修士論文執筆者・題目一覧

2020年度

韓国朝鮮言語社会コース

前田夏菜　「韓国文学翻訳論―スコポス理論を用いた分析と評価法について―」〈指導教員〉福井玲

2021年度

韓国朝鮮言語社会コース

髙際敬子　「青瓦台国民請願にみる韓国の民主主義――20万人以上の賛同を得た請願を巡って――」〈指導教員〉金成垣

堀内唯　「中世朝鮮語の有声摩擦音の出現環境と変化の様相」〈指導教員〉福井玲

NGUYENViet Tiep　「ベトナムにおける老後所得保障制度のゆくえ――日韓の公的年金の経験は活用できるのか――」〈指導教員〉金成垣

鄭玉卿　「日本・韓国・台湾における精神障害者の自立支援政策―中国の精神衛生法への示唆に向けて―」〈指導教員〉金成垣

⑵　博士論文執筆者・題目一覧

2020 年度

（甲）

韓国朝鮮言語社会コース

岩井亮雄 「現代韓国語の母音―発音の変化と地域差―」

〈主査〉福井玲〈副査〉本田洋・河崎啓剛・辻野裕紀・生越直樹

（乙）

韓国朝鮮歴史文化コース

山内民博 「一七～一九世紀朝鮮の周縁的社会集団に関する研究――朝鮮戸籍大帳と僧・白丁――」

〈主査〉六反田豊〈副査〉本田洋・吉澤誠一郎・吉田光男・井上和枝

2021 年度

（甲）

韓国朝鮮言語社会コース

徐 旼廷 Seo Minjung 「韓国語大邱方言のアクセントの音声的実現様相における世代差に関する研究―語頭閉鎖音の音響特徴との関わりを中心に―」

〈主査〉福井玲〈副査〉本田洋・伊藤智ゆき・宇都木昭・金鍾徳

（乙）

なし

２９　　次世代人文学開発センター

1.　センター活動の概要

昭和 41 年に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附設施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により平成 17（2005）年から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。センター主任は平成 17 年から小佐野重利教授、平成 25（2013）年度から小島毅教授、令和元（2019）年度から芳賀京子教授が務めている。平成 30（2018）年度に以下の 3 部門に再編成された。

a.　文化交流学部門（〈東アジア海域思想文化〉〈地中海形象文化〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、平成 30 年度より現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。本部門には、小島教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成 17 年度から平成 21（2009）年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成――寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。文化交流研究施設の頃から継続している文化交流研究懇談会は、令和 2～3（2020～2021）年度には第 249 回から第 257 回までを開催し、年度末に退職する教員が講演した。平成 18（2006）年度より開催している文化交流茶話会も継続し、第 56 回から第 62 回までを実施し、新任教員が各自の研究について紹介した。これは研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）も兼ねている。その内容も含め、センター紀要として『文化交流研究』第 33 号（令和 2 年度）、第 34 号（令和 3 年度）を刊行した。そのほか、本部門には多分野交流演習プロジェクトの事務局も置かれており、多分野交流演習ニューズレターを定期的に発行している。

b.　国際人文学部門

人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から多数の留学生が来て勉学に励んでいる。人文社会系研究科・文学部では原則として日本語により教育・研究が行われているため、留学生には高度な日本語運用能力が求められている。人文社会系研究科・文学部の日本語教室では、留学生を対象とする日本語教育の授業を開講して彼らの日本語学習を支援している。本部門にはその担当教員が所属し、日本語教育の方法について実践に基づく研究を行っている。

平成 27（2015）年度から後期教養教育が開始された。人文社会系研究科・文学部は、本郷キャンパスに所在する人文学教育部局としてこれに積極的に協力し、多くの授業を提供している。あわせて、外国の大学と提携してサマースクールなどのかたちで学生の国際交流を企画・実施している。これらの事業の円滑な遂行のために特任助教を置き、教養教育のあり方について研究を進めている。

また、平成 29（2017）年 7 月から、東京大学総合図書館内に、学内 8 部局による連携研究機構として、ヒューマニティーズセンター（Humanities Center: HMC）が設置されている。HMC は、思想・歴史・言語・文学・教育・芸術・建築・生活等にわたる人文学及び隣接諸分野における卓越した研究者による部局横断的な新たな研究協創のプラットフォームである。その運営を人文社会系研究科・文学部として支援するため、特任助教を置いて国際的な連携協力などを担当している。それとともに、鈴木淳本研究科教授が推進する企画研究「学術資産としての東京大学」や、令和 3 年度からは唐沢かおり教授の日立東大ラボ「ハビタット・イノベーション」分野の社会的受容に関するプロジェクトの補助業務を行っている。

c.　人文情報学部門

デジタル化技術の革新とインターネットの急速な発展は、人文社会学における知の保存形態と発信の方法とを大きく変革し、大学・図書館・博物館等に個別に所蔵される知を、広大な一つの地平へと開き出しつつある。過去から継承される多様で膨大な文化資源に立脚する人文社会学の領域にとって、この変化にいかに対応しうるかは、学問の将来を決定しかねない重要な課題である。本部門は、この課題に対応し次世代人文社会学に備えるべく、平成20（2008）年に設置された萌芽部門「データベース拠点・大蔵経」の5年間の活動を踏まえつつ、拡充改組を進め、現在に至った。前身の「データベース拠点・大蔵経」は、平成19（2007）年に設置され、平成24（2012）年から拡大改組して「人文情報学拠点」として創成部門に移った。その後、平成30年、人文情報学部門として独立し、情報学に本格的に対応できる体制を整えた。教育面では「人文情報学概論」「人文情報学特殊研究（学部は特殊講義）」を過去10年にわたって開講するとと

もに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を全学に提供している。受講生は、本研究科のあらゆる専門分野のみならず、法学、経済学、教育学、学際情報学府、工学、情報理工、医学等、全学におよぶ点に特色がある。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に重要な役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ、フランス等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造内在的に連携し、文字、および画像資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼担教員としては、鉄野昌弘教授（日本文学）、小林正人教授（言語学）、高橋典幸教授（日本史学）、中村雄祐教授（文化資源学）、髙岸輝准教授（美術史学）、祐成保志准教授（社会学）がおり、下田教授、大向准教授と協働して上述の事業を推進している。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

○ 文化交流学部門

小島毅教授（東アジア海域交流）

芳賀京子教授（地中海形象文化）

○ 国際人文学部門

向井留実子教授（日本語教育）（～2021 年 3 月）

唐沢かおり教授（2021 年 4 月～）

鎌田美千子准教授（日本語教育）（2020 年 9 月～）

○ 人文情報学部門

下田正弘教授

鉄野昌弘教授

中村雄祐教授

小林正人教授

高橋典幸教授

大向一輝准教授

髙岸輝准教授

祐成保志准教授

(2) 助教の活動

○ 文化交流学部門

太田泉フロランス　助教

在職期間　2021 年 12 月～現在

研究領域　西洋中世美術史

主要業績

（論文）

Izumi Florence OTA, “A French Royal Reliquary with the Image of the *Arma Christi*, the so-called Libretto”, *The Proceedings of the CIHA Florence Congress*, (August 2021) pp. 341-343. Bologna: Bononia University Press.

太田泉フロランス、「フランス中世のパネル型聖遺物容器研究―《リブレット》を中心に」、サントリー文化財団「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」研究助成報告論考、財団 Web サイト公開、2021.6

太田泉フロランス、「ヴァロワ朝フランス王シャルル 5 世由来の携帯用聖遺物容器《リブレット》の素材と銘文に関する一考察」、『鹿島美術研究』（年報別冊）第 38 号、2021.11

（学会発表）

国内、太田泉フロランス、「掌のなかの聖堂ーサント・シャペルを持ち運ぶ」、「宝物とそのいれもの：収納・収蔵の比較美術史」、2021.12.18

（他機関での講義等）

兼任講師、立教大学、全学カリキュラム「キリスト教美術」、2020.9～2021.3

（学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員）

国内、地中海学会、事務局員、2014.4～、月報編集委員、2018.4～

○ 国際人文学部門

福井拓也　助教

在職期間　2021 年 12 月～現在

研究領域　日本近代文学

主要業績

（論文）

福井拓也、「久保田万太郎『道芝』論」、『国語と国文学』、第九十七巻第二号、51-68 頁、2020.2

福井拓也、「出発期の久保田万太郎――小説・戯曲のジャンル布置――」、『東京大学国文学論集』、第 15 号、87-104 頁、2020.3

福井拓也、「新劇の唯美主義――築地座と久保田万太郎「釣堀にて」を中心に――」、『日本近代文学』、第 103 集、32-45 頁、2020.11

福井拓也、「久保田万太郎「末枯」とノスタルジー」、『国語と国文学』、第九十八巻第三号、32-45 頁、2021.3

福井拓也、「芥川龍之介「蜃気楼」論」、『東京大学国文学論集』、第 16 号、51-67 頁、2021.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、実践女子大学短期大学部、「近現代文学の文学を読む」、2018.4～2021.9

非常勤講師、都留文科大学、「近代文学テーマ研究Ⅱ」「「国文学特殊講義Ⅶ」、2020.4～2020.9

非常勤講師、都留文科大学、「近代文学テーマ研究Ⅳ」「「国文学特殊講義Ⅷ」、2020.10～2021.3

非常勤講師、都留文科大学、「テーマ文学史Ⅲ」「情報 A」、2021.4～2021.9

非常勤講師、都留文科大学、「テーマ文学史Ⅳ」「情報 F」、2021.10～2022.3

兼任講師、明治大学、「日本語表現（文章表現）」、2021.4～2021.9

兼任講師、明治大学、「日本語表現（口頭表現）」、2021.10～2022.3

夏木大吾　特任助教

在職期間　2020 年 4 月～現在

研究領域　先史考古学

主要業績

（論文）

夏木大吾、「北海道における更新世・完新世移行期の土器出現と文化形成」、『物質文化』、100、39-49 頁、2020.5

夏木大吾、「大正３遺跡とタチカルシュナイ遺跡」、『季刊考古学別冊』、32、86-89 頁、雄山閣、2020.5

Natsuki Daigo、「Migration and adaptation of Jomon people during Pleistocene/Holocene transition period in Hokkaido, Japan」、『Quaternary International』、608-609、2021.1

夏木大吾、「北海道における神子柴文化並行期とその前後」、『季刊考古学』、153、64-67 頁、雄山閣、2021.2

福田正宏・ガブリルチュク M・夏木大吾・國木田大・張恩惠・ゴルシュコフ M・森先一貴・佐藤宏之・熊木俊朗、ユダヤ自治州新石器時代ビジャン４遺跡出土の新資料」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34、107-130 頁、2021.3

根岸洋・夏木大吾・國木田大・池谷信之・佐藤宏之、「津軽海峡周辺域における縄文時代早期の測定年代と黒曜石産地推定、『東京大学考古学研究室研究紀要』、35、1-24 頁、2022.3

（研究報告書）

夏木大吾編、『北海道北見市吉井沢遺跡の研究（Ⅱ）』、東京大学常呂実習施設研究報告第 19 集、全 155 頁、2021. 3

福田正宏、夏木大吾編、『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（Ⅲ）』、東京大学常呂実習施設研究報告第 21 集、全 158 頁、2022.2

（動向）

夏木大吾、「考古　旧石器時代」、『史学雑誌』、130(5)、11-16 頁、2021.3

（学会発表）

国内、夏木大吾、「北海道における更新世・完新世移行期の人類社会」、日本旧石器学会第 19 回研究発表・シンポジウム「北海道の旧石器時代と集団」、オンライン会議、2021.3

（予稿・会議録）

夏木大吾、「北海道における更新世・完新世移行期の人類社会」、日本旧石器学会第 19 回研究発表・シンポジウム「北海道の旧石器時代と集団」予稿集、51-54 頁、2021.6

水野博太　特任助教

在職期間　2020 年 6 月～現在

研究領域　日本思想史、中国思想史

主要業績

（著書）

共著、水野博太、牧角悦子・町泉寿郎編『講座 近代日本と漢学 第 4 巻 漢学と学芸』（戎光祥出版） 第Ⅱ部第 1 章「井上哲次郎の東洋哲学と服部宇之吉の儒教倫理」、80-99 頁、2020.3

共著、Shaun O'Dwyer (ed.), Chang Kun-chiang, Eddy Dufourmont, Han Shuting, Jiang Dongxian, Kang Haesoo, Lee Yu-Ting, Mizuno Hirota, Alexandra Mustățea, Park Junhyun, Masako Racel, Kyle Michael James Shuttleworth, Song Qi, Yamamura Shō, *Handbook of Confucianism in Modern Japan*, MHM Limited, 2022.2

（論文）

水野博太、「井上哲次郎における「日本哲学」の存在証明とその失敗」、『日本思想史学』（日本思想史学会）、52、109-125 頁、2020.9

（学会発表）

国内、水野博太、「井上哲次郎における「日本哲学」国際発信の試み―国際東洋学者会議における発表論文を中心に―」、日本儒教学会 2020 年度大会、オンライン、2020.8.22

国際、水野博太、「光と影の描き方―服部宇之吉と東京帝国大学における漢学および「支那哲学」」、国際シンポジウム「近代日本の中国学と光と影」（東北大学大学院国際文化研究科主催）、オンライン、2021.1.11

国内、水野博太、「明治期における漢学教育をめぐる議論」、第 34 回 HMC オープンセミナー「古典教育をめぐる議論：19 世紀の日米における事例から考える」、オンライン、2021.3.26

国際、水野博太、「島田重礼―新時代における「腐儒」の役割―（パネル「明治時代の学術知と儒学」）」、東アジア文化交渉学会第 13 回年次学会、オンライン、2021.5.8

国内、水野博太、「福澤諭吉における「会議」と「演説」」、第 38 回 HMC オープンセミナー「「語る力が権力を作る？―歴史からの問い―」、オンライン、2021.7.9

国内、水野博太、「井上哲次郎の見果てぬ夢――東西比較哲学と「日本哲学」」、EAA シンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」、オンライン、2021.9.14

（講演録）

共著、水野博太、松方冬子・水野博太・後藤晴美・井坂理穂『Humanities Center Booklet vol. 13 語る力が権力を作る？―歴史からの問い―』（東京大学ヒューマニティーズセンター）「福澤諭吉における「会議」と「演説」」、15-20 頁、2022.3

（他機関での講義等）

非常勤講師、昭和女子大学、「日本思想史」、2021.4～

非常勤講師、学習院大学、「思想史講義」、2021.4～2022.3

（学会）

国内、日本儒教学会、幹事、2021.4～

３０　　死生学・応用倫理センター

1. センター活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として2011年4月に設けられた。それに伴い「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（会田特任教授、井口准教授、池澤教授、小島教授、小松教授（2020年度）、下田教授、白石講師（2020年度）、鈴木淳教授、鈴木晃仁教授（2021年度）、納富教授（2021年度）、乗立准教授（2020年度）、早川特任准教授、堀江教授、横手教授）により行われる。所属教員は2020年度は会田特任教授、小松教授、早川特任准教授、堀江教授（以上専任）、池澤教授（以上兼担）であるが、小松教授は2021年3月に退職した。代わって、鈴木晃仁教授が4月に着任した。

センター長は池澤教授であるが、2021年度は特別研究期間を取得したため、鈴木淳教授がセンター長代理を務めた。

死生学・応用倫理センターの活動は、以下の四つを柱とする。

① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これは当初、グローバルCOEの活動として行われてきたが、それを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元のモデルケースとなるであろう。

② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育」の開設：2002年以来、文学部は「応用倫理教育プログラム」を展開してきたが、それを死生学と結合して、学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。

③ 国際シンポジウム・研究集会：21世紀COE、グローバルCOEを通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。

④ 次世代を担う若手研究者の育成：COEプログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためにグローバルCOEの機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

以下、この四つについて活動報告を行う。

①　医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育

これは「上廣死生学・応用倫理講座」の担当であり、《医療・介護従事者のための死生学》については、2020年度、2021年度ともに9月にオンライン・セミナーを開催した。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行のために、多くの医療従事者を集める臨床倫理セミナーは開催が難しくなった。臨床死生学・倫理学研究会については、オンラインではあるが、従来通り開催されており、2020年度は10月14日、11月4日、11月25日、12月9日、12月23日、1月13日に、2021年度は4月21日、5月12日、5月26日、6月9日、6月23日、10月13日、10月27日、11月17日、12月8日、12月22日に研究会を行った。

なお、リカレント教育は上廣死生学・応用倫理講座が担当であるので、詳細はそちらの頁を参照されたい。

②　部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」

「死生学・応用倫理教育プログラム」は2012年4月に新たに開設したしたもので、東京大学の部局横断型教育プログラムの一つであるだけでなく、後期教養科目にも指定されている。2012年度の開設科目は28科目（うち死生学・応用倫理センターで直接開講するのは19、以下同じ）、2013年度には33（21）、2014年度には28（21）、2015年度には31（22）、2016年度28（21）、2017年度28（22）2018年度26（20）、2019年度33（26）、2020年度31（24）、2021年度31（24）であった。なお、これらの科目はいずれも2単位、学部・大学院共通科目である。2020、2021年度に開設した「死生学・応用倫理教育プログラム」授業科目は以下の通りである。

2020年度

堀江宗正ほか	「死生学概論」（死生学の射程）
池澤優ほか	「応用倫理概論」（応用倫理入門）
小松美彦	「死生学演習Ⅰ」（生権力・生物医学・生資本主義）
池澤優	「死生学演習Ⅱ」（死生学基礎文献講読）
堀江宗正	「死生学演習Ⅲ」（自殺研究）
早川正祐	「死生学演習Ⅳ」（病いの語りをめぐる倫理）

池澤優　「応用倫理演習Ⅰ」（環境倫理文献講読）
会田薫子　「応用倫理演習Ⅱ」（質的研究法入門）
小松美彦　「応用倫理演習Ⅲ」（科学的生命観と人生論的生命観Ⅴ）
堀江宗正　「応用倫理演習Ⅳ」（環境思想研究）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅱ」（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅲ」（自律についての関係的なアプローチ：現代行為論・自由論の一展開）
堀江宗正　「死生学特殊講義Ⅳ」（批判的死生学）
澤井敦　「死生学特殊講義Ⅴ」（死と不安の社会学）
会田薫子　「死生学特殊講義Ⅵ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ）
会田薫子　「死生学特殊講義Ⅶ」（臨床老年死生学入門）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅷ」（ケアの倫理）
乗立雄輝　「死生学特殊講義Ⅸ」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察）
小松美彦　「応用倫理特殊講義Ⅰ」（先端医療と死生観Ⅱ）
小松美彦　「応用倫理特殊講義Ⅱ」（研究不正・非人道的研究・その歴史構造）
鈴木晃仁　「応用倫理特殊講義Ⅲ」（病院における患者の死の歴史 c.1500-c.2000）
福永真弓　「応用倫理特殊講義Ⅳ」（食と場所の環境倫理）
田中智彦　「応用倫理特殊講義Ⅴ」（現代の「野蛮」に抗うために）
村上靖彦　「応用倫理特殊講義Ⅶ」（現象学的な質的研究入門）
大塚類　「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ）【教育学部】
上別府圭子、キタ幸子、佐藤伊織、副島尭史　「家族と健康」【医学部】
赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔　「生命・医療倫理Ⅰ」【医学部】
根本圭介　「技術倫理」【農学部】
関崎勉　「生命倫理」【農学部】
定松淳　「科学技術インタープリター概論」【教養学部】
石原孝二　「応用倫理学概論」【教養学部】

2021 年度

堀江宗正ほか　「死生学概論」（死生学の射程）
鈴木晃仁・池澤優ほか　「応用倫理概論」（応用倫理入門）
早川正祐　「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理）
堀江宗正　「死生学演習Ⅱ」（パンデミックの死生学）
鈴木晃仁　「死生学演習Ⅲ」（症例誌の歴史的な形成）
会田薫子　「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法）
鈴木晃仁　「応用倫理演習Ⅱ」（症例誌の歴史的な形成）
堀江宗正　「応用倫理演習Ⅲ」（未来倫理の探求）
会田薫子　「死生学特殊講義Ⅰ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ）
会田薫子　「死生学特殊講義Ⅱ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ）
会田薫子　「死生学特殊講義Ⅲ」（臨床老年死生学入門）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅳ」（ケアの倫理）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅴ」（自律についての関係的なアプローチの展開―現代行為論・自由論の一展開）
早川正祐　「死生学特殊講義Ⅵ」（認識をめぐる不正義と責任―現代認識論の一展開）
乗立雄輝　「死生学特殊講義Ⅶ」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察）
澤井敦　「死生学特殊講義Ⅷ」（死と不安の社会学）
古荘真敬　「死生学特殊講義Ⅸ」（死生をめぐる実存哲学の諸問題）
轟孝夫　「応用倫理特殊講義Ⅰ」（技術時代の倫理―ハイデガー哲学の視座より）
吉永明弘　「応用倫理特殊講義Ⅱ」（都市の環境倫理）
福永真弓　「応用倫理特殊講義Ⅲ」（食と場所の環境倫理）
村上靖彦　「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究入門）
鈴木晃仁　「応用倫理特殊講義Ⅴ」（患者の歴史と生命倫理学）
堀江宗正　「応用倫理特殊講義Ⅵ」（環境倫理の論点）

北條勝貴　「応用倫理特殊講義Ⅶ」（〈亡所〉の環境史／倫理学）
大塚類　「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ）【教育学部】
赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔　「生命・医療倫理Ⅰ」【医学部】
佐藤伊織、キタ幸子、副島尭史　「家族と健康」【医学部】
芳賀猛　「生命倫理」【農学部】
根本圭介　「技術倫理」【農学部】
小松美彦　「科学技術リテラシー論Ⅰ」（新型コロナウイルス感染症と生権力）【教養学部】
廣野喜幸　「応用倫理学概論」（応用倫理学の思考法を学ぶ）【教養学部】

なお、2020 年度、2021 年度ともに結果的に全科目ともにオンラインとなった。

③　国際シンポジウム・研究集会

2020 年度、2021 年度は新型コロナウイルス感染症のために死生学・応用倫理センター主催のシンポジウムは開催されなかった。しかし、海外の協力研究機関である韓国の翰林大学校生死学研究所との共同研究は堀江教授が継続して担当している。

その他、上廣死生学・応用倫理講座の主催で、2021 年 3 月 14 日にシンポジウム「人生の最終段階と透析療法 ― 緩和ケアと ACP の役割」を、2022 年 3 月 6 日に「呼吸不全の在宅緩和医療と ACP の役割」を、それぞれオンラインで開催した。

④　次世代を担う若手研究者の育成

死生学・応用倫理の未来を担う若手研究者を育成するために、2020～21 年度は特任研究員 5 名（うち 2 人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用した。

特任研究員はセンターの諸活動の中核を担うだけでなく、センター機関誌である『死生学・応用倫理研究』に研究成果を積極的に発表することが期待されている。『死生学・応用倫理研究』は、グローバル COE「死生学」の機関誌として発行してきた『死生学研究』を改名して継続刊行しているものであり、2020 年度に 26 号を、2021 年度には 27 号を刊行した。

⑤　死生学応用倫理専門分野の創設について

2021 年度、人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中に死生学応用倫理専門分野（死生学応用倫理研究室）を創設することが正式決定された。創設時期は 2022 年 4 月になる。これに伴い、死生学・応用倫理センターの性格が一部変わるので、2021 年度の段階で既に決定したことを記しておく。

今まで死生学・応用倫理センターの所属だった教員は、上廣死生学・応用倫理講座の特任教員をのぞき、死生学応用倫理専門分野の所属になる。つまり、特任教員以外には死生学・応用倫理センターには専属教員はいなくなる。センターが上記①～④の業務を行うことはこれまでと同様だが、その運営は学部長が指名する運営委員によって行われる。

なお、死生学応用倫理研究室は弥生総合研究棟三階の 302、303 教室に置かれることが決定した。

2.　構成員・専門分野

(1)　所属教員

会田薫子、池澤優（センター長）、小松美彦（2021 年 3 月まで）、鈴木晃仁（2021 年 4 月から）、鈴木淳（2021 年度センター長代理）、早川正祐、堀江宗正

(2)　特任研究員

田村未希、丸山文隆、陳健成、矢口直英、坂井愛理

(3)　事務補佐員

安野裕美

３１　　北海文化研究常呂実習施設

1.　実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約2万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連綿と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワやナラの林の中に2,500を超える竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は1955年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967年からは助手1名が文学部考古学研究室から派遣され、1973年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、教授・助教各1名、有期雇用職員（管理人等）2名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。ほかに、2014年度からは文学部夏期特別プログラムの後半部分が常呂実習施設で開講され、東大の学部学生と海外の学生が地域の文化資源を体験するプログラムを通じて交流している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は14冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、ロシア連邦の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した21冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元竪穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに2000年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2021年度までに25回を数えている。

2.　構成員・専門分野

(1)　専任教員

熊木　俊朗　　研究領域　　北東アジア考古学

(2)　助教の活動

鈴木　舞

在職期間　　2020年4月～2021年3月

研究領域　　中国考古学

主要業績

（著書）

共著、植田喜兵成智・鈴木舞、『学習院大学東洋文化研究所新収 谷井済一関係文書（仮）翻刻稿』、学習院大学東洋文化研究所、2020.6

共著、鶴間和幸・鈴木舞・山田高大・邉見統・河野剛彦、『東アジアの金工品―学習院大学蔵林コレクション―』、学習院大学東洋文化研究所、2021.3

共著、飯島武次・角道亮介・鈴木舞・大日方一郎・湯沢丈・菊地大樹『秦の淵源―秦文化研究の最前線―』、外為印刷、2021.6

（論文）

和文論文誌、鈴木舞・飯塚義之・鶴間和幸、「契丹の金工技術―個人蔵木村武山コレクションの金属製帯金具の研究―」『FUSUS』、13、73-90 頁、2021.3

和文論文誌、植田喜兵成智・鈴木舞、「新収『谷井済一関係資料』の概要とその紹介」『東洋文化研究』、23、69-223 頁、2021.3

和文論文誌、鈴木舞、「木村武山コレクションにおける中国中原青銅器」、木村武山と中国美術コレクション（学習院大学東洋文化研究所 調査研究報告 70 号）、38-49 頁、2021.3

和文論文誌、松本圭太・飯塚義之・鈴木舞、「木村武山コレクションにおける中国北方青銅器」、木村武山と中国美術コレクション（学習院大学東洋文化研究所 調査研究報告 70 号）、50-131 頁、2021.3

和文論文誌、鈴木舞・飯塚義之、「木村武山コレクションにおける契丹金工品」、木村武山と中国美術コレクション（学習院大学東洋文化研究所 調査研究報告 70 号）、132-150 頁、2021.3

和文論文誌、鈴木舞、「婦好墓からみる殷墟青銅器の生産とその展開」大貫静夫編『中国考古学論叢―古代東アジア社会への多角的アプローチ』、同成社、101-128 頁、2021.5

（解説）

国内、鈴木舞、「2019 年度終了プロジェクト―学習院大学蔵古代中国青銅器の調査と研究」、学習院大学東洋文化研究所所報［2020 年度版］、29-30 頁、2020.5

国内、鈴木舞、「中国遼代の金属工芸に関する考古学的研究―日本所蔵コレクション資料の活用―」、第 44 回 2019 年度年報（公益財団法人鹿島学術振興財団）、69-70 頁、2020.10

（翻訳）

共訳、姜生、『漢帝国的遺産：漢鬼考』、科学出版社、三浦國雄・田訪（監訳）、鈴木舞他 6 名（訳）、『漢帝国の遺産―道教の勃興―』、東方書店、2020.10（中文和訳）

鈴木舞、「第 1 章第 1 節　銅造釈迦如来坐像が台北故宮博物院に収蔵された経緯」、三宮千佳・外山潔・三船温尚・陳東和、「台北・國立故宮博物院／台北駐日経済文化代表処所蔵銅造釈迦如来坐像の 3D ポリゴンデータによる各部プロポーションの検討と鋳造技法」、『FUSUS』、13 号、2021.3（中文和訳）

太田　圭

在職期間　　2021 年 4 月～現在

研究領域　　日本考古学

主要業績

（論文）

太田圭、「縄文時代」、『史学雑誌』、第 129 編第 5 号 2019 年の歴史学界―回顧と展望―、15-20 頁、2020.5

太田圭・山下優介・領塚正浩・佐々木由香・百原新・那須浩郎・設楽博己、「レプリカ法による市川市域出土の縄文土器の圧痕調査」、『市立市川考古博物館館報』、48、31-50 頁、2021.3

根岸洋・大上立朗・太田圭・岡本洋、「宇鉄遺跡出土の碧玉製管玉に関する基礎的研究」、『青森県立郷土館研究紀要』、45、63-74 頁、2021.3

太田圭、「道東地域の擦文文化における生業基盤成立過程の基礎的研究―常呂川・釧路川流域とその周辺における竪穴を有する遺跡の分布―」、『アーキオ・クレイオ』、19、13-40 頁、2022.3

太田圭「外縁地域における曽利式土器情報の拡散と受容に関する一考察」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、35、25-56 頁、2022.3

（学会発表）

国内、近藤恵・藤田祐樹・久野正博・太田圭、「浜松市根堅遺跡における浜北人発見地点および周辺部に関する確認調査」、第 74 回人類学会大会、オンライン開催（Zoom）、2020.11.1

国内、太田圭、「福島県・茨城県・栃木県における曽利式（系）土器の集成」、山梨県考古学協会 2021 年度研究集会 曽利式土器とその周辺、Zoom（オンライン）、2021.11.21

（研究報告書）

熊木俊朗・太田圭・工藤景史・國木田大・佐野雄三・千原鴻志・夏木大吾・西村広経・山下優介・鈴木舞、「アイヌ文化形成史上の画期における文化接触 擦文文化とオホーツク文化―大島 2 遺跡の研究⑵―」、東京大学常呂実習施設研究報告第 18 集、2021.3

夏木大吾・山田哲・太田圭・國木田大、「北海道北見市吉井沢遺跡の研究（Ⅱ）」、東京大学常呂実習施設研究報告第 19 集、2021.3

（予稿・会議録）

国内会議、太田圭、「福島県・茨城県・栃木県における曽利式（系）土器の集成」、山梨県考古学協会 2021 年度研究集会 曽利式土器とその周辺、Zoom（オンライン）、2021.11.21

『山梨県考古学協会 2021 年度研究集会 曽利式土器とその周辺資料集 付.曽利式（系）土器集成』、103-121 頁、2021.11

（展示）

東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館第 11 回企画展「北見市大島 2 遺跡発掘調査成果展」、太田圭、熊木俊朗、2021.11.8～2021.12.24

（研究テーマ）

日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援、太田圭、「先史・古代の日本列島北部における生業基盤成立過程の解明―レプリカ法を中心に―」、2021.8～2023.3

３２　　上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

1.　寄付講座活動の概要

本講座は、公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付講座「上廣死生学講座」として平成 19 年度から第 1 期 5 年間の活動を行ったのち、平成 24 年度から「上廣死生学・応用倫理講座」として寄付講座第 2 期の活動を行い、平成 29 年度からの 5 年間は寄附講座第 3 期の活動を行った。第 1 期は、次世代人文学開発センターに属し、グローバル COE「死生学の展開と組織化」の活動を行ったが　第 2 期は、グローバル COE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の活動を継いで平成 23 年度に発足した「死生学・応用倫理センター」に属して、死生学の臨床にかかわる面および応用倫理の一領域である臨床倫理を中心に活動を進め、第 3 期においても継承・発展的に活動した。本講座は特任教授 1 名、特任准教授 1 名に加えて、令和 2 年度・3 年度（2020・2021 年度）は上廣倫理財団からの追加寄付により特任助教 1 名と特任研究員 1 名を雇用していただいた。

本講座の統括責任者は池澤優教授（宗教学・死生学）であり、池澤教授は本講座の上部組織である死生学・応用倫理センターのセンター長でもある。さらに、同センターの堀江宗正教授および令和 3 年度からは鈴木晃仁教授にもリカレント教育等についてご協力いただき、活動を進めている。本講座第 3 期 5 年間の目的については次のように規定している。

本講座は、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターの中にあって、

(a)　医療・介護の臨床現場を中心とする人間の生活の場において、人生の物語りを生きつつある人々の生活に即した臨床死生学と現実の諸問題に即した倫理的あり方を実践的に研究し、研究成果の社会への還元が現実の人々の人生をより豊かにすることに貢献し、またその還元する活動が同時に研究活動でもあるような実践的学問を展開し、かつ、

(b)　研究成果を社会に還元する活動として社会人対象の「リカレント教育」を行い、また、学生・院生を対象として、研究を背景にした部局横断型「死生学・応用倫理プログラム」の一翼を担うこと

を目的とする。

この目的に応じて、本講座の活動は、1)実践的研究活動、2)学部・大学院教育、および 3)社会貢献（リカレント教育その他、実践的研究と連動するもの）から成っている。1)実践的活動および 3)リカレント教育に関しては、長引くコロナ禍のなか、次善の策としてオンラインによるセミナー・研修会を実施したが、総じて参加者満足度と利便性が高く、特に遠隔地の医療・介護従事者からは大変好評であった。これらに関する令和 2 年度・3 年度の実績概要は次のとおりである。

１）実践的研究活動

上廣死生学・応用倫理講座では本講座がスタートした平成 19 年度から医療・介護従事者を対象に臨床倫理セミナーを行っている。臨床倫理セミナーは臨床倫理の基礎および事例検討法に関する講義と、事例検討の演習（グループワークおよび全体会での発表と成果の共有）によって構成されている。

令和 2 年度・3 年度は疫病禍のなか、臨床倫理セミナーの開催は限定的なものとならざるを得なかった。対象者である医療・介護従事者が、新型コロナウイルス感染症の患者の治療とケアおよび地域における感染予防活動のために忙殺され、また、集会による対面セミナーの実施が感染拡大の原因となることが危惧されたため、対面セミナーの開催を見合わさざるを得ない地域が多かったためである。

当講座ではこうした状況において、令和 2 年度に医療・介護従事者の自習用に e-learning 用の研修教材を作成し、ウェブサイトにて公開した (http://clinicalethics.ne.jp/cleth-prj/cleth_online/)。令和 3 年度はこれらのコンテンツに対する質問にメールで応答し、これらのコンテンツを用いて医療機関等が自主的に行う研修を支援した。

オンラインの臨床倫理セミナーは、金沢大学附属病院が中心となる北陸地区および諏訪中央病院と諏訪赤十字病院が中心となる諏訪地区の医療・ケア従事者を対象に開催し、また、日本医療ソーシャルワーカー協会とも協働で開催した。北陸地区臨床倫理事例検討会および日本医療ソーシャルワーカー協会臨床倫理研修会では、上記の e-learning コンテンツを予習教材として活用して頂いた。

また、令和 3 年度に臨床倫理のテキスト『臨床倫理の考え方と実践―医療・ケアチームのための事例検討法』（清水哲郎、会田薫子、田代志門共編）を東京大学出版会から刊行した。同書では現場の医療・ケア従事者のために、編者らが開発した臨床倫理の理論と事例検討法を豊富な事例とともに解説した。

同書は日本で独自に開発された臨床倫理の初の体系的なテキストである。日本で開発された方法論であることは、臨床倫理については特に重要である。それは、臨床現場における意思決定支援に関しては、当該社会の社会的文化的特徴

および法・制度を踏まえる必要があるからである。それらの特徴のなかでも、特に療養上の意思決定に関与する家族のあり方については、欧米と日本では相違が大きく、日本では家族への配慮が要点の１つになることが多い。また、基本的な法・制度に関する彼我の相違もある。同書の構成は以下のとおり。執筆陣は本講座初代特任教授の清水哲郎氏を中心とする臨床倫理プロジェクトの共同研究者。

【概説編】

第一章「臨床倫理の基礎」　（会田薫子）

第二章「事例検討の進め方」　（清水哲郎）

【実践編】

「カンファレンス用ワークシート」を活用し、様々な臨床課題を具体的に検討する方法の執筆を、総勢16名の医師・看護師・医療ソーシャルワーカーに執筆頂いた。

【アドバンスト編】

第一章　本人の意思を尊重するということ
「自律」・「自己決定」再考　（日笠晴香）

第二章　臨床におけるケアの倫理　（早川正祐）

第三章　臨床の倫理原則における《尊厳》の位置　（清水哲郎）

第四章　厚労省「人生の最終段階ガイドライン」と
《情報共有-合意》モデル　（清水哲郎）

第五章　高齢者のための ACP―frailty の知見を活かす　（会田薫子）

第六章　患者の意向を尊重した ACP の進め方
進行再発乳がん患者への取り組みから　（江口惠子）

第七章　MCD の知見を用いる事例検討法　（田代志門）

第八章　病院組織における倫理サポート体制　（田代志門）

第九章　臨床倫理の検討を深めるためのファシリテーション　（田村里子）

第十章　臨床倫理の文化を現場に定着させるために　（霜田　求）

対談　臨床倫理の過去・現在・未来　（石垣靖子×清水哲郎、司会：会田薫子）

２）部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」への参加

学部横断型の教育プログラムに貢献する授業を担当し、コア授業の一つである「死生学概論」と「応用倫理概論」についても本講座スタッフが参画した。

令和２年度

堀江他　死生学概論〔死生学の射程〕（会田・早川各１回担当）	A セメスター	木曜２限
池澤他　応用倫理概論〔応用倫理入門〕（会田は１回担当）	S セメスター	金曜３限
会田　死生学特殊講義〔臨床老年死生学入門〕	A セメスター	木曜３限
会田　死生学演習〔質的研究法入門〕	S セメスター	火曜５限
会田　死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ〕	A セメスター	水曜６限
早川　死生学特殊講義〔認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開〕	S セメスター	木曜４限
早川　死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	S セメスター	木曜４限
早川　死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	S セメスター	水曜２限
早川　死生学特殊講義〔ケアの倫理〕	A セメスター	木曜４限

令和３年度

堀江他　死生学概論〔死生学の射程〕（会田・早川各１回担当）	A セメスター	木曜２限
池澤他　応用倫理概論〔応用倫理入門〕（会田は１回担当）	S セメスター	金曜３限
会田　死生学特殊講義〔臨床老年死生学入門〕	A セメスター	木曜３限
会田　死生学演習〔質的研究法入門〕	S セメスター	火曜５限
会田　死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅰ〕	S セメスター	水曜６限
会田　死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅱ〕	A セメスター	水曜６限
早川　死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	S セメスター	水曜２限
早川　死生学特殊講義〔共感とケアの哲学〕	S セメスター	木曜３限
早川　死生学特殊講義〔認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開〕	A セメスター	水曜２限
早川　死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	S セメスター	木曜４限

３）社会貢献

リカレント教育《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」として行うセミナーや、エンドオブライフ・ケアに関するシンポジウム、臨床倫理セミナー、「臨床死生学・倫理学研究会」等の研究会を催して、研究成果の社会還元に努めた。さらに、特任教授の会田は招待講演等の依頼を多数こなした。また、特任准教授の早川も、医学・看護学系団体からの招聘にて講演を行う機会が増えてきた。講演のテーマはいずれにおいても研究成果を核とするものに他ならない。

☆リカレント教育セミナー☆

本講座が平成19年度からその中核として活動してきたリカレント教育《医療･介護従事者のための死生学》「基礎コース」を発展的に継続している。リカレント教育とは生涯教育の一形態である。同コースは臨床現場の専門職が死生に関する理解を深め、日々の医療とケアに活かしていくために研鑽を積む場であり、死生学研究の臨床現場への学知の窓でもある。令和2年度・3年度はコロナ禍のなか、オンライン（一部ハイブリッド）にて夏季セミナーと春季シンポジウム、「臨床死生学・倫理学研究会」を開催した。以下、具体的な内容を報告する。

◇ 《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」セミナー　（夏季セミナー）

日時：令和2年9月27日（日）　9:30～17:00
開催形態：Zoomを利用したリアルタイム講義
参加者数：約400名
＜プログラム＞
［概論］死生学コア／死生学トピック
池澤優「死生学とは何か―ロバート・リフトンにおける死の現在」
［概論］臨床死生学コア／臨床死生学トピック
会田薫子「臨床現場で活きる死生学」
［共通］死生学トピック／臨床死生学トピック
古田徹也（東京大学大学院人文社会系研究科　准教授）
「良い患者であることの何が問題なのか―「合理的な選択」とは別の仕方で」
［概論］臨床死生学トピック
早川正祐「ケアの倫理―混沌の語りと人間尊重」
［概論］死生学トピック
小松美彦「死はいかに捉えうるか―「個人閉塞した死」と「共鳴する死」」

◇ 《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」セミナー　（夏季セミナー）

日時：令和3年9月19日（日）　9:30～17:00
開催形態：Zoomを利用したリアルタイム講義
参加者数：約 530 名
＜プログラム＞
［概論］死生学コア
池澤優　「死生学とは何か―ハンス・ヨナスにおける生命と科学技術」
［概論］臨床死生学コア
会田薫子「臨床現場で活かす死生学―ACP の意義」
［特論］死生学トピック
堀江宗正「コロナ死生観調査から見えるもの」
［特論］臨床死生学トピック
早川正祐「時間と自己実現を哲学する―臨床編」
［特論］死生学トピック
鈴木晃仁「東京の精神病院の地理的な空間と文学的表象の変遷」

☆シンポジウム☆

▼「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナー

シンポジウム「人生の最終段階と透析療法―緩和ケアと ACP の役割」

日時：令和 3 年 3 月 14 日（日）　13:00～17:00

開催形態：Zoom ウェビナーによるオンライン開催

参加登録者数：約 1400 名

当日のオンライン参加者数：約 1200 名

平成 22 年度から恒例となっているエンドオブライフ・ケアに関するシンポジウムは、「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナーとして位置付けられている。これは当講座の研究課題の 1 つであるエンドオブライフ・ケアの充実に関するもので、今回は「人生の最終段階と透析療法―緩和ケアと ACP の役割」と題して実施した。これは、前年に疫病禍のために延期された行事であった。

超高齢社会における血液透析をめぐる諸課題への日本の取り組みは西洋諸国に比べて遅れており、老化が進行した高齢患者に過剰負担を与え、かえって生命予後および機能予後の悪化をもたらしている。この現状を打破するために研究成果を公表しつつ社会的な変革を訴えた。本課題に関する現場の医療・ケア従事者の関心は非常に高く、本講座の行事で過去最高の約 1,200 名の参加を得た。

前年の 2 月、急なコロナ禍のためやむを得ず本シンポの 1 年延期を決定した際に、参加登録してくださっていた医療・介護従事者の方々に対し、本テーマに関連する現場の困難感をお寄せくださいとお願いしたところ、多数の方々が詳細な記述をお寄せくださった。令和 2 年度から当講座の特任研究員となった坂井愛理がそれらの内容分析を行い当日に発表した。

今回のシンポジウムは、会田が研究開発分担者として関わらせて頂いた、AMED 柏原班の研究代表者である柏原直樹氏（川崎医科大学副学長/腎臓・高血圧内科学教授）および日本老年医学会との共同主催にて実施した。さらに、一般社団法人日本腎臓学会、一般社団法人日本腎不全看護学会、NPO 法人日本腎臓病協会からご後援を頂いた。

＜プログラム＞

総合司会：早川正祐　東京大学 上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授

【開会の辞】

葛谷雅文　　名古屋大学大学院医学系研究科 地域在宅医療学・老年科学分野 教授

【発表】

坂井愛理　　東京大学大学院人文社会系研究科上廣死生学・応用倫理講座 特任研究員

「臨床現場の皆様からのお声 」

大賀由花　　山陽学園大学 看護学部

『高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための 意思決定支援ツール』について

【座長提題】

三浦久幸　　国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部長

会田薫子　　東京大学 上廣死生学・応用倫理講座 特任教授

【講演】

進藤喜予　　市立東大阪医療センター 緩和ケア内科部長

「維持透析治療の終了を表明したがん終末期患者への意思決定支援」

石橋由孝　　日本赤十字社医療センター 腎臓内科部長

「人生の最終段階と透析療法

齋藤凡　　東京大学医学部附属病院 看護部、日本腎不全看護学会 理事

「人生の最終段階と看護ケア」

清水哲郎　　岩手保健医療大学 学長

「本人の人生・価値観と医学的妥当性・適切性の間で」

【特別発言】

柏原直樹　　川崎医科大学 副学長、腎臓・高血圧内科学教授、日本腎臓学会 理事長

石垣靖子　　北海道医療大学 名誉教授

【パネルディスカッション】

【閉会の辞】　会田薫子

▼「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナー

シンポジウム「呼吸不全の在宅緩和医療と ACP の役割」

日時：令和 4 年 3 月 6 日（日）　13:00～17:00

開催形態：Zoom ウェビナーと対面によるハイブリッド開催

参加登録者数：903 名

当日のオンライン・アクセス数：823 名、対面会場（名古屋大学鶴友会館）参加者数：15 名

現在の日本の後期高齢者および超高齢者層、特に男性には、日本政府が全国の農家に葉タバコの生産を勧奨し、国民に喫煙を勧めた時代に喫煙者となり、長期間におよぶ喫煙の悪影響によって慢性閉塞性肺疾患（COPD）に罹患した患者が多い。COPD 患者は慢性呼吸不全患者の中核を占めている。

次第に症状が悪化する慢性呼吸不全を抱える本人は、現在の症状に対応するための治療を受けつつ、家族等と医療・ケアチームとともに、将来の医療・ケアについて話し合いを繰り返す ACP を行うことが重要とされている。しかし、どのように ACP の対話を開始し、そして進めるべきか、何をどのように話し合うべきか、その具体的な方法はまだ多くの医療・ケア従事者にとって困難な課題となっている。

また、長期におよぶことの多い慢性呼吸不全のプロセス全体において適切な緩和医療が必要とされているが、この分野における緩和医療はまだ確立されているとはいえない。そこで、AMED 研究課題「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」（令和元年度～3 年度）では、これらの医学的および臨床倫理的な諸課題への対応を検討し、このシンポジウムをその研究成果の発信の場とした。主要な研究成果は「在宅呼吸不全に対する緩和ケアの新指針」と「ACP 支援ガイド」である。

今回のシンポジウムは、会田が研究開発分担者として参画させて頂いている、AMED 三浦班（研究代表者：国立長寿医療研究センター 三浦久幸氏）および日本老年医学会との共同主催とし、広範な発信を目指した。

＜プログラム＞

総合司会：早川正祐　東京大学 上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授

【開会の辞】

葛谷雅文　　名古屋大学大学院医学系研究科 地域在宅医療学・老年科学分野 教授

【座長提題】

三浦久幸　　国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部長

会田薫子　　東京大学 上廣死生学・応用倫理講座 特任教授

【講演】

山中崇　　東京大学大学院医学系研究科 在宅医療学講座 特任准教授

「国内の呼吸不全の在宅緩和医療の実態」

山口泰弘　　自治医科大学附属さいたま医療センター 呼吸器内科 教授

「呼吸不全の在宅緩和医療の新たな指針」

平原佐斗司　東京ふれあい医療生活協同組合　研修・研究センター長

「末期認知症の肺炎の緩和ケアに関する研究と認知症の肺炎の緩和ケア指針作成について」

竹川幸恵　　大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター 慢性疾患看護専門看護師

「非がん呼吸器疾患患者がその人らしく生き抜くための看護ケア」

西川満則　　国立長寿医療研究センター 緩和ケア診療部 医長

「末期呼吸不全の ACP」

平川仁尚　　名古屋大学大学院医学系研究科 国際保健医療学・公衆衛生学 准教授

「With コロナ時代の ACP」

【特別発言】

清水哲郎　　岩手保健医療大学 臨床倫理研究センター長

石垣靖子　　北海道医療大学 名誉教授

【Q＆A】

【閉会の辞】

荒井秀典　　国立長寿医療研究センター 理事長

☆臨床死生学・倫理学研究会☆

令和2年度

前期は新型コロナウイルスの感染拡大のため休止

1. 10月14日（水）「いのちを哲学する。西田幾多郎からのヒントいのちを哲学する。西田幾多郎からのヒント」
   中岡成文　一般社団法人　哲学相談おんころ　代表理事
   元 大阪大学大学院文学研究科　臨床哲学教授
2. 11月4日（水）「新型コロナウイルス感染症とエンド新型コロナウイルス感染症とエンドオブライフ・ケア」
   三浦 久幸　国立長寿医療研究センター　在宅医療・地域医療連携推進部長
3. 11月25日（水）「透析中止を希望した患者とその家族への意思決定支援透析中止を希望した患者とその家族への意思決定支援」
   田中 順也　堺市立総合医療センター　慢性疾患看護専門看護師
4. 12月9日（水）「コロナウイルス禍における死の消費」
   磯野真穂　文化人類学・医療人類学者、慶應大学大学院　健康マネジメント研究科 研究員
5. 12月23日（水）「救命救急センターにおけるエンド救命救急センターにおけるエンドオブライフ・ケア」
   塩見直人　済生会滋賀県病院 救命救急センター長、久留米大学医学部救急医学講座　准教授
6. 1月13日（水）「コロナ時代のメンタルヘルスと対話の可能性」
   斎藤環　筑波大学大学院社会精神保健学分野　教授　精神科医
   オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン（ODNJP）共同代表

令和3年度

1. 4月21日（水）「“役に立つ”とはどういうことか――超高齢社会の〈老い方〉を考える」
   森下直貴（老成学研究所 理事長／浜松医科大学名誉教授）
2. 5月12日（水）「コロナ禍の日本人論」竹内整一（東京大学名誉教授）
3. 5月26日（水）「口腔医学が拡げる医療の幅 ― 臨床死生学・倫理学との接点」
   曽我賢彦（岡山大学病院　医療支援歯科治療部　部長・准教授）
4. 6月9日（水）「コロナ禍における看取り ―「ホームホスピス かあさんの家」にて」
   市原美穂（認定特定非営利活動法人ホームホスピス宮崎理事長／一般社団法人全国ホームホスピス協会　理事長）
5. 6月23日（水）「生と死のグラデーション ― 死生観の再構築」
   広井良典（京都大学 こころの未来研究センター 教授）
6. 10月13日（水）「広々と気持ちよく出すことを叶える「うんこ文化」学の創成」
   榊原千秋（うんこ文化センターおまかせうんチッチ代表、一般社団法人日本うんこ文化学会代表理事、訪問看護ステーションややのいえ統括所長）
7. 10月27日（水）「選択される命―出生をめぐる民俗」鈴木由利子（宮城学院女子大学 非常勤講師）
8. 11月17日（水）「コロナ禍におけるニューヨークの医療現場での Advance Care Planning の役割」
   百武美沙（慶應義塾大学医学部 医学教育統轄センター 助教）
9. 12月8日（水）「人生における取捨選択―在宅と救急の現場から」
   井上淑恵（医療法人社団悠翔会在宅クリニック品川・藤沢市民病院救命救急センター 医師）
10. 12月22日（水）「尊厳を思想史から考える」
   小島毅（東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 教授）

上記の研究会もコロナ禍を契機としてオンラインにて開催するようになったが、次第に全国からアクセス数が増え、令和3年度は年間で延べ約4,000名が上記の研究会に参加した。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田 薫子　特任教授　臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

早川 正祐　特任准教授　行為論、倫理学、臨床死生学

(2) 特任助教の活動

田村 未希

在職期間　2020年7月～

研究領域　哲学（現象学）

主要業績

（論文）

田村未希、課程博士学位論文「存在と知―前期ハイデガーの解釈学的現象学」

（2019 年 10 月 17 日学位授与、東京大学大学院人文社会系研究科）

田村未希、「個体と知の根拠―ハイデッガーにおける解釈学的状況の問題―」、『モナドから現存在へ』

（陶久明日香・長綱啓典・渡辺和典編、工作舎、2022 年 3 月 28 日刊行）

（受賞）

田村未希、ICU 哲学研究会奨励賞

受賞作：博士論文「存在と知―前期ハイデガーの解釈学的現象学」（2022 年 3 月 5 日）

（著書（共著））

『ハイデガー事典』、昭和堂、2021年 6 月21日刊行（田村は「自然科学」、「歴史学」、「プレゼンツ」の項目を担当）

（学会講演・研究会発表等）

国内、田村未希、研究発表「ハイデガーにおける個体化と知の問題―初期フライブルク期講義を手がかりとして―」（2021 年 10 月 30 日、哲学会（東京大学哲学研究室）、オンライン学会、口頭発表.）

国内、田村未希、研究発表「死と歴史性の問題―ハイデガーが提起する問題を手引きとして」（2020 年 1 月 12 日、京都ヘーゲル讀書會、京都教育文化センター、口頭発表）

（社会的活動）

学会

哲学会（2011 年 4 月～現在）

日本哲学会（2016 年 4 月～現在）

日本現象学会（2012 年 11 月～現在）

ICU 哲学研究会（2009 年 4 月～現在）

ハイデガー研究会（2009 年 4 月～現在）

ハイデガー・フォーラム（2009 年 4 月～現在）

実存思想協会（2011 年 4 月～現在）幹事（2013 年 9 月～現在）

（他大学・他部局への出講）

日本赤十字社看護大学 看護学部 非常勤講師「哲学と倫理」担当（2021 年度～現在）

慶應義塾大学 文学部哲学科 非常勤講師「哲学I」「哲学 II」担当（2020 年度～2021 年度）

学習院大学 文学部哲学科 非常勤講師「思想史演習 II」担当（2019 年度～2020 年度）

(3) 特任研究員

坂井 愛理　特任研究員　　社会学

(4) 事務補佐員

安野 裕美

３３　　多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

このプロジェクトは、平成 7 年 4 月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成 5 年度より部分的に試行されてはきたが、平成 7 年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15 名の客員教員（併任教授 5 名、連携教授・助教授 10 名）の参加を得て、本格的にスタートした。発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という 4 つの大テーマが立てられ、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1 プロジェクト平均 3～4 名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められた。なお平成 12 年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

平成 11 年度からは、発足当初の 4 つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた＜情報と文化：文化資源と人文社会学＞は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかに、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成 14 年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトは学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになった。3.11 に関する議論は、平成 24 年、25 年と、継続的に行われ、多分野交流の特質が大いに発揮される内容となった。

平成 25～29 年度には身体論、平成 26～30 年には日本の近代学術受容の問題を扱うプロジェクトが継続開講された。その成果を引き継ぎつつ、令和元年度からは戦前の『哲学雑誌』にかかわるプロジェクトが、また総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」の定例研究会と同時開催の形でもうひとつのプロジェクトが始まった。また令和 3 年度からは学内のギリシア・ローマ・インド・中国・日本の古代研究者の集う「古代学交流」が始まった。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年に数回ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

開講されたプロジェクトは以下の通り。

令和 2 年度（2020 年度）

戦前の『哲学雑誌』を読む（鈴木泉）

サステイナビリティと人文知（堀江宗正）

令和 3 年度（2021 年度）

戦後の『哲学雑誌』を読む（鈴木泉）

サステイナビリティと人文知（堀江宗正）

古代学交流（芳賀京子）

３４　　朝日講座

朝日講座は、朝日新聞社の寄付によって 2011 年度から文学部において開講されている学部横断型の授業である。2011 年度からの 5 年間は「知の冒険――もっともっと考えたい、世界は謎に満ちている」をタイトルとして、全学部共通科目のさきがけとしての機能を果たしてきた。そして 2016 年度からはタイトルを「知の調和――世界をみつめる　未来を創る」に改め、朝日講座第Ⅱ期としてさらに 5 年間延長された（2020 年度で終了）。

朝日講座では、文学部教員が授業内容の企画構想とコーディネートを行い、文学部教務係が履修登録などの事務を取り扱う。また、東京大学大学総合教育研究センター（以下大総センター）に朝日新聞社寄付研究部門が設置され、講座運営を担当する専任の教員がおかれている。歴任者はいずれも人文社会系研究科の出身で、2011 年度～2013 年度は冨澤かな特任助教（宗教学）、2014 年度～2015 年度は白岩祐子特任助教（社会心理学）、2016 年度～2019 年度は開田奈穂美特任助教（社会学）、2020 年度は清水康宏特任助教（美学芸術学）が務めている。毎回の授業では、多様な学問分野からの講師を招き、学生が主体的に議論に取り組むという新しい試みを取り入れてきた。2013 年度からは、履修者が担当の回に分かれて事前に予習をしたうえで授業に臨み、グループワークのリーダーを務めるアクティブラーニングの形式を採用している。専門分野を異にする学生間での議論や学びが実現されていることに加えて、TA が予習や議論の補助に入るなど、大きな役割を果たしていることも、この朝日講座の特長といえる。

このように朝日講座は文学部科目でありながら、全学部後期課程の履修と、大学院生の振替履修を対象とし、文理の枠組みを超えた広い視点を養うことをめざしてきた。

2020 年度は、菊地准教授が担当し、「不安の時代」というテーマを設けた。他者に対する「不安」という観点から個人や社会に不安が生じる背景やメカニズムについて、各分野の講師を招いて議論した（講義情報は文末を参照）。この年度の授業はコロナ対応のため Zoom によるオンライン授業となり、授業後半のグループワークについては Zoom のブレイクアウトルームを使用した。

全学的な教育改革に資する新たな授業の形を提示することが朝日講座の最大の目的であるが、同時にその教育成果を広く社会に還元、共有することも重視している。Web サイト（https://www.u-tokyo-asahikouza.jp/）及びツイッター（東京大学朝日講座　@Asahi_Koza）を活用して講義情報を発信し、また毎年多数の講義を公開講義として一般からの聴講者を受け入れている。さらに、2012 年度からは試行的に希望する高等学校にリアルタイム配信を行うなど、開かれた形態の授業を模索している。高校への配信にあたっては、YouTube Live を利用することで、高校側はリアルタイムでの参加だけでなく、期間限定のアーカイブ視聴も可能となっている。担当者間で把握している限りでは、単位を認定する通常講義の学外への同時配信は本学初の試みである。正規履修者の学びを阻害することのないよう配慮しつつ、2020 年度は 10 校への配信を行った。また、授業の内容については映像記録を残し、著作権処理と編集を加えた講義資料と映像を UTokyo OCW（http://ocw.u-tokyo.ac.jp/）上で順次インターネット公開している。撮影・配信業務は、大総センターの特任助教および技術専門職員が担当し、TA が補助を行っている。

以上のように、朝日講座は、実験的・試行的な要素を多く含む新しい授業である。学部三年生以上の学生にとって意義のある教養教育として、一定の役割を果たすように努力してきたと同時に、東京大学の教育を世間一般に開く公開するための窓口としての役割を担っている。学生に質の良い授業と学びの機会を提供すると同時に、その内容を一般聴講者や高校生にも公開していくために、いっそうの工夫と模索を行っている。

各年度の講義（2020 年度）

2020 年度　テーマ：「不安の時代」

●第 1 回 9 月 30 日　菊地達也　（人文社会系研究科 イスラム学）【公開講義】【高校配信】
「中東イスラム圏における不安とメシアニズム／差別」
＊大学総長選挙実施のため休講

●第 2 回 10 月 7 日　納富信留　（人文社会系研究科 哲学）【公開講義】【高校配信】
「西洋古代が抱えた不安」

●第 3 回 10 月 14 日　安藤宏　（人文社会系研究科 国文学）【公開講義】【高校配信】
「日本近代文学における「不安」」

●第 4 回 10 月 21 日　渡辺慶一郎（相談支援研究開発センター、精神保健支援室／コミュニケーション・サポートルーム）【公開講義】【高校配信】
「精神科医からみる不安」
●第 5 回 10 月 28 日　井口高志　（人文社会系研究科 社会学）【公開講義】【高校配信】
「病いという不安と生きる：認知症をめぐる人びとの実践から」
●第 6 回 11 月 4 日　堀江宗正　（人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター）【公開講義】【高校配信】
「日本人は寛容か――不安から不寛容へ」
●第 7 回 11 月 11 日　清水晶子　（総合文化研究科 超域文化研究）【公開講義】【高校配信】
「望まない他者との居心地の悪い共生」
●第 8 回 11 月 25 日　伊達聖伸　（総合文化研究科 地域文化研究）【公開講義】【高校配信】
「フランス語圏の反イスラーム問題」
●第 9 回 12 月 2 日　石田勇治　（総合文化研究科 地域文化研究）【公開講義】【高校配信】
「緊急事態条項とナチ独裁――民主憲法はなぜ死文化したか――」
●第 10 回 12 月 9 日　佐藤安信　（総合文化研究科 持続的平和研究センター）【公開講義】【高校配信】
「難民から学ぶ「人間の安全保障」：新型コロナが問いかけるグローバルガバナンスへの展望」
●第 11 回 12 月 16 日　福士謙介　（未来ビジョン研究センター）【公開講義】【高校配信】
「環境に関する科学の不確実性と不安」
●第 12 回 12 月 23 日　佐倉統　（情報学環）【公開講義】【高校配信】
「AI を中心とする科学技術に対する不安」
田中郁也　（朝日新聞社 総合プロデュース本部コンテンツ事業部）
「AI・デジタル技術がもたらす希望と不安」